4
Луна, Лайка и Носферату
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
牧野圭祐
ill. かれい
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月とライカと吸血姫　４

吸血鬼ヒロインコラボ記念！　イラスト付き特別版

牧野圭祐

イラスト　かれい

4
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
牧野圭祐
ill.かれい
Луна, Лайка и Носферату

Contents

〈第一章〉 太陽の女王と夜の黒竜 …… 10

〈第二章〉 月への長い道 …… 24

〈第三章〉 統治者たち …… 84

〈第四章〉 二一世紀博覧会 …… 98

〈第五章〉 未来の行方 …… 262

〈 終 奏 〉 Outro …… 340

〈第三楽章〉 吸血姫と翼竜'63 …… 348

Луна, Лайка и Носферату

●Cover & Logo design／Junya Arai + Bay Bridge Studio

バート・ファイフィールド
レフ・レプス
イリナ・ルミネスク
カイエ・スカーレット

「僕を月へ連れて行ってくれる？」
「『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』。月軌道ランデヴー方式で着陸しましょう。さあ、出発のカウントダウンです」
一〇、九、八、七、六、五、四、三、二、一――
リフトオフ。
足もとをふらつかせるカイエに軽く手を掴まれて、バートは黄金の月へ導かれる。

目次

第一章　太陽の女王と夜の黒竜
第二章　月への長い道
第三章　統治者たち
第四章　二一世紀博覧会
第五章　未来の行方
終奏　Ｏｕｔｒｏ
あとがき
第三楽章　吸血姫と翼竜

吸血鬼ヒロインコラボ記念！　イラスト

月とライカと吸血姫（ノスフェラトゥ）4

牧野圭祐
ill.かれい

人物紹介 Луна, Лайка и Носферату

■ バート・ファイフィールド …… 24歳。技術職の青年。『アーナック・ワン』の広報員。

■ カイエ・スカーレット …… 24歳。新血種族の才媛。『アーナック・ワン』の広報員。

■ サンダンシア・ソフィ・アリシア…… 18歳。連合王国の若き女王。

■ ジェニファー・セラーズ …… 29歳。ANSA本部の広報部員。

■ アーロン・ファイフィールド …… 31歳。バートの兄。連合王国初の宇宙飛行士。中佐。

■ ブライアン・デイモン …… 46歳。オペレーション部門長。

■ ミア・トリアドール …… 24歳。新血種族の女性。Dルーム室員。

■ スティーヴ・ハワード …… 七人の飛行士のひとり。軌道飛行のパイロット。中佐。

■ ヴィル・クラウス…… ロケット開発センター責任者。

■ オリバー・キッシング…… 有人宇宙船センター長官。バートやデイモンの上司。

■ リベルテ・スカーレット …… カイエの母。故人。

■ ドミニク・スカーレット …… カイエの父。港湾工場員。

■ レフ・レプス…… 23歳。人類初の宇宙飛行士。共和国の英雄。

■ イリナ・ルミネスク…… 18歳。吸血鬼。世界初の宇宙飛行士。

■ フョードル・ゲルギエフ…… 共和国の最高指導者・政府首班。

■ リュドミラ・ハルロヴァ…… ゲルギエフの側近。文章担当秘書官。

CONFIDENTIAL

「この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません」

United Kingdom of Arnack
首都：
エリクソン特別区
HQ
万博会場
マリンシティ
アーナック連合王国
ロケット開発センター
Imprisoned Island
『囚われの島』
ニューマーセイル市
〈ライカ・クレセント〉
~Like a Crescent~
ロケット発射センター
有人宇宙船センター
三日月区
月影区
RESERCH CENTER
FLIGHT CENTER
MISSILE RANGE

第一章　太陽の女王と夜の黒竜

女王の瞳　Ｑｕｅｅｎ　ｅｙｅｓ

東歴一九六一年、九月。アーナック連合王国はついに有人軌道飛行を達成。祝賀パレードには四〇〇万人が詰めかけ、連合王国史上最大の規模となった。

その記念式典の控え室。

一八歳の若き女王、サンダンシア・ソフィ・アリシアは片隅に腰掛け、ひとり沈んでいた。

ゆるくカールした金髪がうつむく彼女の額にかかる。折れそうなほど細い指先で髪を払い、溜め息いきを吐つく。

「はぁ……」

今日だけで、いったい何度溜息を吐いただろうか。すばらしい日なのに、哀かなしくなるほど気分が晴れない。好物のアップルパイもまったく喉のどをとおらなかった。

軌道飛行の成功には心が震えた。熱いものが頬ほおを伝った。宇宙時代の英雄に夢を見せてもらった。

だからこそ、悩んでしまう。

勲章を与える資格が自分にあるのかと。

全世界に勇気と感動を与える者たちに比べて、自分は何も持たないのだから。

「―スティーヴ・ハワード！　スティーヴ・ハワード！」

宇宙飛行士を称たたえる群衆の歓声が響いてくる。

サンダンシアが縮こまっていると、ドアが開き、王室の首席秘書官が迎えに来た。前国王の時代から王室に仕え、ナイトの称号を与えられた七〇歳の男性だ。

謹厳実直な紳士である彼は、教え子を叱しつ咤たするような声で告げる。
「女王陛下、そろそろです」
「はい……！」
君主の責務を果たさねば。溜息をぐっと呑のみ込む。
悩んでいる顔を国民に見られてはいけない。
鏡の前でがんばって微ほほ笑えみ、愛される女王の表情を作る。しかし威厳や権力とは程遠い。つぶらな瞳ひとみはまだまだ幼い。
サンダンシアはロイヤルファミリーのなかでも随一の美しさで、銀幕スターのような人気を誇る。
しかし真の女王への道は、月への道と同じほど困難に思えた。

連合王国の北東部、首都エリクソン特別区に女王の宮殿はある。バロック様式の壮麗な建物は、一七世紀、独立戦争以前に建てられた歴史あるものだ。
記念式典は夕方まで続き、夜になってようやく帰宮したサンダンシアは『ロイヤルドッグ・ルーム』へ向かう。そこは王室の犬ロイヤルドツグにしつらえられた特別室で、女王の愛犬五頭を専任スタッフが世話している。
「みんな元気だった？」
サンダンシアが部屋に入ったとたん、愛犬たちは尻尾を振って飛びつき、頬ほおを舐なめる。
「ふふ、くすぐったいわ」
小さな栗毛の雌めす犬を抱きかかえ、優しく撫なでる。
「ねぇ、ククーシュカ。あなたのお母様が飛んだ宇宙を、やっと我が国の飛行士が飛んだのよ」

ククーシュカは数奇な運命をたどる犬だ。その母は、一九六〇年に史上初めて宇宙から生還したツィルニトラ共和国の実験犬。

つまり、共和国の最高指導者フョードル・ゲルギエフからの贈り物だ。

べつにサンダンシアが欲しいと望んだわけではない。女王が犬好きと知ったゲルギエフが一方的に送りつけてきたのだ。連合王国の政府は「犬型のスパイではないか？」と疑い、体内に盗聴器が仕込まれていないか念入りに検査した。

だが、問題はなかった。

ようするに、ゲルギエフは宇宙飛行を自慢したかっただけだ。

犬を政治の道具に使うことにサンダンシアは憤いきどおりを覚えたものの、親から引き離されてしまったかわいそうな仔犬に罪はないので、引き取って、ほかの愛犬たちと同じように育てた。

幸いにして『ロイヤルドッグ・ルーム』では両国の争いは起きず、皆仲良く暮らしている。

サンダンシアは窓を開け、幾千の星が煌きらめく夜空を眺める。

「宇宙に蛍……いるのかしら」

スティーヴ飛行士は記者会見で、宇宙で目撃した不思議な光景を報告した。

『―宇宙の闇やみに何百、何千という発光体がまたたいていました。まるで蛍で、崇高な美しさで……あれは神の魔法でしょうか』

帰還後、彼は悟ったように宗教に傾倒しはじめた。発光体の正体は不明だが、神に触れる体験だったのだろう。

「宇宙から見る国は、どんな景色なのかな……」

未知の領域は一八歳の少女の心をつかんで離さない。

サンダンシアが宇宙にはじめて興味をもったのは五年前、一三歳のときだった。共和国による世界初の人工衛星パールスヌイ一号を、病床に

伏していた父と見上げた。
　国王である父は、かつての大戦を勝利に導いた人物として国民の尊敬を集めていた。戦争の指揮を直接執ったわけではないが、空軍と海軍はロイヤルアーミーとして王室に属している。また、国王は国教であるアーナック太陽教の首長でもあり、父は『太陽王』と称された。
「これからは宇宙の時代だ。我が国が宇宙で勝利してこそ、世界に真の平和は訪れる」
　太陽王はパールスヌイ一号が発信した電波信号を凶弾と呼び、宇宙に戦場を見た。
　だが、サンダンシアは違う。
　宇宙に未来を見た。
　多くの国民と同じようにベストセラーのＳＦ小説『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を読みふけり、ロケット開発者であるクラウス博士のテレビ番組に熱中した。
　しかし、死期を悟った太陽王は娘に「勝利の重要性」を説きつづけた。老いた彼に直系の子どもはサンダンシアしかおらず、幼い彼女が跡を継ぐことが決まっていたため、口うるさく教育をした。「これは新たな戦争だ。私が勝利をもたらしたように、お前も君主の使命を果たすのだ」と。
　その結果、サンダンシアはいつのまにか「宇宙は戦場で、共和国に勝たねばならない」と思うようになっていた。
　そして一九五八年。連合王国初の人工衛星を見届けるようにして父は亡くなり、サンダンシアは一四歳で女王となった。
　盛大な戴たい冠かん式しきが執り行われ、国民は若く美しい君主の誕生に歓喜した。
　しかし、サンダンシアの心は重かった。
　王位継承評議会で挨あい拶さつを交わしたときの、重鎮たちの不安そ

うな顔が忘れられない。

　それから四年──
　連合王国を取り巻く世情は悪化の一途をたどっている。
　国内では新血種族ダンピールの差別問題が噴出し、国外では共和国との冷戦。さらに各地での紛争。
　サンダンシアは国政には関与しないが、君主として大きな責任を感じていた。
　けれども、その悩みを解消する方法は見つからず、毎日の公務だけで精いっぱいになる。
　母に相談すると「あなたは公務をこなしていればいいのよ」と相手にされない。首席秘書官に悩みを吐露すると、厳しい口調で返される。
「陛下は不安を表に出してはなりません。いつも太陽のような笑顔でいれば国民は安心するのです」と。
　父のような『太陽王』になり、国民を明るい未来へ導きたい。彼女は痛切に願うが、焦りが募るだけだった。
　そんな日々のなかで安らぎを覚えるのは、愛犬と触れあっているときだけだ。
　犬たちは自分を女王だと特別視せずに、ただの人間として接してくれるから。
　サンダンシアはククーシュカを連れてバルコニーに出ると、いっしょに星空を見上げる。
「私、宇宙で競争なんてしなくていいと思うの……」
　しかしそんなこと、国民の前で絶対に言ってはならない。
「今のは秘密よ、ククーシュカ」

黒竜の瞳　Очи　Цирнитры

ツィルニトラ共和国の首都サングラードにある官邸に、ゲルギエフの怒声が響く。
「まったくの想定外だ！」
連合王国が一九六一年のうちに有人軌道飛行を成功させたのは、共和国にとって思いも寄らぬことだった。ＡＮＳＡの公開文書や諜ちよう報ほう員の情報によれば、本来の打ち上げは来年二月の予定だったのだ。それをまさか、予定を繰り上げて九月に成し遂げてしまうとは。
ゲルギエフはロケット開発主任であるスラヴァ・コローヴィンに電話をし、敵国の飛行について報告を受ける。
「地球を三周する予定を二周に変更した理由ですが、操縦システムに不具合が発生し、さらに耐熱シールドのステータスにエラーが出たからのようです。しかし……テスト飛行をやらずに賭かけに出るとは。恐れ入りましたな」

「うむ。成功は成功と認めねばならないだろう」
　敵を褒めるコローヴィンにゲルギエフも同意する。
　押すときは押し、引くときは引く。引き際を誤らず、引いたら別の箇所を押す。場当たり的に戦を仕掛け、最終的に勝つ。
　姑息とも取れるが、これがゲルギエフのやり方だ。
「ともかく、計画を変えねばなるまい」
　世界が二分されている状況において、宇宙を支配して第三世界に力を示せば同盟国を増える。その考えのもとに宇宙開発に莫大な予算を注ぎ、勝利をもぎ取ってきた。
　世界初の人工衛星、月探査機、金星探査機。
　火星の植民地化を狙ねらいつつ、月を第一目標としたのは、近くに浮いていて利用価値があったからだ。
　そして有人宇宙飛行。
　地球の大洋を航海する大型貨物船に『レフ・レプス号』『イリナ・ルミネスク号』と宇宙飛行士の名をつけ、世界に威容を示す。
　そして連合王国を──ハンバーガーとベースボールしか能がない国を完膚なきまでに叩たたきのめし、白旗を揚げさせる予定だった。
　しかし、奴らは同じ舞台に上がってきた。
「次のパフォーマンスを頼みましたよ、偉大なる同志チーフ！」
　こうしてコローヴィンに指示を出しながら、別の設計局長には別の計画を依頼する。それは極めて独裁的な権力を持っているからこそできる所業だった。
　だが順風満帆ではない。
　昨秋にアルビナール宇宙基地で起きた大爆発で優秀な人材を失ったことは、大きな痛手となっていた。それに加え、政治局内で激烈な権力闘争が起きている。もし弱気を見せたり、つけいる隙すきを与えたりすれば、後ろから刺されるだろう。

電話を切ったゲルギエフは、傍かたわらで苺の砂糖煮ヴアレニエを食べている女性から原稿を受け取る。
連合王国の軌道飛行成功に対する祝電だ。
「どうかしら？」
スピーチライター兼アドバイザーを務めるリュドミラ・ハルロヴァは、企みでもあるように深緑色の瞳ひとみを細める。
祝電を確認するゲルギエフの眉み間けんに皺しわが寄る。
『―宇宙に到達した才知が、地球の平和、そして人類の繁栄につながる道を作ることを私は望みます』
連合王国の偉業をひたすら褒めたたえる甘ったるい文章がつづく。そして終わりに近づいたところで、核心に触れる。
『―宇宙の平和利用において、我々両国に特別な責任があることは明白な事実です。そこで、もし、宇宙開発において手を取りあえれば―科学技術や資材の面で共同出資による協力ができれば―それは科学の進歩にとって、また軍縮に向けて、すばらしい第一歩となるでしょう』
「ふむ……」
ゲルギエフはまんざらでもない顔で、共同開発に関わる箇所を指でなぞる。
じつのところ『平和利用に関わる科学技術分野』においては、一年以上も前に共同開発の協定が結ばれていた。その協定は両国の政府間ではなく、共和国立科学院とＡＮＳＡのあいだで締結されたものだが、宇宙医学と生物学などで効力は発生している。
だが、互いに相手の出方を窺うかがう状態がつづき、いまだ何も成されていない。
そもそも共和国は技術を秘ひ匿とくしており、さらけ出す気などさらさらなかった。
そしてこの祝電も同様、けん制の意図が強い駆け引きだ。

　リュドミラは舌にのせた砂糖漬けの苺いちごを美う味まそうに飲み込むと、別件について切り出す。
「『アンドレイ』の予定日だけど、一〇月三〇日になりそう」
　極北の秘密都市で産まれる『アンドレイ』。
　その名を聞いたとたん、ゲルギエフの表情がひまわりのように輝く。
「そうか！　かわいい我が子の生誕を祝わねばなるまい！」
「あと、贈り物の件はどうするの？」
「極秘で進めろ。来年の革命記念日に、全世界に発表できるようにな。あれは両国のためになるものだ。宇宙飛行士に届けさせればきっとよろこんでくれるだろう」
　連合王国の南の海上に、共和国と親しい国があった。その島国について、連合王国はこともあろうに、『囚とらわれの島』と名づけた。共和国に自由を奪われたと哀れみ、国家転覆を狙ねらって出兵までしたのだ。敵陣営に囲まれて孤立させられている島国を、ゲルギエフは憂ういている。
「ハンバーガー野郎の好き勝手にはさせん」
　世界は我の手中にある。
　そう言いたげに、ゲルギエフは地球儀を回して冷笑した。

一九六一年四月、共和国のレフ・レプス飛行士が人類史上初の有人軌道飛行を達成。
その祝典においてゲルギエフは連合王国に挑戦状を叩きつけた。
「――近い将来、我々は月に到達する」
これに端を発する『有人月面着陸競争』。
いっときは絶望的な差をつけられた連合王国だが、同年九月、地球軌道の有人飛行を成功させ、超大国としての面目は保った。
だが、二八万キロ先に浮かぶ月は、果てしなく遠い。
共和国がすでに成功を収めている『月面撮影』に国立宇宙局（ＮＡＳＡ）は挑戦するも、一号機は失敗に終わり、続く二号機も打ち上げに失敗。
三号機は月面衝突を狙ったが目標を大きく逸れ、月からの距離およそ四八〇〇〇キロメートルの地点を通過。アンテナが地球方向を向いていなかったため、受信した電波は解読不能だった。
未来へつながる成果は、ひとつ。
一九六一年一〇月、大型多段式ロケット『クロノスＩ型』の打ち上げ実験に成功。
クロノスは、これまでのロケットと大きく異なる点がある。はじめて宇宙開発専用として造られたもので、軍用ミサイルの転用ではない。その馬力や搭載能力（ペイロード）は地球軌道飛行に使用したロケットをはるかに上回る。

だが、『I型』では宇宙空間に一歩を踏み出したにすぎない。月への有人飛行を可能にするには、さらなる搭載能力の向上と試験の積み重ねが必要だった。

片や、共和国。

一九六二年八月にミハイル・ヤシン飛行士の『一日以上宇宙に滞在する軌道飛行』を成功させて以来、宇宙開発においては目立った動きはなく、不気味なまでに沈黙している。

宇宙で熾烈な競争が繰り広げられる一方、地球上での対立も激化していた。

極東地区では、連合王国と共和国が支援する国同士が戦争になった。連合王国は軍事援助司令部を設置し、大量の軍隊を派兵。この代理戦争は泥沼化し、多くの死者を出すことになる。

さらに地球各地へ冷戦は波及する。

諜報合戦、政権転覆、破壊工作、そして暗殺。共和国では家族が互いを監視し、隣人を盗撮する。連合王国では諜報員を探し出すために盗聴、郵便開封、家宅侵入が行われる。

宇宙開発が停滞し、世界の緊張が高まるなか、時代は一九六二年の春を迎える。

第二章　月への長い道

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

　打ち上げられた小型衛星が白線をたなびかせ、鮮やかな夕空の果てに消えていく。
「成功だ！」
　わっと歓声を上げたのは、新血種族の子どもたちだ。
　州花のマグノリアが町を彩る四月初旬。月げつ影えい区くの平原で、バートとカイエは子ども相手の科学教室を開いている。ＡＮＳＡの広報活動『アーナック・ワン』とは別に、カイエは自主的に新血種族に向けた啓けい蒙もう活動をしており、バートは毎週のように付き合っていた。
　小型衛星を見送ったカイエがバートに声をかける。
「ごめんね、休みの日に。私が工作得意ならひとりでやるんだけど……」
　不器用なカイエはバートによく助けを求めた。
「大丈夫。予定があるわけでもないし。何より、カイエが小型衛星を作ったら、誤射してミサイルと勘違いされるでしょ」
「ちょっと!?」
　ムッとするカイエだが、子どもたちがバートに同調する。
「そのとおりだよ！」
「えー!?　みんなしてひどい……」
　からかわれても、カイエは楽しそうだ。以前は宇宙が好きなことをひた隠しにしていたが、今では笑顔で語れるのだから。
　昨年九月、有人軌道飛行の打ち上げ日に大行進をしたが、先導した彼女に白い目を向ける新血種族もいた。人間至上主義の団体から嫌がらせ

の手紙が届きもした。目立てば目立つほど叩たたく者も増える。
　しかし、多くの者は彼女に好意的だった。
　科学の最先端で活躍する彼女を、新血種族はスポーツ選手のように誇り、人間は共和国に対抗する魔法使いだと期待する。
　とはいえ、新血種族全体に対する差別や待遇が改善されたわけではない。
　行進のあとにカイエが訴えた内容を報じなかった人間寄りのメディアも多く、いまだ種族分離の看板がそこかしこに残り、各地では人間と新血種族の小競り合いが激しさを増している。
　民族融和など遠い未来の話だろう。
「ねえバート、二回めの打ち上げをしましょう」
　笑顔で言うカイエの手に、いびつな筒がある。
「……それ、君が作ったやつ？」
「……何よ、その怯おびえた目は……」
　不満げな彼女をよそに、バートは冗談まじりで子どもたちに警告する。
「みんな避難して！　カイエがミサイルを飛ばすぞ！」
　蜘く蛛もの子を散らすように子どもたちが走って逃げ、バートも駆け出す。カイエの「あー！」という大声を背中に受けて、子どもたちと走りながら思う。
　まさか新血種族と親しくなるなんて。
　きっかけはカイエだ。
　綿花畑に囲まれた丘陵でランチをしていたとき、彼女に小型衛星を打ち込まれてから、まもなく一年。
　最初は話しかけることすら躊ちゆう躇ちよしたのに、今や月を目指す同志だ。
　バートはＡＮＳＡに入ってさまざまな経験をしたが、彼女との出会い

が一番大きい。彼女の研究に取り組む姿勢や想いの強さに感銘を受け、今の自分がある。軌道飛行成功の式典で女王から祝福されたのは、もちろん彼女あってのことだ。

その感謝の気持ちを彼女に伝えると、「あなたが励ましてくれたお陰」と謙けん遜そんされたが。

バートは足を止めて、カイエのほうを振り向く。

すると、カイエは小型衛星をひとりで打ち上げるところで、見てなさいという顔でスイッチを押した。

「あ」

案の定、打ち上げられた小型衛星は迷走。

天あま翔かけるそれは、まるで追尾誘導ミサイルのように──

バートに向かってくる。

「うわぁ！」

「避よけて！」

バートとカイエの叫び声が夕暮れに木こ霊だました。

四月一二日はレフ・レプス飛行士による人類初の宇宙飛行が行われた日だ。

共和国はその偉業を記念して『宇宙飛行士の日』なる祝日を制定し、サングラードで盛大なパレードが催された。

その様子は世界各国でニュースになり、バートは自宅のテレビにかじりつく。

礼装軍服姿のレフが先頭に立ち、屈託のない笑顔で大群衆に手を振る。隣では日傘をさしたイリナ・ルミネスクが面映ゆい微笑を浮かべていた。

「大人っぽくなったな……」

ぽつりとバートは独りごちた。

一年前の凱がい旋せん式典に現れたイリナを見たときは「こんな幼い少女が宇宙を飛んだのか？」と目を疑ったが、今の彼女は立ち姿からして違う。

きらびやかな礼装を伯爵令嬢のように着こなし、成熟と幼さ、光と闇やみを同時に抱かかえたような神秘性を漂わせている。

純血の吸血鬼ノスフエラトウは、新血種族であるカイエとはまた別種の美しさだ。

そんなイリナが史上初の宇宙飛行を達成したのは一九六〇年の一二月一二日だったと共和国は昨年公表したが、飛行の詳細はいまだ伏せられており、今回のレフのように大々的に祝われることはなかった。

吸血鬼が共和国内でどういった扱いを受けているのかバートは知るよしもないが、好待遇ではないだろう。

ニュース番組がＣＭに入ると、最近よく耳にする大ヒット曲が流れてきた。

〈君を月に連れて行きたい。フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン〉

Ｄルームのスローガンが独り歩きして曲のタイトルと歌詞に使われているのだ。とはいえラブソングで、新血種族ともコンピューターともいっさい関係ないのだが。

この曲に限らず、世間の宇宙ブームは急激に加熱している。

国内外で暗いニュースが多いため、未来を感じさせる宇宙科学はひときわ輝き、皆の期待を集める。

そんな時流に乗り、バートたちの住むライカLike　a□クレセント crescentは大きな発展を遂げている。

バートとカイエの所属するケイリー研究所は用地を拡大して『有人宇宙船センター』と改称された。その名のとおり、宇宙船にかかわる業務全般を担う。研究開発棟だけでなく宇宙飛行士の養成施設も整備され、

湾岸地区のロケット発射センターには新施設が建設される。
　新たに長官として就任したオリバー・キッシングはエリート中のエリートだ。ＡＮＳＡ本部でも高い地位を持つ工学博士で、首相に対しても宇宙開発のアドバイスをしている。
　こうして『有人宇宙船センター』は名実ともに有人月面着陸計画『プロジェクト・ハイペリオン』の本部となり、八〇〇名だった職員は三〇〇〇名まで増員されていた。
　この流れに金の匂いを嗅ぎつけた企業がわんさと周辺地区に押しかけ、大学はＡＮＳＡと提携して宇宙科学部を新設。まさに『宇宙の街』である。
　宇宙ブームの経済効果は新血種族にも波及している。
　カイエに憧あこがれる者たちがＡＮＳＡの採用試験を受け、各地の宇宙関連施設で働きはじめている。合格者数はけっして多くないが、カイエは「少しは歴史が変わったかな」と目を細める。
　そして今日も一名、Ｄルームに新血種族の新人女性が入ってきた。彼女を誘ってＤルームの職員一同でランチをとっていると──
「からいっ！」
　トマトスープを飲んだ彼女が悲鳴をあげた。朱あかい瞳ひとみが涙で潤んでいる。
「ＡＮＳＡって、この味付けが普通なんですか!?」
　普通ではない。
　教育係であるミアからの洗礼だ。
　バートは隣のカイエに小声で話しかける。
「恒例行事になってるね」
「これで辞めなきゃいいけど」
　ふふっと密ひそかに笑い合う。
　Ｄルームの面々──リベルテ・エンジェルは『プロジェクト・ハイペリ

オン』の開発チームに入っている。フライトディレクターを務めるデイモン部門長の推薦もあってのことだが、有人軌道飛行での実績を高く評価されていた。

バートがうれしく思うのは、Ｄルームは今や単なる計算室扱いではなく、宇宙船の誘導・航法グループの一員として認められたことだ。

宇宙工学とコンピューターの両面にくわしい者はＡＮＳＡ内にも少なく、工学知識のあるバートとカイエを擁するＤルームに白羽の矢が立てられた。日常の計算業務以外に、月着陸船に搭載される小型計算機用のソフトウェア設計、そしてプログラミングの研究開発という役目を与えられている。

以前は『吸血鬼の巣』という蔑べつ称しようで避けられていたＤルームも、今ではそう呼ぶ者は激減している。『予算を食う巨象ホワイト・エレフアント』扱いされていたコンピューターも市民権を得て、超高額の新型コンピューターが導入された。これに伴う増員で、ＡＣＥ社の社員──スティーヴ飛行士の打ち上げに携わった人間男性三名が常勤スタッフとなった。

人間と新血種族のあいだには、心理的な壁や遠慮は当然ある。

しかし、宇宙開発という共通言語があるため、世間一般に比べればはるかに互いを尊重し、理解し合える。

ＡＣＥ社員たちは口々に言う。

「バートとカイエの仲がいいから、僕らも溶け込みやすいんだよ」

バートは照れくさいやら、うれしいやら。

カイエもエヘヘと恥ずかしげに笑う。

人間男性の仲間が増えて心強いバートだが、安あん堵どしてばかりもいられない。

在籍期間ではバートが先輩だが、コンピューターの専門家として生きてきた彼らに比べれば知識も腕も下だ。

しっかりしなければ、形だけの先輩になってしまう。
そんな腕の立つＡＣＥ社員もカイエには一目置いている。
彼女が認められ、褒ほめられるのは、バートは同僚として誇らしい。しかしその反面、彼らとカイエが笑顔で話し、カイエが彼らに仕事を頼むのを見ると、少し嫉しつ妬とめいた気持ちを覚えることもあった。
仕事に集中しなければならないのだが、バートはパンチカードを整理しつつ、ぼんやりとカイエを遠目に眺めている。
と、背筋をすーっと硬いものが這はった。
「うあああっ！」
心臓が止まりかけ、パンチカードが手から雪な崩だれて大惨事になる。
振り向くと定規を手にしたミアが刑務官のような目つきで立っている。
「集中力の欠如は大事故を生む」
「す、すみません……」
カイエやＡＣＥ社員の訝いぶかしげな視線を浴びながら、バートがせっせとパンチカードを拾い集めていると、ミアにジロジロと覗のぞき込まれる。
「な、なに……？」
「監視」
「はい……」
ともかく、夢をともにする仲間が増えて、月へ向かう体制が整ってきた。
誘導計算をリアルタイムで解くための研究をして、宇宙船の制御技術を考え、シミュレーターに打ち込んでテストする。
そして月へ一直線──
とはいかず。

軌道飛行が成功したといっても、しょせんは地球周回にすぎず、一いつ気き呵か成せいに月が狙ねらえるわけではない。

誰も見たことのない巨大なロケットで超高性能の宇宙船を打ち上げ、三八万キロの地点を秒速一キロという高速で動く月に、安全に宇宙飛行士を着陸させる。それで終わらず、今度は月から地球への帰還があり、大気圏再突入を成功させて生還させる。

言うのは簡単だ。

しかし実現するには未解決の難問が山積みだった。

未解決の課題は大きく分けて五つ。

第一に、宇宙空間における、複雑な航行技術の確立。具体的には宇宙船同士のドッキングやランデヴー並行飛行が挙げられる。

ランデヴーとは複数の宇宙船が機体を合わせて並行に飛ぶことを指す。今後さまざまな面で必要とされる重要技術だ。

第二に、月面の探査。月面写真撮影プロジェクトはべつの研究所が担当しているが、失敗つづきだった。

第三に、宇宙飛行士について。人材育成と、宇宙船内の環境システムの構築。

第四に、宇宙船を月に送る大型ロケットの実用化。

第五に、宇宙船を月に離着陸させる手段の完成。

どれも困難だ。

これまで多くのＳＦ小説が書かれてきたが、月面着陸に成功する年は七〇年代以降が多数を占めている。つまり、六〇年代の成功を目指す『プロジェクト・ハイペリオン』は、空想を超えねばならないのだ。

その達成に向けて一丸となるべきなのだが、問題は技術面だけではなかった。

「また宇宙船の仕様変更だよ」

書類の束を抱えたバートが告げると、Ｄルームは溜め息いきで満たされる。

有人宇宙船センター内のチームや課は再編や改称を繰り返し、そのたびに計算がやり直しになる。これについてはデイモン部門長も被害者のひとりだった。組織が肥大化し、関係各所の調整が難航している。

誰が悪いというわけではない。

問題の根本は、宇宙開発が人類の歴史上、もっとも巨大なプロジェクトとなっていることだ。

たとえば、月面着陸用のロケットと宇宙船の部品の総計は七〇〇万個になる想定で、機械工学とは無縁だった分野も深く関わってくる。

しかし、科学技術の急激な発展に、社会の仕組みが追いついていない。しかも宇宙計画はＡＮＳＡだけのものではなく、予算を出す政府の意向が強く出る。そこへ試作や生産を受け持つ民間企業や軍部が絡み、さらにリーダー格の科学者や技術者同士の考えや利潤が衝突し、方針が定まらない。

そのいざこざが弱小部門であるＤルームを直撃していた。

「休憩しましょう……」

カイエは作業の手を止め、両手を広げて大きく伸びをする。

「廃棄するパンチカードを積み重ねていったら、月まで届いちゃうかもね？」

「笑えないって……」

計算の内容について、以前は伏せられていた計算の詳細は明記されるようになったが、お陰で開発の迷走っぷりがはっきりとわかるようになった。

依頼されているソフトウェア設計も同様だ。

ミッションの仕様も目標も週替わり。にもかかわらず「とりあえずやってくれ」とあちこちの部署から指示が飛んでくる。見切り発車のう

えに目標が不明という最悪の状態だ。
　そんな組織間における不毛な争いに思うところは多々あるが、バートたち一般職員に口を挟む権利などない。
　いや、物申したところで解決策を提案できるわけでもないのだ。
　果てしない宇宙の闇やみを手探りでさまよい歩く日々。とくに新人職員は堪こたえているらしく、日に日に士気が落ちている。コンピューターまでビービーと悲鳴を上げ、誰もが絶望に落ちかけたそのとき。
「でも、未知への挑戦なんだから、困難や障害があって当たり前だよね」
　カイエは勢いよく立ち上がると、壁に貼られたボロボロの布地を指す。
　それは行進のとき、世界に向けてかざした旗。
『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』
「私たちが月へ連れて行くのよ。そうでしょう？」
　カイエの鼓舞に皆が顔を明るくし、前向きな気持ちを取り戻す。
「私たちにしかできないことをやりましょう！」
　バートも呼応する。
「カイエの言うとおりだ。Ｄルームのなかだけでも想いをひとつにしよう」
　パンチカードを積み上げていけば、いつかは正解にたどりつく。
　天体力学やさまざまな理論を数字へと置き換え、月への道を少しずつ築いていこう。

　Ｄルームでの日常業務の傍かたわら、バートとカイエは広報活動の『アーナック・ワン』も継続している。宇宙熱の高まりを受けて、ふたりは国内のどこへ行っても歓迎され、雑誌や新聞に何度も登場し、大規

模な謝肉祭にも担ぎ出された。
　ふたりはけっして目立ちたいわけではない。
　しかし宇宙開発には天文学的な血税を使う以上、広報や啓けい蒙もう活動は重要だと使命感を持って務めている。
　そんな折、ふたりは所内の広報室に呼び出され、ＡＮＳＡ本部の広報官であるジェニファー・セラーズから指示を下される。
「来月『二一世紀博覧会』への参加が決定したわ」
　告げられてバートは心が躍る。
　連合王国北西部の都市・マリンシティでまもなくはじまる万国博覧会だ。万博の実行委員会は共和国とその周辺国にも参加を要請したが拒否され、結果、半年間の会期に世界各地から二四の国が参加する科学の祭典となった。
　テーマは『宇宙時代の人類』。
　今から約四〇年後に訪れる二一世紀の未来空間が会場内に創られる。そして、このテーマには自国の科学技術力を世に示す以外に、裏の目的があった。
　求人だ。
　共和国に後おくれをとっている連合王国は巻き返しを図るため、数万人規模の才能を集めたい。宇宙科学は単一の学問ではなく、物理学、化学、生物学などあらゆる分野の人材が必要になるのだ。
　募集要項には『即昇給、即昇進』『有名になれる』『国内外へ旅行できる』などの惹じやつ句くが並ぶ。
　しかし、なかなか才能は集まらない。
　そこで、政府は一大イベントである万博を利用することを思いつく。政府は科学館を建設するために多額の補助金を出し、ＡＮＳＡは展示用に衛星やロケットの模型を貸し出すなど全面的に協力。来場を呼びかける宣伝広告にも大金を投じた。

それゆえ、バートとカイエが広報目的で行くのは当然といえば当然だった。

じつは、バートはもともと休暇申請して自費で行くつもりだったのだが、経費で行けることを心の片隅で期待していた。

だから、最高の気分だ。

それに孤独に行くより、カイエと回った方が楽しいに違いない。

「バート、なにニヤついているの」

ジェニファーに注意されて、ハッと顔を引き締める。

これは業務だぞと自分に言い聞かせる。

その横で、カイエが目をキラキラさせる。

「パビリオンを回るんですか？」

彼女も万博に行けることがうれしいのだろう。

それに対して、ジェニファーは淡々と答える。

「それもだけど、メインは別。『宇宙の平和利用に関するカンファレンス』というイベントが三日間にわたって開かれるんだけど、ふたりはその最終日に、コンピューター技術者の代表として登壇してほしいの」

「わかりました！」

バートは胸を張って即答し、カイエも頷うなずく。広告塔に任命されて半年以上経った。慣れもあり、もう狼狽うろたえることもほとんどない。

ふたりの了承を得たジェニファーはスケジュールの説明をする。

「マリンシティは遠いから二泊三日の出張ね。五月一一日に出発して前日入り。一二日にパビリオンを回って来場者と交流。一三日にカンファレンスに参加して夜には帰る。ところでカイエ、あなたが不在になるあいだ、Ｄルームの室長代理を誰か指名してほしいそうよ」

カイエは少し考えて「ミアに頼みます」と答えた。

ミアは教育係を任されているように能力が高くて面倒見もよく、周囲

からの評価は高い。悪戯いたずらが多いのは玉に瑕きずだが。
　バートはジェニファーに問う。
「カンファレンスはどんな内容なんですか？」
「まだ詳細は決まってないみたいだけど、宇宙開発全般についてだって。はい、これが簡単な資料」
　いっさい興味がなさそうなジェニファーがぱさりと資料を投げ置く。
　カンファレンスはマリンシティの商工会が主催し、ＡＮＳＡのほか、非営利の宇宙開発団体がスポンサーとして名を連ねる。科学者による研究成果の発表が中心だが、州知事や政治家も参加するため、開発予算獲得のプレゼンの意味合いが強いようだ。
　資料をめくると、登壇予定者の名前がずらりと並んでいる。
「……ちょ、これは……」
　豪華な面々に面食らう。
　開催初日の挨あい拶さつは首相。
　ロケット開発責任者のクラウス博士。
　有人宇宙船センター長であるキッシング長官。
　ほかにも、ＡＮＳＡの幹部や政府の科学諮し問もん委員、大手航空機メーカーの重役など、著名人ばかり。
　一般職員のバートはあまりにも場違いで、舞台上で彼らに囲まれる姿を想像するだけで身震いする。まったく発言できずに終わったらどうしようか。
　ついさっき威勢良く快諾したばかりだが、もう萎い縮しゆくしているバート。そこへ追い打ちをかけるようにジェニファーは冷淡に言う。
「あと、そこには書かれてないけど、ふたりが登壇する日には女王陛下が傍聴者として参加する予定よ」
「じょおうへいか……!?」
　動揺が一気に倍増する。

昨年の式典でサンダンシア女王と対面したとき、バートは微ほほ笑えみかけられただけで硬直し、まともに挨拶を返せなかった。それでも彼女の方からにこやかに話しかけてくれたので、なんとか会話は成り立ったが。

ともかくサンダンシアは王室独特の高雅な気品に溢あふれ、住む世界が違うとバートは感じた。

「い、いやぁ、プレッシャーだな。ねぇ、カイエ……」

怖おじ気けづくバートに比べて、カイエはいつもどおりの笑顔。

「光栄だね。緊張するけどがんばらなきゃ！」

「そ、そうだね！」

カイエの前向きな姿勢にはいつも勇気をもらう。

「まったく。相変わらずカイエのほうが頼りになるわね」

ジェニファーもすっかり彼女を評価していて、昨年出会ったときに見せたような差別的な態度はいっさい取らなくなっていた。

バートはさっそくカンファレンスに向けての準備をはじめる。

議論の詳細は未定だが、知識の底上げをしないと話についていけないことは容易に想像できた。そこで、通常業務終了後、カイエとともに所内の資料室にこもり、ＡＮＳＡの公開文書や科学論文、文献を読み漁あさる。

しかし、宇宙科学は日進月歩だ。昨日の『正』が今日には『誤』になる。さまざまな分野が混じり、造語や新語が日々生まれる。

「これは、組織間の意思疎通ができないのもわかるね……」

脳みそが飽和したバートはぐったりと机に突っ伏す。

正面では、カイエが大量の資料を目で殺すがごとく処理している。もしかして映像記憶で覚えているのだろうか。

カイエが読み終えたところで確認すると。

「うん、だいたい頭に入った」
　角砂糖をかじりながら彼女は照れ笑いを浮かべる。
　プレッシャーだ。月面着陸までに、彼女のパートナーとしてふさわしい人物になれるだろうか。
　毎日毎日、精を出してがんばっているが、長い時間をいっしょに過ごしていると、いつしか勉強から離れて雑談になることもしばしば。とくに万博の話で盛り上がる。テレビでは連日ＣＭが流れ、科学の祭典への期待はむくむくと膨らむ。
　万博のパンフレットを見ていたカイエが声を弾ませる。
「業務で行けるのうれしいわ。遠くてお金もかかるし、仕事を休むのも抵抗があったから」
「じつは僕も同じこと考えてた」
「……楽しんだら公私混同かな？」
「じゃあ、デイモン部門長みたいに、しかめっ面つらの無表情で回る？」
　バートが冗談を口にすると、カイエが小悪魔の顔をする。
「あー。言っちゃおっかな？」
「やめて！」
　あははとカイエは牙きばを見せて笑い、髪を尖とがった耳にかける。彼女と種族が違うのは事実だが、そのことは時折ふっと思い出す程度だ。それほどバートは自然に接している。
　カイエはパンフレットをうきうきとめくる。
「でも、ほんと楽しみ。ほら、宇宙旅行を体験できる展示もあるみたいだよ」
　宇宙への夢と憧あこがれを隠さなくなった彼女といると、いつまでも話していたい気持ちになる。

最終バスがなくなると、バートはカイエをバイクの後部シートに乗せ、月げつ影えい区くまで送っていく。

どちらから誘うでもなく、送るのはもはや日常になっている。以前カイエは技師用のヘルメットを被かぶっていたが、今ではバイク用のヘルメットを持っている。

春の夜風が心地いい。

ほどなくして、かつてカイエが吸血鬼症候群ノスフエラトウ・シンドロームを発症した森の横をとおりすぎる。あの件は彼女の気持ちを考えると触れにくいので、話題に出すことはない。だが、泣きながら血を吸っていた姿はまぶたの裏に焼きついている。

もう二度と彼女の涙を見たくないとバートは思う。

彼女にはいつも笑っていてほしい。

ある夜。いつものようにカイエを家の近くまで送り届けて、帰ろうとしたとき。

「あのっ、バート……」

月明かりに照らされた彼女の顔は、どこか緊張を帯びている。

「どうしたの……？」

「あ、あの……」

「ん？」

彼女の緊張がバートにも伝わってくる。

「あなたが、もしよければ、その……」

何を言うつもりだろうか。

まさか──

カイエは恥ずかしげに、ゆっくりと口を開く。

「ゆ……ＵＦＯ観測に行かない？」
「……え？」
　ＵＦＯ？
　耳を疑う。カイエは頬ほおを染めつつも、真剣な表情だった。
「ゆーふぉーって……未確認飛行物体？」
　聞き返すと、彼女は子どものようにこくりと頷うなずく。
「月げつ影えい区くの南の空に出現したって噂うわさが……」
　以前からＵＦＯの目撃事例はあったものの、ここ最近は宇宙ブームに比例するように目撃数が増加し、「ＵＦＯに誘拐された」と訴える夫婦まで現れていた。そして国立電波天文台で地球外知的生命体の探査が行われる一方、飛行物体は共和国によるスパイ衛星の可能性もあるため、政府は空軍内にＵＦＯ専門の調査機関を設置した。
　宇宙人の存在についてバートは半信半疑だが、広大な宇宙のどこかには知的生命がいるのではないかと期待している。
　しかし。
「ＵＦＯ観測か……」
　彼女の口からそんな言葉が出るとは意外だった。それを彼女自身も自覚しているからこそ躊ちゆう躇ちよしたのだろうが。
　バートの疑念を察したのか、カイエはあたふたと言い訳をする。
「あの、宇宙人っていうか、未知のものに興味があるの……でも、ひとりでＵＦＯを探すのは、ちょっと、その……」
「なんでひとりは嫌なの？」
「そ、それは……」
　カイエは目を伏せ、口ごもる。妙な怯おびえを醸かもし出す彼女を見て、ひとつの推測がついた。
「もしかして、宇宙人が怖い？」
「うぐっ！」

　カイエの顔がこわばる。
「怖いの？　誘拐されると思ってる？」
「そっ、そんなわけないよ!?」
　図星だろう。
　わかりやすい反応にバートは悪戯いたずら心ごころが芽生え、もう少しからかう。
「ＵＦＯに誘拐されると、小さな灰色の男たちに身体からだのあちこちを調べられるらしいね。お腹なかに検査針を突き刺されたり、歯を変な機械で引っ張られたり……」
「いっ……」
　カイエは腹部と口を手で押さえた。赤水晶のような瞳ひとみがゆらゆら揺れる。
「ほら、やっぱり宇宙人が怖いんだ。だからひとりは嫌だって……」
「ち、違うのっ！」
　カイエは胸の前で手を振って、しどろもどろになりながら早口で言う。
「ひとりだと、ソーラーフレア・クラブが怖いし、目撃地点が遠くて歩いて行けないし、それに、ＵＦＯを見たって言ってもひとりじゃ証明できないから……ほかにも、ええと……ミアに『ＵＦＯってどう思う？』って訊きいたら鼻で笑われたし……」
　必死すぎてかわいそうになってきたのでバートは首を縦に振る。
「わかったわかった。付き合うよ」
　バートの賛同を得たカイエの眼まな差ざしに安あん堵どの色が蘇よみがえる。
「よかった……！　ありがとう！」
「僕もＵＦＯには興味あるし」
　とは言っても、新血種族を忌み嫌うソーラーフレア・クラブに出くわ

す可能性の方が高いだろう。もし追いかけられてもバイクならば逃げ切れるはずだ。
「じゃあ、次の日曜、もし予定がなければ行く？」
「うん！　目撃例が多いのは夕方なのよね。持ち物は―」
　カイエはあらかじめ考えていたらしき計画をうきうきと口にする。
　バートは相づちを打ちながら、プライベートでも彼女と過ごせるよろこびを噛かみしめる。
　ＵＦＯに興味があるのは嘘うそではない。
　ただ、もし興味がなかったとしても、彼女の誘いは断らなかっただろう。

　月げつ影えい区くのさらに南、生命力豊かな野草が繁茂する湿原のほとりで、バートとカイエはＵＦＯ観測をしていた。
　一六時に到着し、ビニールシートを広げて横並びに座り、空を眺めつづけて三時間近く経過した。
　だが。
「全然出てこない……」
　カイエは天に向けてぼやく。
　空を飛んでいるのは鳥や飛行機ばかり。観測しているのはふたりだけで、端から見ればバードウォッチングだ。
　用意してきた飲み物やバタークッキーはまもなく底を突く。連合王国の南部は日が長いとはいえ、もうすぐ夜が訪れる。
　勢い勇んでいたカイエはすっかり元気を失い、深々と頭を垂れる。
「ごめんね……」
「ううん。未確認の飛行物体なんだから、そんな簡単には見つけられないでしょ」

バートはＵＦＯの出現にはさほど期待していなかったので、真剣に謝られると逆に申し訳ない。しおれた植物のように元気をなくしてしまったカイエを励ます。

「まあ、たまには業務を離れてのんびり過ごすのもいいものだよ」

湿った風がときおり春の花の甘い香りを運んでくる。赤く燃える夕陽は地平線に沈んでゆき、桃色と紫色のグラデーションがかかった空には月や星が姿を現す。

今日は満月だ。

カイエがぽつりとこぼす。

「……本当に月に行けるのかな」

「なんとも言えないよね……」

またしても宇宙船の設計に仕様変更があり、パンチカードの墓ぼ標ひようがひとつ増えていた。

『プロジェクト・ハイペリオン』のロードマップでは「一九六七年に有人月面着陸」と設定されているが、今の状態では、達成はおそらく困難だろう。

とくに問題なのは、計画の心臓部の方針が定まらないことだった。

それは、『宇宙船を月に着陸させたのち、無事に地球に帰還させる方法』。

月面離着陸こそが、プロジェクトの最難関だ。

この課題について、ＡＮＳＡ内では意見がふたつに割れていた。

ひとつは、『直接降下方式』。これはバートが所属する有人宇宙船センターが推し進める方式だ。

もうひとつは、『地球軌道ランデヴー方式』。こちらはクラウス博士率いるロケット開発センターが推し進めている。

ＡＮＳＡにおいて有人宇宙船センターは巨大な組織だが、ロケット開発センターはさらにその上をいく開発機関だ。ＡＮＳＡの全職員二〇〇

〇〇人のうち六〇〇〇人が所属しており、その数は有人宇宙船センターの倍になる。

両者の案のうち、どちらかが優れていればそれで進むのだが、どちらも技術的な問題を抱えていた。

まず『直接降下方式』は、地球から打ち上げた宇宙船が月面に直接着陸し、探査を終えたあと、月面から再び地球に向けて打ち上げるというシンプルな方法だ。

この方式の問題は帰還にある。

現在開発中のロケット『クロノス』ではいくら改良しても搭載重量に限界があり、月面から帰還するための燃料が載せられない。往復分の燃料を搭載するには超大型ロケット『ギャラクティカ』が必要だった。

ただ、『ギャラクティカ』は現時点では紙の計画書があるだけの、空想上の怪物ロケットだ。作り上げるには予算を食い潰つぶすほどの莫大な費用がかかるうえに、技術的にも一〇年以内の完成は不可能だというレポートが出ている。

この方式について、かつてはクラウス博士も「シンプルで良い」と肯定していたが、実際に着陸や使用燃料について計算をした結果、一転「無理」と判断を下した。

それゆえ『直接降下方式』はＡＮＳＡ内で支持を失いはじめているが、この方式を主導するキッシング長官も意地があり、あきらめていない。「ロケットのことはロケット開発センターがなんとかすべきだ」と主張する。

一方、ロケット開発センターの『地球軌道ランデヴー方式』は、重量の問題を回避し、『クロノス』で実現可能な想定であった。

まず、地上で分解した宇宙船を複数台のロケットで打ち上げ、地球軌道上でランデヴーさせながら再度組み立てる。そして完成した宇宙船に燃料を入れて、月へ飛行させる。

だが、この方式にも問題点があった。

宇宙船を組み立てるのに、打ち上げを一五回もやらねばならないのだ。

たった一回の打ち上げでも大変なのに、予算を出す政府にしてみればたまらない。税金という観劇料を払っている国民からも総スカンだろう。

また、予算だけでなく技術面にも課題があった。

そもそも『地球軌道上でのランデヴー』は実験飛行すらできていない。

これについては、ロケット開発側からすれば「ロケットは作っているのだから、宇宙船の開発者は早急にランデヴーに必要な装置を完成させろ」である。

ＡＮＳＡの二大巨頭が譲らず、己の正しさのみを主張する。さらに悪いことに、この争いの審判役となるＡＮＳＡ本部長は、政府の科学諮し問もん委員会と予算や方針を巡って衝突している。

もはや宇宙開発の内部はぐちゃぐちゃだ。

カイエは頬ほおに苦笑を浮かべる。

「共和国陣営が私たちの裏側を知ったら、勝利を確信するかもね？」

「だよね。あっちはたぶん統制が取れてるんだろうし」

鉄のカーテンの内側は不明だが、最高指導者のもとに一丸となっている現場をバートは想像していた。かたや、自由の国を標ひよう榜ぼうする連合王国は皆が自由に主張して泥沼化。

そんな状況下で、バートは憧あこがれのクラウス博士と敵対する組織に属している。

「博士と争うなんて、複雑な気持ちだよ」

病弱だった子どもの頃、クラウス博士の執筆した記事や著作をすべて読み、テレビ番組も欠かさずに見た。彼の提唱する月面基地や惑星間飛

行の構想に興奮した。
　とくに地球軌道上の宇宙ステーションは宇宙探索の重要拠点として描かれ、そこに滞在する科学者になる未来を夢見た。
　バートを宇宙の道に引っ張り込んだ張本人こそ、クラウス博士だった。
「でも、正直なところ、博士の提案する『地球軌道ランデヴー方式』には賛同しかねる部分もあるんだよね。けっこう無茶というか……」
　すると、カイエも頷うなずく。
「私も諸もろ手てを挙げて賛成はできない。博士は私の論文を評価してくれたけど、それとこれとは別……」
　だからといって、有人宇宙船センターの案は『ギャラクティカ』の完成を待つという、他人任せもいいところのアイデアだ。
　夕闇やみを飛ぶ鳥を眺めながら、カイエは月へ思いを馳せる。
「着陸の方式が早く決まらないと、Ｄルームの業務も進まないわ……」
　ほかにもいくつか案はあったが、すべて「実現不可能。検討する余地なし」と上層部に却下されていた。
　実際、妄想としか言えない悪手もあった。
　帰還用のロケットが未開発でもとりあえず宇宙飛行士を月に降ろして『史上初の月面着陸』を達成し、ロケットが開発できるまでは月面に補給物資を延々と送る。
　こんなものは却下されて当然だ。
　しかし、廃棄された案のなかにたったひとつだけ、可能性のあるアイデアが存在した。
　それは斬新な発想ではなく、むしろ古いものだ。一九一〇年代、現在の共和国連邦を構成する国の科学者が、ほかの天体に行くための手法として考案した方式。
『月軌道ランデヴー方式』。

まず、宇宙船―宇宙飛行士の乗る司令・機械船と月着陸船をまとめたもの―を月軌道に向けて打ち上げる。

無事に月軌道に到達したら、宇宙飛行士は月着陸船に乗り込み、司令機械船から切り離して月面へ降下する。月着陸船が月面にいるあいだ、司令機械船は月を周回しつづけ、月面から上昇してきた月着陸船とランデヴーして、宇宙飛行士を回収する。

この方式は、理論上、現在争われているふたつの案よりも優れている。

技術面でも、予算面でもだ。

怪物ロケット『ギャラクティカ』は不要で、開発を進める『クロノス』一機でミッションが遂行できる。ランデヴーについても、月の引力が小さいために地球軌道上で行うよりも容易で、また月着陸船自体も小型ですむ。

コストがかからず、シンプルで、システムも簡素化できる。

それがなぜ無視されているのか？

否いな、無視されたわけではない。

重大な欠点があるのだ。

「ランデヴーをするには、月は遠すぎる」

地球軌道上でのランデヴーならば、もし致命的なエラーやミスが発生しても救助しやすい。

だが、月は三八万キロも先だ。

しかもランデヴーは、そのほとんどが月の裏側で、しかも自動操縦で行われる。もし宇宙飛行士からＳＯＳが発信されても、地球からは見殺しにするしかない。全世界市民が注目する月面着陸でそんな悲劇が起これば、有人宇宙飛行の未来は永遠に閉ざされるだろう。

そのため、ＡＮＳＡの上層部は猛烈に反対し、政府の科学諮し問もん委員は「人命を軽く見ている。宇宙飛行士が生還する可能性は一パーセ

ントだ」と断じた。一パーセントという確率は根拠のないデタラメな数字なのだが、それほどまでに自動操縦への信頼性はなかった。

この批判はつまり、宇宙船に搭載される超小型コンピューターが非現実的だという意味だ。

コンピューターが不安視されていることを至極残念にバートは思うが、信頼に足る材料がないのは事実で、現状では方々から「ＳＦの影響」「科学者の妄想」だと小馬鹿にされる。

実際、『月軌道ランデヴー方式』は、バートやカイエの愛読書である『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』など多くのＳＦ小説で使われた。

そしてなんと、クラウス博士が書いたＳＦ小説でも類似方式が使用されていた。

戦後まもない一九四八年、連合王国に亡命してきたクラウス博士が辺境の研究所で不遇の扱いを受けていた頃、火星探険の本を執筆した。その着陸方法は、火星軌道でのランデヴーだ。

にもかかわらず、今やクラウス博士自身が『月軌道ランデヴー方式』を否定している。

バートにとっては子どもの頃に夢見た方式なので惜しい気持ちもあるが、提案したところで叶う話でもない。だから、ひそかに心の奥底にしまっている。

「……なんにせよ、組織間で争わずに協力できれば、月だって近くなるはずなのに」

天高く舞う鳥をバートは目で追う。

カイエはコーヒーをひと口すると、溜め息いき交じりに言う。

「それに、国同士の協力も。うまくいくといいんだけど……」

人工衛星の打ち上げが契機となり、宇宙開発に関する非営利の国際組織が発足し、多くの国が加入した。しかし、まともな開発能力があるのは連合王国と共和国だけだった。

そこで連合王国の委員が「我々は共同開発の準備がある」と発表した。

一、連合王国のロケットで、他国の人工衛星や計測器を打ち上げる。

一、連合王国の人工衛星に、他国の計測器も搭載する。

これは純粋な支援ではなく、連合王国の名声を高めるという意味合いも大きいが、この提案は技術不足の国にとっては魅力的だった。結果、近日中に『史上初の二国協力による人工衛星』が打ち上げられる予定だ。

その相手国は、かつて連合王国を植民地にしていた大国。独立するときに大きな戦争があったが、今では協力する間柄となった。

「宇宙はみんなのものだし……共和国とも協力できたらいいのに」

共同開発の可能性は、わずかだが存在する。

祝電でその旨をほのめかしたゲルギエフに対し、連合王国政府は五つの分野での協力を提案した。『気象衛星のデータ共有、宇宙医学の情報交換』などの平和利用である。

しばらくして共和国から好意的な返事が届いた。

『担当者に対し、新しく具体的な共同計画の提案を準備するよう指示している』

しかし、いくら待てども進展はなく、共和国は相変わらず開発状況すら非公開だ。

結局のところ、宇宙開発は軍事技術と密接に結びついているために平和利用の線引きが難しく、「共同開発は軍縮協定が成立した場合にのみ可能」と政府は結論づけた。

「きっと共和国は外面を良くしたいがために、形だけの締結をしたんだろうな……」

宇宙がプロパガンダに利用されることがバートはどうにも気持ち悪い。

無論、きれいごとばかり言っていられないのは承知しているが、それでもやりきれないものがあった。
バートはコーヒーを飲み干す。酸っぱさと苦みが口に広がる。
「気象衛星ですら成立しないんだから、月面着陸の共同開発なんて、夢と妄想の果てだね……」
するとカイエはまん丸のバタークッキーを天にかざす。
「このお菓子よりも小さく見える月が、私たちを惹ひきつけるのよね」
湿原を照らす明るい満月は黄金色のクッキーに隠れる。
「飢えている人たちにとっては、月面着陸より一枚のクッキーの方がうれしいでしょうけど……」
切なげに言うカイエ。増大する宇宙開発の予算に対して、世間からの批判は根強かった。月を大きな石ころと非難する層もいる。だからこそよけいに、無駄な争いをしている場合ではないのだ。
しばらく『クッキー・ムーン』を見上げていると、近くの茂みでバサバサと何かが羽ばたく音がした。
「ん？」
見ると、巨大な影が激しく飛びかかってくる。
「うわっ!?」
「きゃあっ！」
巨大な影はクッキーを強奪し、どこかへ飛び去った。
飢えた水鳥だった。
「あ……」
バートは身動きできない。
怯おびえたカイエに抱きつかれているからだ。
ギュッと目を瞑つむったカイエは両腕をバートの肩に回し、胸を押し当て、ひっしとしがみついている。
動どう悸きが止まらないのは、水鳥に襲われたからではない。密着さ

れているせいだ。バートの口元をカイエの銀色の髪がくすぐり、鼻先に月下美人のシャンプーの甘い匂においが香る。
「えっと……」
　バートはかすれた声を絞り出す。
「カイエ……」
「……え？」
「鳥だったけど……」
「とり？」
　一瞬考えたカイエは。
「あ！」
　短い声を上げると転がるようにバートから離れた。
　尖とがった耳の先まで羞恥で真っ赤に染めた彼女は、手に付着したクッキーの欠片かけらをささっと払い、そのままうつむく。
「ご、ごめん、びっくりして……」
　バートは額ひたいににじむ汗をぬぐい、冗談っぽく言う。
「宇宙人の襲来じゃなくてよかったね」
「……ほ、ほんと、そうね……」
　ふたり同時に大きく深呼吸をして、横並びに座り直す。
　そのまま会話が途切れて、気まずい沈黙が漂う。
　バートはカイエがどんな顔をしているのか気になり、横目で盗み見る。と、もじもじと草をいじっている彼女の手を見てアッとなった。
「指から血が出てる」
　言われてカイエは気づいたらしく、自分の小指を見る。
「さっきの鳥にやられたのかも……」
　とくに痛みはないようだ。
　カイエは小指を口に当て、血を軽く舐なめる。なにげなくその様子を見ていると、視線がぶつかった。

　するとカイエはハッと指を離して言う。
「これ、舐めてるだけだからね……!?」
「うん、わかるけど……」
　バートが首をかしげると、カイエは首を横に振る。
「えっと、違うの。吸血じゃないって言いたかったの」
「あ、わかってるよ。人間だって血が出たら舐めるよ」
「そっか。よかった……」
　彼女が必要以上に気にしたのは、吸血鬼症候群のせいだろう。ふだんは表に出さないが、やはり彼女の心には深く棘とげが刺さっているようだ。あまり触れないほうがいいと思い、話を再開する
「ええと……共同開発の話だったよね」
　バートは満月の明るい夜空を見上げる。
「もし……宇宙からＵＦＯの大群が攻めてきたら、さすがに共和国も協力してくれるかもね？」
　カイエはブルッと震えた。
「そ、そうかもしれないけど、そんなの絶対嫌よ……！」
　どうやら本気でＵＦＯが怖いらしい。
　世間では多くの人が騒いでいるので彼女の反応が特別おかしいわけではないが、『変人のナード・天国へヴン』所属の技術者としては珍しいタイプだ。
「葉巻型……？　円盤型……？」
　ＵＦＯ大戦争の妄想を繰り広げるカイエを見ていると意地悪したくなる。
　今日の観測はどうせ暇ひまだろうと踏んでいたバートは、空き時間に読むための週刊誌をカバンに忍ばせていた。
　その週刊誌にはカイエを刺激するであろう特集記事が掲載されている。見せたらどういう反応をするだろうか？

　バートはカバンから週刊誌をおもむろに取り出す。
「カイエ、これ知ってる？」
「なに？」とカイエは記事を見たとたん、「ひっ!?」と口に手を当てた。
『警告！　エイリアンはすでに地球に侵入している！』
『スティーヴ飛行士が宇宙で見た蛍は、エイリアンの卵だ！』
　仰々しい煽あおりで、触手を伸ばしたタコ型エイリアンの写真が載っている。
「……」
　カイエは口に手を当てたまま目を剥むいている。予想以上の動揺だ。
「こんなの、子どもだましの嘘うそだよね」
　バートが呆あきれて週刊誌をパラパラめくると、カイエは首をぶんぶん振る。
「嘘うそとは言い切れないわ……！」
「いや、どう見ても合成写真だけど……」
　真顔でカイエは言う。
「未確認だから合成するしかないとしたら？」
「……ん？」
「宇宙は無限大。理論上は存在しうる。バート、よく聞いて――」
　カイエは難解な持論をつらつらと述べはじめる。
　彼女の考察を簡単にまとめれば、可能性がゼロではない以上、それは存在するらしい。
「タコ型エイリアンは？」
「イカもいるわ」
「怪光線を放つ緑色宇宙人も？」
「光合成の原理かしら」
「へ、へぇ……」

飛躍しすぎだが、彼女の能力である『映像記憶』が絡んでいるのかもしれないとバートは考える。

以前彼女は「覚えたものが脳内で自動的に融合して処理される」と言っていた。その副作用で、科学とＳＦが融合した結果、オカルティックな想像が無意識下で醸造された。

常人のバートにはよくわからないが、とにかくカイエはＵＦＯや意思疎通のできない宇宙人を怖がっている。

「知的で友好的な地球外生命体なら会ってみたいけど、命を狙ねらってくる攻撃的なのはダメなの……」

アルマジロが身を守るようにカイエがかわいらしく身体からだを丸めるので、バートはさらに意地悪したくなった。

「つまり、君がダメなタイプは、さっきクッキーを奪ったやつか」

「え？」

カイエがひょこっと顔を上げる。

「鳥がどうかしたの？」

「あれ、じつは、発光体だった」

「え、え、え……？」

「君が怖がると思って、鳥だって嘘を吐ついてたんだ」

「う……そ？」

「宇宙蛍だったのかも」

バートはニヤけそうになるのを誤ご魔ま化かすため、メガネを直すふりをする。

「君の小指……皮膚と血液のサンプルを採られちゃったのか……それともエイリアンの卵を産み付けられちゃったのか……」

「!?」

カイエは小指をギョッと見つめた。

「っ……」

瞳ひとみが潤む。唇を結び、今にも泣きそうな顔になる。エイリアンの卵を押し出そうとしているのか、小指をぎゅうぎゅう握りしめ、傷口から血をにじませる。

やりすぎた、とバートは反省する。

「ごめん！　今のは嘘うそ！」

「……え？」

「宇宙蛍じゃなくて、ふつうの水鳥」

潤む朱あかい瞳でキッと睨にらまれる。

「バート……」

「ごめん、そんな泣きそうになるなんて……」

カイエはムスッと頬ほおを膨らませる。

「泣きそうになってません」

まずい、怒らせてしまった。

「つい出来心で……」

「……二度と怖いこと言わないで」

「わかった……約束する」

だが、疑いの目つきで見られてしまう。

「本当に？」

「言わないって！」

バートは小指を立ててカイエに向ける。

「約束する。神に誓います」

「えっ？」

するとカイエは動揺を露あらわにした。

「いや、誓います……」

バートは小指を再度彼女に向けて、ピンキー・プロミスを求める。小指を絡めて約束をする、連合王国では一般的な風習なのだが、カイエは恥ずかしげに目を伏せる。

「あの……それ、するの？　今、ここで？」
　ただ指切りをするだけなのに照れられてしまい、気恥ずかしくなる。
「……そのつもりだけど」
「でも、そんな突然……」
　カイエは自分の指先をつまみ、じっと見つめている。よくわからないが、困っているらしい。
「嫌ならいいんだけど……」
　バートが小指を下げかけると、カイエは「待って！」と顔を上げる。
「わ、わかったわ……秘密だからね……」
　そう言って、首の付け根まで赤くした彼女は意を決した瞳ひとみで、バートの手を両手で包み込むように握った。
「ん？」
　なんだ？
　と、カイエはバートの小指に口を近づける。
　まるで指先にキスをするように──

「え、待って!?」
　バートは思わず手を引く。
　ビクッと動きを止めるカイエ。
「え？」
「今の何……？」
　問われたカイエも戸惑っている。
「何って、ピンキー・ブラッド……」
「……ブラッド？　プロミスじゃなくて？」
　なにか、おかしい。
　くわしく訊きくと、ピンキー・ブラッドとは、新血種族と人間が秘密の誓いを交わすときにする儀式だとわかった。
　牙きばで指先を少し傷つけ、互いの血を舐なめ合うことで互いが互いの眷けん属ぞくになる。血を舐めるといっても吸血鬼症候群とはまったく関係なく、新血種族の社会に昔から伝わる風習なのだという。
「とくに、婚姻関係を結ぶときにするの……」
「そ、そうなの……？」
「新血種族と人間だと、表だって結婚式なんてできないから、ふたりでこっそり。だから、バートに求められて、どうしようって焦って……」
　全然知らなかったとはいえ、求婚するレベルだったとは驚く。
　それなりの時間をカイエと過ごし、壁もなくなったつもりでいたが、まだまだ知らない文化や慣習があるのだろう。
「人間の場合は小指を絡めるだけで、わりと気軽にやるものなんだよ」
「……私、とんでもない勘違いじゃない……」
　カイエは頬ほおを両手で押さえて身み悶もだえる。
　バートはどうしようかと迷うが。
「せっかくだし、人間のやり方でやってみる？」
　訊いてみると、カイエは紅潮した顔でこくりと頷うなずいた。

「じゃあ、試してみる……」
「うん。それじゃ、小指を立てて」
　バートが手を伸ばし、カイエの小指に絡めようとしたそのとき。彼女の視線が何かに掠かすめ取られ、バートの背後の空に釘付けになった。
「あっ！」
「え？」
「ＵＦＯ!?」
　振り向いてカイエの指した先を見ると、高速で動く光があった。
「あれは……！」
　いや、冷静になって目を凝らせばわかる。
「戦闘機だと思うけど……」
「ＵＦＯじゃなくて……？」
「あっち、空軍基地があるはずだし」
「あ。そっか……」
　カイエは安あん堵ど と拍ひよう子し抜けとが入り混じった顔で息を吐いた。
　だがＵＦＯと見間違えるくらいに空は暗くなってきている。完全に夜になれば区別がつかなくなるだろう。それに加えて、夜行性の危険な爬は虫ちゆう類るいや、もっと危険なソーラーフレア・クラブの活動時間になるので、あまり外にはいたくない。
「そろそろ帰ろうか」
　提案すると、カイエは申し訳なさそうに苦笑する。
「うん……今日は付き合ってくれてありがとう」
　観測の収穫はゼロだったが、良い休日を過ごせたと思う。
　敷いていたビニールシートを片づけていると、またひとつ戦闘機らしき光が空を横切った。ライカ・クレセントに住みはじめて一年になるが、最近、空軍基地の周辺が慌ただしい。

ちょうど一年前、『囚とらわれの島』と呼ばれる隣国に連合王国が奇襲を仕掛けたとき以来の騒々しさだ。
何もなければ、いいのだが。

バートは自宅に帰ってから、戦闘機のせいでカイエとピンキー・プロミスができなかったことを思い出した。
「まあ、いいか……」
少し損した気持ちになり、小指を曲げ伸ばしする。
「ピンキー・ブラッドだっけ……」
あのままカイエを止めなかったら、噛かまれていたのだろうか？
目を閉じて想像する。
頬ほおを染めたカイエが小指にキスをするように唇を近づける。かわいらしい口で小指の先をくわえて、牙きばを立てる彼女──
「っ……」
針でチクリと刺されたような痛みが走った。
目を開けて、バートは小指を眺める。
本当に噛んでもらったら、どんな感じだったのだろう。それに、互いの血を舐なめるということは、カイエの白く細い指を噛んで、彼女の血を舐めるということだ。
思うだけで、心がぞわぞわして、鳥肌が立つ。
「……」
試しに、自分で自分の小指を軽く噛んでみる。
しかし牙がないので皮膚は破れず、血は出ない。
バートは窓に映った間抜けな姿を見て「何してんだ……」と苦笑した。

朱の瞳　Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ　ｅｙｅｓ

ＵＦＯ観測から三日後の夜。

有人宇宙船センターからカイエが帰宅すると、父・ドミニクは居間の椅い子すにもたれかかって密造酒ムーンシヤインをあおっていた。

「ただいま」と声をかけたが、ドミニクは不愉快そうに眉み間けんにしわを寄せている。

このところ帰りが遅くて夕食を用意できないから怒っているのだろうか。いや、父は以前よりもＡＮＳＡでの業務を応援してくれているから、別の理由だろう。仕事で嫌なことでもあったのかもしれない。

あれこれ考えたカイエだったが、ドミニクの手元にある本を見て、ギクリと足を止めた。

その本はカイエがこっそり読み進めている小説だった。

「ちょ……」

隠しておいたはずなのに、と背筋がすーっと冷える。

父の不愉快の原因。

それは、人間しか登場しない恋愛小説だ。

これまでカイエが読む本は宇宙科学関連のものばかりで、バートの憧あこがれだったクラウス博士の著書も全部読んだが、恋愛小説には最近はじめて手を出した。

きっかけは、ピンキー・プロミス。

何も知らずにバートの小指を噛かもうとしたことを思い出すたび、頬ほおが熱くなる。

それで、もう同じ過ちは繰り返さないと決意し、人間を深く知るために読みはじめたのだ。

カイエが声を失っていると、ドミニクが睨にらんでくる。

「お前、こんな本が好きなのか？」
　妙な誤解を解かなければ。
「違うよ。好きじゃなくて、ちょっと勉強のために……」
「勉強？　恋愛のか？」
　よりによって本のタイトルが『ラブレッスン』だった。
　慌てて言い訳する。
「そ、そういう勉強じゃないよ！　レッスンはピアノのレッスンで、徴兵されたピアノ教師とピアニストを目指す女学生が……」
「愛の逃避行をする」
　無表情であらすじを指さしたドミニクは、反論に詰まったカイエをさらに追及する。
「まさか、人間の誰かにほだされたんじゃないだろうな？　もしかして、あのメガネの男……バートだったか」
　名前を出されたとたん、カイエの身体からだがカッと熱くなった。
「彼は、違う……」と言って二の句が継げずにいると、父にますます疑われる。
「カイエ」
「ち、違うって！　書店でおすすめされてて、読んだのもDルームの業務を円滑に進めるため……って、それより、なんで勝手に私の本を読むの!?」
「風呂場に置いておくお前が悪いんだろ」
「え？」
「隅に落っこちてたぞ」
　記憶をたどる。昨夜、風呂場に本を持ち込んだが、片づけた覚えがない。読み耽ふけって、そのまま風呂を出たような──
　全身の肌が粟あわ立つ。
　険しい顔つきのドミニクはカイエに向けて、湿気で傷んだ『ラブレッ

スン』をひらひらと振る。
「万博に行くのは、本当に業務なんだろうな？」
「業務！　本返して！」
　わめいて本をひったくり、そそくさと自室に逃げ込む。

　気づくと、夜が明けていた。
　時が経つのを忘れ、切なくも甘い、ふたりの純愛に浸ってしまった。
　涙で腫はれた目をカイエはこする。
　ハッピーエンドでよかった。
　人間と新血種族のあいだにさまざまな違いはあるが、恋愛に対する気持ちは同じだ。
　ピンキー・プロミスについても理解できた。
「はぁ、寝なきゃ……」
　数時間後には仕事だ。ベッドにごろんと寝転がり、目を瞑つむる。
　だが、なかなか眠れない。
　登場人物の人間に自分を重ねたり、バートもこういう恋愛小説を読むのだろうかと考えたりしてしまう。
　読んだことがないなら、彼にも貸したい。
　読んだことがあるなら、感想を語り合いたい。
　これまで頭の大部分を占めていたのは数式や宇宙だったのに、ここ最近、彼の姿が浮かんでくる。
　彼は自分を救ってくれた恩人だ。
　吸血鬼症候群も受け入れてくれた。
　子どもたち相手の科学教室もよろこんで手伝ってくれる。
　カイエは幼い頃に母を亡くし、「月は嫌い」と夢を隠して生きてきて、ずっと孤独だったけれど、彼のお陰で心に空いた穴が埋まった気がした。

彼ともっと話がしたいし、彼についてもっと知りたい。
誰かに対してこんな感情を抱いだいた覚えはなかった。
「……でも、迷惑かな……」
ＵＦＯ観測に誘ったら来てくれたけれど、せっかくの休日を潰つぶしてしまった。彼は彼でやりたいことがあるはずなのに。
引っ張り回すのはよくない。職場の同僚でもあるし、自制しなければ。
それでも、誘いを受けてくれたらうれしい。
「バートはどう思ってるんだろう……」
カイエは小指の先を触る。
「ピンキー・プロミス……」
どんな感じなのか試してみようと、自分の右手と左手の小指を絡める。
しかしひとりで誓うのはむなしくて、胸がキュンと痛む。バートが「人間のやり方で」と小指を差し出してくれたとき、夜空を動く光に気を取られた自分を恨む。ＵＦＯもどきに騙だまされなければできたのに。
明日やり直しをお願いするのは変だろうか。業務終了後に資料室でこっそり、彼に小指を立てて誓いを求める。
と、その場面を想像すると、バートが戸惑う姿が浮かんだ。
「あぁ、無理……」
あまりに恥ずかしくて、髪をぐしゃぐしゃとかきむしる。
さまざまな想いがカイエの頭をぐるぐると巡る。
ぼんやりして風呂場に本を置き忘れるくらいならいいが、業務中におかしなミスをしたら大変だ。切り替えなくてはと、カイエは自分を戒める。
「おやすみ……！」

布ふ団とんをばさっと被かぶる。
しかしバートと万博をいっしょに楽しむ妄想が止まらず、そこに『ラブレッスン』のデートシーンが重なり、結局眠れなかった。

「バートとＵＦＯ観測したんですか？」
「っ!?」
耳元でいきなり声をかけられ、カイエはコーヒーカップを落としかけた。
いつの間にか隣にミアがいた。ラウンジは自分ひとりだったはずなのに。
しかも、問われた内容が内容だ。
「どうして知ってるの……!?」
誰にも言っていないのに。無意識でひとりごとをつぶやいてしまったのだろうか。
カイエが狼狽うろたえているとミアはさらりと言う。
「バートから聞きました」
「あ、そうなんだ……」
ＵＦＯ観測は知られてもかまわないけれど、ふたりで出かけたのが知られるのは妙に気恥ずかしい。
「カイエさん、なぜ動揺しているんですか？」
ミアにジトッとした目で見られ、カイエは努めて冷静に返す。
「動揺してないよ」
「別にいいと思いますけど。業務に支障が出なければ」
「支障が出るわけないでしょ」
「そうですか。では万博は仕事を忘れて楽しんできてくださいね」
「万博は仕事で行くの！」

　カイエが視線を逸そらすと、ミアはプログラムのエラーをチェックするように顔を接近させて凝視してくる。
「何割が仕事ですか」
　すごく疑われている。
「全部仕事っ……！」
　カイエは喉のどがからからになり、コーヒーをごくりと飲む。
「うっ!?」
　刹せつ那な、脳に電流が流れた。
　ケチャップとペッパーソースの味がする。
　気持ち悪くてカイエは咳せき込みながら涙目でミアを睨にらむ。
「みあァ……」
　ミアは無表情で時計を指す。
「休憩時間を超過した罰です」
「ちょうか……超過!?」
　慌てて時計を見ると、一〇分も過ぎていた。
　コーヒーを飲みながら万博見物を妄想していて、それで──記憶がない。
　ミアはあらかじめ用意していた水を差し出してくる。
「業務に支障が出てますが」
「ちょ、ちょっと、居眠り……しちゃってた、かな……」
「カイエさんが万博で不在のあいだ、私がしっかり代役を務めますから。仕事は忘れて楽しんできてくださいね」
「だから仕事で行くの……」
　カイエが誤ご魔ま化かすように水をごくごく飲むと、ミアは口元をかすかにニヤつかせる。バートへの気持ちをすべて悟られている気がして、胃に流れ込む水がズンと重く感じる。
　ともかく、彼女が室長代理なら業務は大丈夫だろう。

第三章　統治者たち

女王の瞳　Ｑｕｅｅｎ　ｅｙｅｓ

穏やかな春眠を揺るがす、悪夢のようなニュースが共和国から届けられた。

『史上初の宇宙空間ランデヴーに成功』

共和国の国営通信ＴＡЦＣは「二機の宇宙船は地球軌道上で五キロメートルの距離にまで接近」と発表。それだけでは終わらない。

『史上初の宇宙からのテレビ中継に成功』

粒子の粗い映像に映った飛行士は、ローザ・プレヴィツカヤ。

『史上初の人間女性の宇宙飛行士が誕生』

三つの『史上初』を同時に達成され、連合王国中に衝撃が走る。

ランデヴーの技術は、ＡＮＳＡではまだ開発計画の初期段階だ。『地球軌道ランデヴー』に必要となるのはもちろんだが、宇宙ステーションの建造にも必須となる。もし共和国に先を越されれば、天空から支配されてしまう。

この一報は、宮殿にいたサンダンシアにも伝わった。公務で公文書を確認していたが、気になって仕方がないので手を止め、首席秘書官に問う。

「我が国の宇宙開発についてくわしく知りたいのですが、どのような状況なのでしょうか」

首席秘書官はピクリと眉まゆを動かす。

「陛下が気になさる案件ではございません。勉強するならば、宇宙科学ではなく帝王学をまずは修めてください」

「ですが、カンファレンスに出席するのですから、それなりの知識がないと……」

「傍聴者ですから、議論に参加する必要はございません。挨あい拶さつ文につきましても、こちらで準備しますのでご安心ください」
　有無を言わさぬ厳しさで撥はね付けられた。これ以上頼み込んでも無駄だろう。
　首席秘書官は時計を確認する。
「さて、そろそろ首相の謁見となります」
　毎週一回、女王は首相から報告を受ける慣例がある。
　今日は核実験についてだ。

　サンダンシアの前に、間もなく六〇歳を迎える首相が現れる。品の良い口髭ひげを蓄え、貴族の高潔さを纏まとう彼は、報告がどんなに恐ろしい内容であろうと、理知的で冷静に、ルーチンワークをこなすように平坦な口調で話す。
「ご理解ください。抑止力を手に入れるために、核兵器は必要なのです」
　先の大戦後、核保有国が急増し、もし世界核戦争となれば地球が破滅するほどの状態にあった。そこで各国は核拡散の流れを食い止めるべく会談を繰り返すが、軍備増強はとどまるところを知らない。昨夏、連合王国と共和国は軍縮を話し合ったものの、核実験停止条約は締結に至らなかった。
　結果、共和国は五〇回もの大気中核実験を行い、ついに史上最悪と言える殺さつ戮りく兵器の開発に成功した。
　半径五八キロを破壊する水素爆弾『アンドレイ』。
　連合王国は対抗して地下実験を幾度となく実行してきたが、四月末からいよいよ海上での実験となる。その予定回数は一〇〇回を超える。
　サンダンシアは困惑しきった面持ちになる。
「抑止力は理解はできますが……」

首相は女王を尊重する振る舞いをしても、聞く耳を持たない。
「核実験がこれで最後になり、軍縮が成功することを私も希望しています」
「わかりました……」
女王の承認を得た首相は頭を下げ、謁見の間を辞した。君主である女王には『国王大権』があり、外交や国防などの決定権を持つのだが、もはや決定事項の報告が形式的に行われているだけだった。また、君主が公おおやけの場で政治について述べることは王室の規則で禁じられていた。
つまり、政策を最終決定しているのは内閣だ。
その決定に対してサンダンシアは警告する権利があるとはいえ、相手は輝かしい経歴を誇るエリートの頭脳集団ブライテストなので、萎い縮しゆくして何も言えない。わからないのに口を出しても、煙たがられて呆あきれられるだけだ。だから、重要な書類に署名するときでも頭脳集団の判断は間違いないと信じて、疑問があっても理解できないまま署名していた。
しかし、ここ最近、サンダンシアには国の進んでいる方向が正しいと思えない。
政治的な知識はなくても善悪の判断はできる。
とくに各地への派兵は賛同できない。
一年前に『囚とらわれの島』を狙ねらった軍事行動では両国合わせて三〇〇人近い死者を出し、世界中から非難を浴びた。
作戦を了承してしまったサンダンシアは深く傷ついた。
そして、その傷が癒いえないうちに、また遠方で戦争がはじまる。名目上は女王が最高司令官である王家の軍隊ロイヤル・アーミーが各地で戦うのだ。
もし核戦争が起きたら世界はどうなるのか。

生物が死に絶えた大地を想像すると、闇やみの底に突き落とされる気持ちだった。

全面核戦争は冗談でも笑い話でもなく、皆みなが身に迫る危機を感じている。学校や会社では避難訓練があり、地下にシェルターを作る家も多い。

しかし核に代わる抑止力をサンダンシアが提示できるわけもない。

だから、今日もただ頭脳集団ブライテストと王室秘書官を信じて、署名と承認をするのだ。

四月二二日、連合王国東部にある女王の宮殿から西に三七〇〇キロも離れたマリンシティで、『二一世紀博覧会』が華々しくはじまった。開会式の大盛況が報じられた、その翌日。

宮殿近くの礼拝堂において復活祭のミサが執り行われる。年に一度の恒例行事でロイヤルファミリーが勢揃ぞろいするため、沿道には多くの人が詰めかけている。

アーナック太陽教会の首長でもあるサンダンシアは、礼拝堂で主席司祭に恭うやうやしく迎えられたあと、地元の幼稚園児たちから花束を受け取る。

「ありがとう」

園児たちの目線まで腰を落とし、穏やかに微ほほ笑えみかけるサンダンシア。子どもたちは背筋を伸ばして笑顔を返す。

そのなか、たったひとりだけいた新血種族の男の子が花を渡そうとしたとき。

「あっ！」

緊張からか石段につまずき、転んでしまった。花束が道端に放り出される。

膝ひざを打って痛そうに倒れている男の子にサンダンシアは手を差し伸べる。
「大丈夫？」
ところが男の子は手を取らず、自分ひとりで立ち上がった。
ばつが悪いサンダンシアは行き場をなくした手で花束を拾い、男の子を慰めようと優しく声をかける。
「お花、ありがとう」
すると、男の子は悔しそうに唇を噛かみ、ボロボロと涙をこぼしはじめた。
「あ……」
サンダンシアは戸惑う。
こんなとき、どうすればいいの。
声をかけるだけ？　それとも、手を握ってもいい？　頭を撫なでてもいい？　軽く抱きしめてもいい？
傍そばに控えている王室秘書官の顔を確認するも、無表情で頷うなずかれた。
それが何を意味するのか、サンダンシアにはわからない。新血種族の差別問題について、安易な発言や行動は控えなさいと彼から忠告されていた。
差別をしろという意味ではなく、身の安全を守るために。
以前、新血種族を擁護する行動を取ったとき、宮殿の前に死んだコウモリを置かれたことがあった。ソーラーフレア・クラブの仕業だと思われたが、犯人は見つかっていない。
新血種族の擁護にかかわらず、影響力のある女王が特定の何かに肩入れすれば、どこからか銃弾が飛んできてもおかしくはない。
お付きの王室秘書官はそれを危き惧ぐしていた。数十年にわたって前国王の側近を務めてきた彼は、彼なりのやり方で女王や王室を守ろうと

している。ナイトの称号にふさわしい誇りと忠誠心に、サンダンシアは感謝している。
　だが、若き女王は泣きわめく男の子を前にして、見えない鎖に縛られている気持ちだった。

　海上での核実験開始のニュースがテレビで大々的に報じられると、ニュースキャスターが皮肉を込めて言う。
〈『二一世紀博覧会』が連日賑にぎわっていますが、ここで私の未来予想をひとつ。二一世紀の世界の支配者は、連合王国でも共和国でもなく、黒くて平たいあの虫でしょう〉
　ブラックジョークに共演者や観覧席から笑いと拍手が起きる。
　しかし、執務室でそのニュースを見ていたサンダンシアはいっさい笑えない。
　午後の公務が一段落したところで気分転換を兼ねて、ククーシュカと四頭の小犬を連れて夕暮れの庭園に出る。
　敷地内の散歩には秘書官もついてこない。
　広大な敷地には小川が流れ、手入れの行き届いた美しい花園が芝生を彩る。
　サンダンシアは鮮やかな花々に囲まれたベンチに腰掛け、ゆっくりと深呼吸する。
　春を感じる甘い匂においに心が癒いやされる。
「みんな、ちょっと遊んでてね」
　芝生に小犬を放つが、ククーシュカだけはベンチの傍そばに寝転ぶ。いつもの光景だ。
　サンダンシアは散歩に出る直前に受け取った原稿―カンファレンス用の挨あい拶さつ文を確認する。ＡＮＳＡの広報課と政府の科学委員が共同で書いたものだ。

五分ほどで話し終える文章量のなかに宇宙開発の正当性がまとめられているが、その大部分は、国民に費用負担を納得させるための大義名分だ。

挨拶というよりも説得だが、そうなった理由はわかる。

またしても予算の無駄があったからだ。

つい先日、月面探査四号機が打ち上げられたのだが、月面に衝突して大破した。ものは言いようで「連合王国ではじめて月には到達した」と発表されたが、地球との通信は上う手まくいかず、失敗だった。

ゆえに、言い訳をせねばならないのだろう。

それは仕方ないが、納得のいかない部分もある。

『宇宙開発競争に勝利する』という主張だ。

サンダンシアは勝たなくてもいいと思いはじめている。争いはもう嫌だ。いつか月に到達してくれればいい、と。

しかし、そんなことを公言したら、間違いなく顰ひん蹙しゆくを買う。

だから、この挨あい拶さつでいい。

もし自分が余計な発言をしたせいで『プロジェクト・ハイペリオン』が破は綻たんしたら、悔やんでも悔やみきれない。宇宙開発計画は心の底から賛同できて、ぜひとも達成してほしいからだ。重苦しい現実に囲まれている女王の暮らしで、果てしない宇宙に思いを馳せるときだけ心が躍る。月への旅行や惑星間飛行を夢見る。

こんな個人的な想いで動こうものなら方々から批判を受けて「女王失格」と陰口をたたかれるだろう。

サンダンシアにできることは、ＡＮＳＡの計画を邪魔せずに応援するだけだ。昨秋の記念式典で挨拶を交わした皆みなの、成功をよろこぶ輝かしい笑顔をこの先何度でも見られるように。

それなのに、困難な目標に向かって精一杯がんばっている彼らが「税

金の無駄」と非難されてしまうのは悲しい。軍事関係のほうがよほど予算を使っているのに。できればその予算を宇宙科学に回してほしい。
「でも、無理だもんね……ねぇ、ククーシュカ」
　話しかけられたククーシュカはきょとんと顔を上げた。
　軍事に重要な人工衛星への予算増額ならまだしも、有人宇宙飛行は実利が薄い。
「誰のものでもない宇宙は、奪い合わないでほしいな……」
　サンダンシアは再び挨拶文に目を落とす。
　聴衆を説得するために失敗を誤ご魔ま化かし、夢と希望をちらつかせて、耳に優しい言葉をささやくのだ。
　それが連合王国の女王の務め。
「ん……」
　ただ悔しさがこみ上げてきて、涙がうっすらと両目を覆う。偽りの挨拶文を目で追うと、涙がとめどなく溢あふれ出る。
　手の甲に落ちた雫しずくをククーシュカが舐なめる。
「私なんかに女王は無理なのに……」
　世界中から届く手紙に返事を書くのが苦しい。
　各地へ訪問しても、笑顔でいるのがつらい。
　女王を辞めたくなったのは一度ではない。
　降りられるものなら降りたい。
「ダメ、そんなの無責任すぎる……」
　涙をぬぐい、サンダンシアは天を仰ぐ。星がまたたきはじめた空に向けて、消え入りそうな声でつぶやく。
「もし私がＵＦＯに誘拐されたらどうなるかしら……？」
　──何も変わらないよ。
　つぶらな瞳ひとみを向けるククーシュカにそう言われた気がした。

星の瞳　Ｓｔａｒ　ｅｙｅｓ

　ＡＮＳＡ本部の会議室では政府の上層部や科学者たちが顔を突き合わせ、対共和国の検討会を開いている。
　クラウス博士が自信を持って報告をする。
「結論を申します。共和国のランデヴーは『誇大広告』です」
　入手できた限りの飛行データを分析した結果、おかしな点が見つかったのだ。
「並列飛行していた二機の宇宙船は軌道を回るにつれて徐々に遠ざかり、速度も違いました。軌道修正の形跡もありません。つまり『宇宙空間でランデヴーした』のではなく、ただ『ランデヴーに見えるようにタイミングを計算して打ち上げた』だけでしょう」
「東の妖術師チーフデザイナーに幻覚を見せられていたか」
　首相が悔しそうに額ひたいを押さえると、クラウス博士はきまり悪げに苦笑する。
「ともかく、誇大広告だったのですから、現状、ランデヴーは不可能と思われます。また、月まで飛ばすような大型ロケットについても試射すら行われていません。かの国も予算面で苦しいようですし」
　共和国の最近の経済状況からすると、有人月面着陸というコストのかかるプロジェクトを完遂できるのか疑わしいという調査結果が出ている。
　つまり、一年前にゲルギエフが言い放った「近い将来に月へ到達する」という宣言は、連合王国が認識や判断を誤ることを期待する『脅し』だったのではないかと推測された。ゲルギエフに対する連合王国政府の評価は「主観主義で独断」「朝令暮改」「大言壮語」であり、思考が読めなかった。

ＡＮＳＡ本部長が疑問を呈する。
「共和国は祝電で『宇宙開発の共同出資』に触れていましたが、あれも予期せぬ成功に怯おびえたのかもしれません」
首相は語気を強める。
「共和国がどうであろうと、我々は月への一番乗りを目指す。これは世界の未来を決める競争だ。勝利を収めなければ、宇宙と地球は恐怖にさらされる」
科学者は宇宙に夢を見るが、政府と軍部は悪魔を見る。
核弾頭を搭載した人工衛星。
地球軌道を周回する軍艦。
月面の核ミサイル基地。
共和国の正体不明さが不安を生み、敵国衛星を電磁波で使用不能にする『人工衛星迎撃計画』がひそかに進められている。
とはいえ、今のところは技術的にどれも実現不可能だ。現在、宇宙空間においては具体的な利害対立はなく、宇宙開発競争は超大国同士のプライドのぶつかり合いにすぎなかった。
「ともかく、我々が月面の探査で劣っているのは事実だ。クラウス博士、宇宙開発の今後はどうですか？」
亡命者として連合王国に来たクラウス博士は、かつては辺境の研究所に追いやられていたが、今や宇宙開発になくてはならない存在だ。弾道ミサイルを開発した戦犯と呼ぶ者はもはや少ない。
「一刻も早く、宇宙空間でのランデヴー技術を確立せねばなりません。月面着陸以外にも、この先、宇宙開発のあらゆる側面で必要になる技術です」
皆の注目を集めるクラウス博士が切々と強く訴え、皆は打倒共和国を誓う。そして首相が会議の終了を宣言すると、出席者たちはなごやかに雑談をはじめる。

「共和国にならって、我々も貨物船に宇宙飛行士の名前を付けますか」
「『アーロン・ファイフィールド号』『スティーヴ・ハワード号』か」
「馬鹿を言うな。沈没でもしてみろ。世間がなんと言うか」
　なごやかな空気を打ち消すように、国防諜ちよう報ほう局から極秘の報告が入る。
「サングラードの諜報員から緊急レポートが届いています」
　その諜報員は共和国の情報総局に属する現役の大佐ながら、国内に溢あふれる嘘うそや欺ぎ瞞まんに辟へき易えきし、自らの意志で連合王国に協力している。機密文書を超小型カメラで撮影した命がけのレポートは、鉄のカーテンの内側を知る上でとても役に立っていた。
「今度はなんだ？　まさか『共和国は月面着陸に成功した』なんて言うんじゃないだろうな」
　首相が冗談を飛ばすと、乾いた笑いが室内に満ちた。

第四章　二一世紀博覧会

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

一九六二年五月五日。アーロン・ファイフィールドが連合王国初の弾道飛行を達成した記念すべき日に、レフとイリナが連合王国東部の飛行場に降り立った。

ふたりは宇宙飛行から離れて世界中を忙しく回っており、今回で一九か国めの海外歴訪となる。共和国大使館に招かれた一行は空軍の職員や〔運送屋〕と呼ばれる保安員のほか、カメラマンを含めた計一二名。

宇宙開発において共和国はライバルだが、レフとイリナは世界的な人気者だ。オープンカーでパレードが行われ、詰めかけた大勢の市民やマスコミに熱烈に迎えられる。

バートはカイエやＤルームの皆といっしょにテレビ中継を見る。

「まるで兄さんの記念日にぶつけたみたいだ……」

苦笑するバート。皆も同意する。おそらく共和国にはそういう意図もあるのだろう。

しかし、国同士のやり合いを別とすれば、レフは憧あこがれの英雄だ。本当はバートも現地でパレードを見たかったが、日帰りで往復できる距離ではないので我慢した。

「広報活動で会えないのかな」

ボソッと願望をつぶやくと、カイエも期待の眼まな差ざしで頷うなずく。

もっともバートの場合、会ったら会ったで固まってしまい、話せなくなりそうだが。

レフとイリナはホテルに着くと、出迎えたアーロンや首相らと握手を

交わして友好を深め、記者会見を行う。
　レフがさわやかな笑顔で話す。
〈この国の皆さんと知り合える機会を得られて、とてもうれしく感じています〉
　イリナが牙きばをチラリと見せてかわいらしく微ほほ笑えむ。
〈短い滞在ですけど、美しい自然や都市を満喫したいと思います〉
　ほかにも連合王国を褒ほめる言葉がつづく。リップサービスかもしれないが、それでもうれしい。現地リポーターは「ふたりとも共和国のイメージと違い、柔らかくて気さくです」と報じる。
　その一方、ふたりに付き添う〔運送屋〕の女性は隙すきのない雰囲気で、いかにも共和国という印象をバートは受ける。
　挨あい拶さつは温かなムードだったが、マスコミからの質問がはじまると〔運送屋〕の女性が氷のような冷たさで取り仕切る。「共和国の宇宙飛行士には技術的な質問に答える権限はありません」と。
　自由を失ったレフとイリナは当たり障さわりのない返しをするのみで、突っ込んだ質問には〔運送屋〕の女性が代わりに答える。
「言葉の検閲か……」
　バートの感想にＤルームの皆が頷うなずき、カイエも気の毒そうに質疑応答を見る。
「彼らの本と同じね」
　レフとイリナの新聞連載をまとめた本『宇宙への旅路』が出版されたが、共和国礼賛がメインで、技術面では怪しい記述が多かった。連載元が『真実イースチナ』という新聞なのは、なんとも皮肉だ。
　それでも宇宙飛行の場面などはバートの心に迫るものがあり、ＳＦ小説『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』と並ぶ人生の愛読書となった。
　テレビのなかではうわべだけの記者会見がつづいていたが、記者の「共和国はいつ有人月面着陸を成功させる？」という質問に対し、レフ

が「一九六七年」、イリナが「またはそれよりも早く」と答えて会場を沸かせた。一九六七年は連合王国の目標とする年であり、一種の宣戦布告とも受け取れる。
　レフとイリナはこのあと東から西へとアーナック大陸を横断し、各地で『宇宙旅行の準備を！』という題で講演をするのだという。
　そしてレフが視聴者に向けて締めの挨あい拶さつをする。
〈『二一世紀博覧会』に我が祖国のパビリオンがないことは残念ですが、皆さんに会える日を楽しみにしています〉
　会見が終わると、レフとイリナの大陸横断の日程が映る。そのとたん、ミアが「あっ」と声を上げた。
「彼らが万博に来る日、カイエさんとバートもいるんじゃないですか」
「ホントだ……五月一三日って」
　バートとカイエが目を合わせて首をかしげると、テレビのニュースキャスターがもったいつけて言う。
〈驚くなかれ。万博で開かれるカンファレンスに、宇宙飛行士のおふたりがスペシャルゲストとして登壇することが決まりました！〉
　バートもカイエも開いた口がふさがらない。そんな話はいっさい聞いていなかった。

「共和国側から要請があって、急きゆう遽きよ決まったみたい」
　バートとカイエは広報室に呼び出され、ジェニファーにそう告げられた。カンファレンスの議題に『共同開発について』という項目も設定されるという。
「カンファレンスだけじゃないわよ。その前日、あなたたちと動くことも決定したから」
　ジェニファーは淡々としているが、バートは心中穏やかではない。

「動くとは……」
「いっしょにパビリオンを回って、五ツ星ホテルで夕食会」
　おおごとになってきた。期待よりも不安が大きくなってくる。
　一方、カイエは胸を躍らせている。
「イリナさんと話してみたかったから楽しみ！」
　両極端な反応を見せるふたりにジェニファーがしれっと伝える。
「食事のマナーをしっかり復習しておきなさいよ。女王陛下もいらっしゃるから」
　聞き間違いではない。「女王陛下」と言った。
　これにはカイエもポカンとなる。
「……カンファレンスの件は伺うかがってましたけど、夕食会もですか？」
「想像してごらんなさい。共和国の宇宙飛行士と、連合王国の技術者、そして女王陛下が一堂に会して食事をすれば、世界平和と宇宙開発のアピールになるわよね～」
　棒読みのジェニファー。政府の思惑が透けて見える。月面探査の失敗や核実験などを誤ご魔ま化かす目的だろうか。
「もう、なるようになれだ……」
　覚悟を決める。
　経費でカイエと万博に行けて、五ツ星ホテルに泊まれて、世界的英雄と女王陛下との食事まで楽しめる。
　さらに言えばカンファレンスで憧あこがれのクラウス博士と議論できる。
　まったくもって最高だ。
　手のひらににじむ汗をズボンで拭ふきながら、そう思うことにした。

『二一世紀博覧会』が開催されている西海岸の大都市、マリンシティ。水と緑に囲まれた美しい街だ。ここよりも西には果てしない大海が広がっており、一九世紀に起きた西部開拓の終着点といえる。

そんなマリンシティに、周りよりも一足早く、二一世紀が訪れた。

街を挙げてのお祭り騒ぎで、土産物屋には宇宙関連のグッズが並ぶ。ロケットの模型に、惑星をイメージしたカラフルなクッキー。多種多様な商品が飛ぶように売れていた。

半年間で一〇〇〇万人の来場を見込む科学の祭典には、各界の著名人もぞくぞくとやってくる。他国の皇太子や王族、有名アニメスタジオの創業者、ミュージシャンや映画スター。

そして、その著名人のなかにバートとカイエも入っている。

政府御用達の五ツ星ホテルで一泊した広報団一行は、警備スタッフを引き連れ、会場に直通のモノレールに乗る。

ビル群を抜けていく姿は、さながら空飛ぶ電車だ。

いつもより高揚しているカイエが窓の外を指す。

「見て！　スペースタワー！」

天空を突き刺す全長一八〇メートルの塔は万博のランドマークだ。円盤状の展望台はまるでＵＦＯが塔に刺さっているようなデザインで、来場者の目を釘付けにする。

いやが上にも期待が高まり、バートも興奮を隠せない。

「ＳＦ映画みたいだ！」

「うん、想像してた以上に二一世紀を感じる！」

そんなふたりにジェニファーは引率の先生のような口ぶりで言う。

「おふたりさん、盛り上がるのもいいけど、仕事ってこと忘れないでよ」

言われてハッとなるバートとカイエ。

すっかり観光気分になっていた。

ジェニファーは『リヴィン画報』の記者と顔を見合わせ、苦笑する。
「でもまあ、自然な笑顔のほうが宣伝になるわね。羽目を外しすぎなきゃなんでもいいわ。でも、共和国のふたりに呆あきれられないようにね」
「はい……」
共和国側と合流するのは夕方だ。日光に弱いイリナに合わせたスケジュールが組まれており、日が陰るまではバートたちだけでパビリオンを回る。
しかしバートは早くも緊張が腹の底に溜たまりはじめている。憧あこがれのふたりに対面したときの応対をあれこれ妄想してしまい、昨晩はほとんど眠れなかった。
「カイエは昨日眠れた？」
「うん、ぐっすり」
「ほんとに？」
「家の硬いベッドに比べたらふかふかで天国なんだもの。共和国のふたりに会ったら何を話そうか考えてるうちに寝てたわ」
やはり彼女は強心臓だ。

雲ひとつない未来へつながるような青空に、万博参加国の国旗がはためく。
二一世紀博覧会の会場は世界中からやってきた人々でごった返している。新血種族の姿もちらほらあるが数は少ない。
メインゲートの前にある移動式遊園地『アミューズメントゾーン』では電飾が星のように煌きらめき、隕いん石せき風のジェットコースターが来場者を出迎える。
にぎやかな会場にバートとカイエが一歩足を踏み入れたとたん、さっそく来場者たちが気づいて騒ぎ出す。

「サインちょうだい！」「握手して！」
　人々が群がり、即席の交流会がはじまる。
　他国からの来訪者は新血種族を見慣れていないのか、カイエを物珍しげに見て、おっかなびっくりという感じで接していた。子どもたちは「目が赤い」「耳が尖とがってる」と無む邪じや気きに指さす。
　だが、カイエはどういう態度を取られてもにこやかに手を振る。彼女の笑顔に勝るものはなく、微ほほ笑えみかけられると皆すぐに表情をほころばせる。
　サインや握手をしながら歩くバートとカイエに、『惑星クッキー』を抱えた小太りの少年が熱い想いをぶつける。
「僕は将来ＡＮＳＡに入ろうと思ってます！」
　少年のきらきら輝く瞳ひとみを見て、バートは自分が子どもだった頃を思い出す。
　ロケット科学者のクラウス博士に憧あこがれ、ＳＦに夢を見て、組織のしがらみなどなく、小型衛星を作って飛ばしていた。
「今、何歳？」
　バートが問うと、少年は勢いよく答える。
「一〇歳です！　学校で宇宙クラブに入ってます！　コンピューターにも興味があります！」
「ありがとう！　君が職員になるの、楽しみに待ってるよ」
　もっとじっくり話したいが、ひとりひとり相手をしている時間がない。
　サインにひと区切りつくと、バートはカイエに話しかける。
「技術者として、子どもたちの見本にならないとね」
「ええ、責任重大なミッションね」
　カイエはわざとらしく眉み間けんにしわを寄せると、ふふっと笑い声をこぼした。

万博のメイン区画は大きくわけて四つの世界がある。
・『二一世紀の世界』──ハイテクの粋を結集した未来体験。
・『商工業の世界』──企業や外国のパビリオン。多種多様な展示。
・『エンターテインメントの世界』──さまざまなショーや催し物。
・『科学の世界』──政府が出資する科学館やＡＮＳＡの展示。
バートたちはジェニファーに案内され、一五〇メートル四方の巨大なテントに入る。
「まずは『二一世紀の世界』を回るわよ」
展示場の半分は体験型アトラクション『未来ツアー』に使われており、数十分待ちの長い行列が伸びる。
だが特別ゲストのバートたちは並ばずに入場できてしまう。
「少し気まずいね」
「割り込みみたいで悪いわ……」
カイエも同じ気持ちらしい。
ふたりで行列に向かって「ごめんなさい」と軽く頭を下げる。しかし来場者たちは気にすることなく、地上の英雄の来訪を快く歓迎する。
「──おーい！　俺を月へ連れて行ってくれ！」
誰かの陽気な叫びに爆笑が起こる。
バートとカイエは苦笑いを浮かべながらも親指を立てて応える。二一世紀を迎える頃には、月よりもっと遠くへ到達しているはずだという想いを込めて。
さあ『未来ツアー』のスタートだ。
まずは未来の移動手段、『バブル・レーター』に乗る。
「バブル」と「エレベーター」を組み合わせた球状の乗り物は、光を屈折させる技術を使い、アクリル製の透明の壁に虹を投影する。
スピーカーからはシンセサイザーの浮遊感漂うＢＧＭが流れ、タイム

マシンに乗って未来へ連れて行かれる気分になる。
　カイエが不思議そうに虹をなぞる。
「石けんの泡のなかにいるみたい」
「研究所のエレベーターがこんなのだったら楽しいよね」
　二一世紀の人々はこんな乗り物で移動するのだろうか。
　ツアーの次の舞台は、ＳＦコミックのような『未来の都市』。ここには二一世紀の日常生活が展示されている。
　通勤は自分専用のヘリコプターなので、渋滞や混雑した電車はない。
　砂漠で野菜を栽培できるドーム型工場に、プランクトンを食用に変える収穫場。食糧の心配は不要になる。
　空気を汚す煙突はなくなり、輸送手段は電気化して、公害には悩まされない。
　工場を覗のぞくと、人間と新血種族の人形が仲良さそうに働いている。ソーラーフレア・クラブが見たら激高しそうだ。
　ロケット開発に参加する自動車企業が展示しているのは、車体に戦闘機のような翼とコクピットを持つ宇宙時代のコンセプトカー『エア・カー』。
「かっこいい！　カイエ、見て！　ハンドルが航空機用の操そう縦じゆう桿かんだ。ブレーキも空気抵抗だって」
　今にも空を飛びそうな流線形のフォルムにバートが目も心も奪われていると、カイエがくすくすと笑う。
「あなたも男の子なんだね」
「え？」
「ううん。乗りたい？」
「そりゃ、まあね……」
　はしゃいだのが急に恥ずかしくなってきて、咳せき払ばらいして広報役の顔つきになる。

「ん、んん……どれも宇宙開発の技術が活かされているみたいだね」
　しかしカイエはくすくすと笑いつづける。たしかに夢中で早口になっていたかもしれないが。
「な、なに……？」
「ごめん。なんでもないよ」
　口を結んで笑いを堪こらえるカイエ。
　近くにいたジェニファーや記者までニヤニヤしているので、バートはいたたまれなくなって足早に先へ進む。
「さあ、次に行こう」
『未来型ハイテクハウス』はライフスタイルを変えるすばらしいアイデアに満ちている。
　外部からのほこりをシャットアウトする真空システム。
　家具の素材は軽量プラスチックや強化紙で「重力からの解放」を謳うたう。
　キッチンはコードレス化が進み、太陽熱で調理できる。
　家の配色に飽きたら照明のスイッチを回すだけで色が変わる。
　ふとカイエを見ると、ものすごく集中した顔で解説文を読んでいる。職務を放棄して記憶しているのだろうか。
　それはよくない。今日はミアが不在なので、代わりにお仕置きをしてやろう。さっき笑われた仕返しだ。
　バートは家事用ロボットアームを使って、カイエの首筋をそっと撫なでる。
「ひぁああっ!?」
　カイエは絶叫して飛び退のき、腰から崩れ落ちる。異星人に急襲されたような表情で首筋に手を当て、放心する。
「……」
　ここまで驚くとは思わなかった。

しばらくして、カイエはようやくロボットアームに気づいた様子で。
「……今やったの、バート？」
「ごめん……君があまりに夢中だったから、つい……」
ペコリと謝ると、カイエは両頬ほほを真っ赤にして「うぅ……」とうめく。
わざとらしい溜め息いきを吐ついて呆あきれるジェニファーに
「次、行くわよ」と促され、先へ進む。

『未来型オフィス』は完全なペーパーレスで、収納棚やパンチカードはひとつもなく、小型のコンピューターがひとり一台ずつ用意されている。
コンピューターを展示の主役に据えたのはここだけではない。
図書館協会の設置した『未来図書館』には、ＡＣＥ社のライバル企業が開発した巨大な新型コンピューターが鎮座している。
コンピューター内に保存された本の文章を世界中の人々が共有し、どこでも印刷できるという画期的なプログラムだ。
説明書きには「コンピューターの潜在能力は制作者ですら把握できない」とある。
来場者たちは火を発見した原始人のような顔つきでコンピューターに接し、プリントアウトされた文章を神の啓示を受け取るがごとく熟読する。
その様子を見ていると、バートはちょっとした優越感を覚える。昨夏、Ｄルーム担当を命じられたときには己の運命を恨んだものだが、今となっては感謝しているくらいだ。
「Ｄルームは近い将来、『コンピューター課』に昇格するかもしれないね」
バートが期待を込めて言うと、カイエは感慨深そうに答える。

「人事部から『豚の血を与えておけ』なんて言われたのが大昔みたい……」
「こうして世間に認められてきたのも、君のがんばりのお陰だと思うよ」
「ううん。私たちのがんばり、だよ。人間のコンピューター技術者代表、バート・ファイフィールドさん」
「あはは、プレッシャーだ……がんばります」
　優越感に浸った自分に活を入れる。
　コンピューターは万博の入場者数の予測にも使われるなど活躍の場を広げているが、普及はまだまだ先の話だ。それゆえ、ＡＮＳＡの有識者会議で「有人月面着陸においてコンピューターの自動操縦は必要不可欠」と結論が出ていても、多くの人は「よくわからない未知のモノ」として敬遠する。
　とくに飛行士たちは敵視すらしていた。
　なぜなら、機械に自動操縦されてしまうと、鍛え抜いた操縦の腕が不要になるからだ。テストパイロット上がりの荒くれ者たちは、アーロンのように物わかりのいい者ばかりではない。
　もちろん、手動操作で万事うまくいけばいいのだが、つい先日『二度目の軌道飛行』で失敗寸前の危機が起きていた。
　搭乗した飛行士が『宇宙蛍』を見ようとして身勝手な操縦をし、帰還時にもスイッチの切り替えを忘れてしまったのだ。
　結果、エラーが出て燃料不足となり、無線連絡が約二五分間も途絶えた。
　飛行士はなんとか生還したが、フライトディレクターを務めたデイモン部門長は「お前は地上で生涯を終えろ！」と激怒した。
　これにより、ＡＮＳＡ内で「何を機械に任せて、何を人に任せるのか？」「人間はコンピューターのバックアップにすぎないのか？」「機

械任せで失敗した場合、誰が責任を取るのか？」という議論がされはじめた。

さりとて、コンピューターが月面着陸の命運を左右するのは間違いない。バートはDルームの重要性と広報役の責務をあらためて痛感する。過去と未来のつなぎ目に、自分やカイエは存在するのだと。

さまざまな思いを巡らせたコンピューター区画を抜けると、『未来ツアー』はいよいよ終着駅へ。

巨大な地球儀のアーナック大陸に据え付けられたスピーカーから、サンダンシア女王の戴たい冠かん式しきのときの挨あい拶さつが流れる。当時まだ一四歳だった彼女は幼い声で「明るい未来を作りましょう」と国民に呼びかける。今夜はこの御方と夕食会かと考えると、バートは腹の調子がおかしくなりそうだった。

こうして未来旅行を終えたバートとカイエは記者に感想を求められる。

バートは「技術者魂をくすぐられる夢の世界でした」と伝え、カイエは「コンピューターがより良い明日を作ってくれるでしょう」とアピールする。

そして、パビリオンを出る直前、バートは未来都市を振り返ってふと思う。

二一世紀になったらどのくらい実現するのだろう、と。

今から一〇〇年前にようやく大陸横断鉄道の建設がはじまり、南北戦争で使われた大砲で人間を月へ打ち上げるというＳＦ小説が書かれた。動力付きの飛行機が世界ではじめて空を飛んだのは一九〇三年。同年に、まだ共和国が誕生する前の帝国で、宇宙ロケット理論の論文が発表された。

未来から急に現実に引き戻され、今自分の直面している課題の大きさを再認識したバートはカイエに不安をそっと打ち明ける。

「二一世紀よりも前に……六〇年代中に、有人月面着陸を目指してるわけだよね。それをもし達成できなければ、未来都市は夢で終わってしまうかも……」
「でも、『今日の不可能は、明日は可能になる』……だよね？」
　カイエが口にしたその言葉は、宇宙ロケット理論の論文内の章題。未知に挑戦する科学者や技術者の合い言葉だ。
　少し弱気になっていたバートだが、前だけを見つめる彼女に励まされる。
「君の言うとおりだね。ついこのあいだまでは宇宙を飛ぶことすらＳＦだったんだから。僕たちで二一世紀に向けて先せん鞭べんをつけなきゃ」
　カイエは未来都市を見つめて、胸にそっと手を置く。
「この風景を覚えておくの。いつかここにたどり着けるように」
　科学者の夢に溢あふれたパビリオンをバートも心に焼き付ける。
　月を越えた先にある未来を。

　気持ちを新たに、次の目的地である『外国大通り』へ向かう。
　大通りの両側には各国のレストランや土産物屋が並び、日頃は見かけないエキゾチックな衣類や手工芸品も購入できる。
　珍しい商品に目移りしていると、ジェニファーが立ち止まる。
「この国のパビリオンを見学して、そのままランチね」
　朱しゆ色の木材を組み合わせた大きな門がバートの前に立ちはだかる。
「……これ、高校の教科書で見たことがあるような。えーっと。カイエわかる……？」
「全然わからないわ」
　カイエは首をひねる。

「鳥居よ」
　ジェニファーに助け船を出された。
　きょとんとするカイエ。
「トリー？」
「ふたりとも、科学以外の知識はからっきし？」
「はい……」
　肩をすくめるジェニファー。
「そのうち広報で海外を回るかもしれないから、最低限の知識は身につけなさいよ」
　これまで理数系一本で生きてきたバートは他国の文化に興味を持ったことはないが、他国との共同開発が本格化すれば、いろいろな国との交流も増えるだろう。ジェニファーに忠告されたとおり勉強しないと、新血種族の『ピンキー・ブラッド』を知らなかったように、大事な場面で失態を犯すかもしれない。
　その『ピンキー・ブラッド』についてはバートなりに調べてみたが、詳細が書かれた本などは見当たらず、Ｄルームの職員に訊たずねたら詮せん索さくされそうなので訊きけず、結局ＵＦＯ観測の日にカイエとやり取りした内容が知識のすべてだった。
　カイエに目を向けると、鳥居の柱を興味深そうに撫なでている。
「トリーね……」
　彼女の場合、知識を吸収しすぎると脳内でまたオカルティックなものが醸造されてしまうかもしれない。
　まぁ、それはそれでおもしろいからいいやとバートは心のなかで笑う。
　鳥居を潜くぐると、自然美を感じさせる庭園が広がる。
　奥には寺院の原寸大レプリカが建っていて、周囲には寺社仏閣のミニチュアや職人による伝統工芸品が飾ってある。

そのとなりは一転して現代の展示になり、オートバイや光学機器などの工業製品が並ぶ。

この国は、かつての大戦で連合王国が爆撃して壊滅させた国だ。

戦後、連合王国の指揮下で軍は解体され、飛行機の研究は禁止されたが、連合王国に留学していた科学者などが結集して宇宙開発の研究をはじめた。開発力は未熟なようだが、いつの日か人工衛星の打ち上げが決まれば、ＡＮＳＡはよろこんで追跡調査などの協力をするだろう。

かつての敵国でも手を取り合えることは、先日打ち上げられた『史上初の二国協力による人工衛星』でも証明されている。

そもそも最初から敵になったり争ったりしなければいいのにとバートは思うが、人類の歴史は戦争が作ってきたことを考えると、それこそ夢物語だ。無論、競争も互いに良い刺激を受けるならいいのだが。連合王国と共和国、それどころか有人宇宙船センターとロケット開発センターの関係は良好とは言いがたい。などと思うことは多々あれど、ＡＮＳＡの一職員に解決できる問題ではなく、現状を受け入れるしかなかった。

パビリオン内をひととおり見て回ると、ランチの時間だ。

レストランという呼び名が似つかわしくない風変わりな木造建築に入る。

食事をする場所は一段高いところにある。

バートとカイエが上がろうとすると、レストランのスタッフに「ストップ！」と声をかけられた。

「っ!?」

びっくりして足を止める。順番でも抜かしたのだろうか。カイエも不思議そうに首をひねる。

するとスタッフに足もとを指された。

「……靴を脱ぐの？」

店内をよく見ると、誰も靴を履いていない。

　戸惑うふたりを記者がカメラで撮る。端で見ているジェニファーがいやらしい笑みを浮かべている。
「知ってるなら教えてくださいよ」
　バートが訴えるとジェニファーは首を横に振る。
「完璧じゃないところを見せたほうが人気が出るから。未来の道具であるコンピューターを操るのは、他愛もないミスをする人間と新血種族……なんてね？」
　この調子では食事も気をつけないと危ない。

　個室の座敷に案内されたバートとカイエは座り方をジェニファーから指示される。
「セイザ……？」
「そう。この国の礼儀作法よ」
　言われたとおりの格好で座ざ布ぶ団とんの上に座る。
　全体重が膝ひざと足の甲にのしかかり、とにかく痛い。
「これは……ううっ」
　バートが苦痛に身み悶もだえるのに対して、カイエは背筋をピンと伸ばす。
「ちょっと痛いけどすぐ慣れるかな」
　畳の縁を指でなぞったり、リズムのない悠久な音楽に耳をかたむけたり、彼女は好奇心の塊だ。
　じわじわと足が痛くなるバートの目の前で、ジェニファーはゆったりと足を崩している。
「なんでセイザしないんですか？」
「私は広報役じゃないから」
「それはそうですけど、礼儀作法と言うなら……」
「つべこべ言わないの。カイエを見習いなさい」

　最初は姿勢良く座っていたカイエだったが、爪つま先さきをぐねぐね動かしはじめた。
「痛くなってきたわ……」
「修行かな……」
　足の痛みに耐えながら雑談していると、食事が運ばれてくる。
　バートもカイエも見知らぬ料理に目を奪われる。
「ヒヤヤッコ？」
　ふだん食べているハンバーガーや南部料理と比べると別世界の食べ物だ。
　カイエは皿を揺すり、観察する。
「宇宙食みたいな質感ね」
「その二本の棒……箸はしを使って食べてみて」
　ジェニファーに命じられてふたりは箸を試すが、うまくつかめない。
「あっ、崩れる！　落ちる！」
　苦戦しながらもバートなんとか口に運ぶ。
「……不思議な食感だ。ねえ、カイエ」
　訊たずねたバートはアッとなった。
　カイエの皿にはホイップクリームのようになった白い物体がある。
「化学変化が起きたみたいになってる……」
「どうしてもつかめなくて」
　そういう問題ではない気がする。
　不器用さを憐あわれんだジェニファーがカイエにスプーンを渡すと、カイエはスープを飲むようにして白い物体を吸う。
「やっぱり宇宙食みたい……」
「そうなったのは君のせいだと思うけど……」
　つづいて寿司が運ばれてくる。
　皿がそれぞれの前に置かれるが。

「ん？　カイエのだけ、緑色のマッシュポテトみたいなのが山盛りだ」
　バートの疑問にジェニファーが答える。
「マッシュポテトじゃないわ。ワサビっていう香辛料」
「ワサビ？」
　初耳だ。
「カイエは辛からいの好きでしょ？　特別にたくさん用意してもらったから好きなだけ使って」
「へぇ。どんな味なのかしら？」
　カイエはワサビをスプーンですくって食べる。ジェニファーが「あ」と言うが、そのときにはすでにワサビはカイエの口のなかで。
「んー……？」
　もぐもぐと味わっていた彼女は「？」と硬直して。
「んっ！」
　表情が急変し、両手で口を押さえるとテーブルに突っ伏して身体からだを震わす。
「カイエ!?　え、ジェニファーさん、これ!?」
　ジェニファーは額ひたいを押さえ、あきらめの表情を浮かべる。
「手遅れ」
「ちょ、ちょっとそんな……どうしたら……」
　狼狽うろたえるバート。
　呻うめきながら顔を上げるカイエ。涙が滝のようにこぼれ落ちる。
「みず……！　みずみずみずッ！」
　パニック状態になっている彼女に水を渡すとひと息に飲み干したが、涙は止まらない。
「大丈夫……？」
　ふるふると首を横に振るカイエは弱々しい声を絞り出す。
「辛さの質が違う……毒みたい……」

深刻なダメージからの回復を待ち、寿司、天ぷらと粛々と食事を進め、山海の珍味や高級食材に舌した鼓つづみを打つ。正座のせいで足が痛くて食事に集中できないが、礼儀作法としてバートもカイエもつづける。

そんななか、カイエがふと思いついたように言う。

「お土産にワサビを買って帰って、ミアに食べさせてみようかしら？」

「賛成。日頃の仕返しだ」

バートとカイエは目を合わせてニヤリと笑う。

そしてすべて食べ終え、次の目的地へ向かおうと立ち上がる。だが、爪つま先さきに電流がビリビリ流れるように痺しびれて、感覚がなくなっていて──

「っ……!?」

バートがバランスを崩して倒れそうになると、同時にカイエもよろめく。

「うわっ！」

「きゃっ！」

メガネが飛ぶほどの勢いでぶつかり、そのままカイエを押し潰つぶすように倒れ込んだ。

「痛たた……」

身体からだが重なりあい、バートは前腕の下に柔らかなものを感じる。

「……ん？」

「バート……あの……」

顔を紅潮させて恥じらうカイエ。

彼女の胸に腕が乗っかっていた。
「ごめん！」
気づいた瞬間に全身がカッと熱くなり、汗が噴き出る。不慮の事故とはいえ大失態だ。腕を慌ててどけて、飛び上がるように起きる。
が、足の感覚がまったくなくて、前につんのめる。
「！」
バートの眼前にカイエの顔が迫る。カイエは驚いて目と口を見開く。このままでは口と口がぶつかる。
避けなければ！
全力で首をひねり、ドスンと倒れ込む。
「痛っ──！」
畳で鼻をしたたかに打ちつけたが、バートの頭はカイエの首筋に突入し、かろうじて口づけは回避した。彼女のうなじから香り立つシャンプーの甘い匂いに包まれて、バートは安あん堵どの溜ため息いきを漏らす。
「ふぅ……」
と、その息がカイエの耳にふっとかかる。
「ひぁっ……」
ビクッと頭を動かすカイエ。
「ほんとごめん！」
ほっとしている場合ではない。醜態をさらしすぎだ。しかし、起きたくてもまだ足が痺しびれているので、身体からだをよじって転がる。
すると膝ひざの下に硬い感触が。
メリッ。
金属がひしゃげる音がした。
「ん……？」
バートは嫌な予感に苛さいなまれつつ、膝をどかして、おそるおそる

見る。
　と、メガネのフレームが折れ曲がっていた。
「あー！」
　自爆した。昨年の行進後に新調したばかりの青いフレームのメガネが、見るも無残な姿になっている。
　ジェニファーが冷めた顔で茶をすすり、皮肉っぽく言う。
「宇宙船は接触事故をさせないようにね」
「やめてください……」
　正座のせいでひどい目に遭った。個室だったお陰で来場者に見られなかったのは不幸中の幸いだ。
　幸いというか、ちょっとしたラッキーもあったけれど。
　チラとカイエを見る。ゆっくりと身体を起こす彼女は足先をさすり、記者に向けて照れた苦笑いを浮かべている。
「……」
　ラッキーとか思うのはよくないと自分を戒めるバート。
　とはいえ、感触や香りはしばらく忘れられそうにない。

　結局メガネは直らず、外国大通りの土産物屋で代用品を購入することになった。壊れたものと同じような青色のフレームを選んでいると、カイエが近未来風のメガネを持ってきた。
「これはどうかな？」
「……奇抜すぎない？」
　まん丸なレンズが顔の半分くらいを覆ってしまう。
「でも似合いそうだよ。それに、また青色っていうのも新鮮味がないし。ね、試着だけでもしてみて」
「いいけど」
　かけたとたん、カイエがプッと吹き出す。

「謎なぞの科学者みたい！」
　まんまとはめられた。
　しかし職場では見せない子どもっぽい表情をする彼女はとてもかわいらしい。
　寝不足にもかかわらずバートの気分が高揚しているのと同じで、万博という場所が彼女を愉快にさせているのかもしれない。
　ひとりだったらこんなに楽しめなかっただろう。
　そして、彼女もそう思ってくれているといいなと、カイエがティアドロップ型の妙なサングラスを試着するのを見てバートはしみじみと感じる。

『商工業の世界』は国内外の企業や団体によるさまざまな展示品で溢あふれる。
　国内からの出展は宇宙開発に絡んでいる企業が大半だ。月面探査車に関わる自動車メーカーは小型の核推進装置を搭載した未来車を、通信放送衛星を開発している電話会社は『世界初のコードレス電話』を展示した。ＡＣＥ社もコンピューターを展示していて来場者の注目を集めている。
　コンセプトが未来とはいえ、参加国のなかには科学の発展していない国も多くある。それらの国はスタッフが民族衣装を着たり、伝統文化のショーを披露したりして来場者を楽しませている。
　工夫を凝らした展示の数々はおもしろいが、バートは少し物足りなさを感じる。その大きな理由は、今もっとも知りたい国の展示がないからだ。
　ツィルニトラ共和国連邦。
　宇宙飛行士は世界中に披露されたが、宇宙船やロケットの詳細は秘密のベールに覆われたままだった。打ち上げの写真には機体が見えないよ

うに黒塗りの修正が施されており、とにかく秘ひ匿とくが徹底されている。
　もし展示をするなら、何を展示したのだろうか？
　好奇心が満たされずに腕組みしていると、カイエに顔を覗のぞきこまれる。
「お腹なかが痛いの？　トイレならあっちにあるよ」
「違うよ……」
　理由を話すと「私も知りたい」とカイエは頷うなずく。
「技術力の背景も不明だし……何より、吸血鬼も気になる」
　新血種族のルーツは旧大陸から渡ってきた吸血鬼始祖オリジナルズ。そして、カイエの母が持っていた、イリナの首飾りと同じ青い宝石。
「記者会見を見てると公おおやけには言えないことも多そうだけど、いろいろ訊きいてみたいわ」
　対面のときは刻一刻と近づくが、日没までにはまだ時間があるので、しばらくは広報の業務をこなす。
　ＡＣＥ社のブースで来場者と交流し、コンピューターについての質問に答える。
　最初は「鉄の箱」だと訝いぶかしんでいた老人もブースを離れる頃には肯定的になり、「二一世紀まで生きたくなった。まあ無理だろうが」と笑う。
「月への着陸は死ぬまでに見たいからよろしく」
「がんばります……！」
　組織内での争いが障害になっているなどとはとても言えない。
　しかし、ほかにも多くの人から有人月面着陸を期待され、激励されて気合いが入る。
　数人から「共和国に負けるなよ」と声をかけられたが、皆みな一様に贔ひい屓きのベースボールチームを応援するような軽さで、勝利を至上

命令としている政府との温度差をバートは感じた。
　ブースでの対応が終わると、つかの間の休憩になる。
　外国大通りで、旧大陸の小国からやってきた異国のワッフルを買って食べる。生地を覆い隠すほどフルーツと生クリームが盛られていて、すごいボリュームだ。
　とても美お味いしそうなのだが、バートは緊張が身体からだに充じゆう溢いつしてきて食欲がなく、ブルーベリーをフォークでつつく。
　そんなバートの目の前でカイエはぱくぱくと食べる。
「美味しい！　いくらでも食べられるけど、太っちゃいそう」
　唇についた生クリームをペロッとなめ、自然な微ほほ笑えみを浮かべる彼女を見ていると、人間の女性と変わらないよなとあらためて感じる。
　と、ぼんやりしていたら、カイエに「？」と視線を返される。
「どうかした？」
「あっ、いや、もうすぐ共和国のふたりに会えるなぁって思うと、食欲が……」
「食べないなら、もったいないから貰もらってもいい？」
「いいけど、君は緊張しないの？」
　バートがワッフルを差し出すと、カイエは目を爛らん々らんとさせてブルーベリーと生クリームをすくいとる。
「緊張と食欲ってべつじゃない？　私は甘いものを食べたほうが心が安らぐわ」
「そ、そっか。食べてみようかな」
　たしかに疲れたときには甘いものが効く。そこでバートはワッフル生地の端に生クリームをつけて口に入れたが、乳脂肪分がムワッとして身体からだが受けつけない。
「やっぱり要らない……」

　隣でコーヒーを飲んでいたジェニファーがスケジュール帳を確認する。
「次は『エンターテインメントの世界』に行ってカンファレンスの会場を下見する予定なんだけど、バートは『ショー・ストリート』に行ってみる？」
「ショー……」
　え？
　そこはパンフレットによると、猥わい雑ざつなバーやナイトクラブがある『大人のエンターテイメントの世界』だ。
　ダンスショーでは美女たちが『宇宙時代の衣類』を着ているのだが、異常に露出度が高く、ヌードになるパフォーマンスもあり、万博の開幕直後から「不健全」とクレームが寄せられていた。
　そこへ行くとは？
　訝いぶかしんでいると、ジェニファーが人差し指を自分の下唇にあてる。
「バート、興味あるって言ってなかった？」
「は!?　言ってませんよ!?」
「でも、問題視されてて数日後には閉鎖されるみたいよ。いいの？」
「だから興味があるなんて言ってません！」
「そうだっけ？」
　とぼけるジェニファー。
　何を言うんだこの人は。
　このままではカイエに誤解されてしまう。
　バートは弁明の意を込めて彼女を見る。
　と、首をひねられた。
「ショー・ストリートって、いかがわしい場所じゃなかった？」
　カイエは顎あごに指をあてて考えている。

まずい。
バートはジェニファーをとがめる。
「あのジェニファーさん、僕は行きたいとか興味あるとか言ってないんで。誰と勘違いしてるのか知りませんけど、やめてください」
するとジェニファーはコーヒーを優雅にすすった。
「冗談よ」
「え？」
「緊張をほぐしてあげたの」
「だからって変なこと言わなくても！　というか、よけいに心が乱れたんですけど！」
「ワサビの国に座禅っていう精神修行があるわよ。あなた心が弱いし、煩ぼん悩のうを捨てるためにもやってみたら？」
「やりません！」
まったく困ったお姉さんだ。
カイエは小首をかしげる。
「煩悩？」
「だから、ほんとやめて……」
ふたりに連携されたら絶対に勝てない気がする。
悪戯いたずらな笑みを浮かべてワッフルを食べるカイエにジェニファーが言う。
「カイエこそ、じつは煩悩まみれでしょ」
「んぐっ！」
カイエは喉のどにワッフルを詰まらせ、苦しげに胸もとを叩たたく。悶もだえる彼女を見てジェニファーはうれしそうに頷うなずく。
「なるほど。いつも計算していると見せかけて妄想に励んでいるのね」
「そ、そんなことありませんから！　ぜったいゼッタイ絶対っ！」
狼狽うろたえながらも断固否定するカイエに、ジェニファーは大笑い

する。
「あはは。さっすが穢けがれなき純潔の聖女様」
「ジェニファーさん！」
　ともかく話題が逸それて助かったとバートは内心で安あん堵どする。じつのところ、大人のエンターテインメントに興味はある。見に行きたいとも思っている。
　だからジェニファーに言われて少し焦ったのだ。
　口には出していないはずだが、と。

『エンターテインメントの世界』にあるオペラハウスは一〇〇〇人を収容できる広さで、ふだんはミュージシャンやコメディアンのショーなどのイベントが行われている。
　ただし五月一一日～一三日の三日間は特別に『宇宙の平和利用に関するカンファレンス』の会場となっている。
　開式の挨あい拶さつをするはずだった首相は風邪という理由で急きゆう遽きよ欠席しており、書面でのコメントだけが届けられた。
『ついに宇宙時代が到来しました。平和な未来、希望に満ちた未来。子どもたちが健康的で楽しく過ごせる未来。その未来を実現するために、我らが国の科学部門では、人種や宗教にかかわらず、すばらしい才能を募集しています』
　首相の体調はバートにはわからないが、風邪を悪化させて議会を欠席するわけにはいかないという判断なのだと思う。それに何より、来場者は首相よりも宇宙飛行士や女王の挨あい拶さつに期待しているのだから、無理して来る必要はない。
　豪華な面子メンツが集まるカンファレンスは注目度が高く、今日も会場は満席なのだ。三日間の開催で合計七つのセッションが予定されているが、どのセッションもＡＮＳＡが外部の科学者や企業の重役を招く形

を取っている。
　昨日の一日目は『一、宇宙科学と惑星』『二、深しん宇う宙ちゆう調査』という専門的な話し合いが行われ、人工衛星などの製造を担当する航空会社の副社長と科学者が登壇した。
　本日二日目は『三、宇宙科学が世界に与える影響』『四、宇宙科学のもたらす製品』という生活に身近なテーマで、万博出展企業から多数の科学者が参加する。
　バートとカイエはスケジュールが詰まっているため席には着かず、舞台裏からこっそりと覗のぞいて雰囲気を味わう。
　ステージで熱弁を振るっているのは、総合電機メーカーのエンジニアだ。宇宙探査の将来について語り、予算獲得のために知事や政治家に訴える。
「宇宙開発は私たちの社会全体を一段階引き上げます」
　──気象衛星は洪水を予測し、数千万人の命を守る。
　──無重力での医療研究は新薬の開発に役立つ。
　──宇宙船の電子部品は、小型の工業製品を生み出す。
　──燃料電池は自動車を進化させる。
　──太陽光を無限のエネルギー源にできる。
　未来予測に聞き入るバートだが、自分がこのステージに立つ姿を想像すると、頬ほおがぴくぴくと痙けい攣れんする。
「ちゃんとしゃべれるか不安になってきた……」
「身が引き締まるわ……」
　カイエもきゅっと体を固くする。
　明日のセッション内容は、『五、有人宇宙飛行と月面着陸について』『六、宇宙科学の共同開発について』、そして『七、登壇者との質疑応答』だ。
　結局、月着陸方式を巡る結論は出ていない。

おそらくクラウス博士とキッシング長官のあいだで熾し烈れつな討論が繰り広げられるだろう。

組織間の争いで観客が失望しなければいいのだが。

気に病む一方で、レフやイリナと共同開発について語れるのは楽しみだ。具体的にはいっさい進展していないが、今回の対話を機に一歩を踏み出せれば最高だとバートは意気込む。

質疑応答は小難しい内容ではなく、サンダンシア女王を交えて宇宙について気軽に意見を交換できるスペシャルプログラムだ。しかし子どもたちから予期せぬ質問も多く飛んできそうなので、アドリブが苦手なバートは戦々恐々だった。

カンファレンスの下見は終わった。

次はいよいよレフとイリナとの対面だ。

文化の違いで失礼なことをしないように、バートとカイエは共和国に関する本を読んで勉強してきた。

準備万端だが、緊張が背筋を這はい上がってくる。

ジェニファーは相変わらずさばさばした調子だ。

「本人たちが来る前に軽くリハーサルするから。場所を移動するわよ」

カイエは楽しげに目を輝かせる。

「やっと会えるね、バート！」

声をかけられたバートは硬直している。

「難しい顔して、何を考えてるの？」

「いや、トイレ……」

いつ以来か、急な腹痛に襲われる。

カイエやジェニファーから「いつものが出た」と笑いが漏れた。

広々とした海の果てに太陽が沈み、世界を照らす光が薄れると、吸血鬼が出歩ける夕刻となる。

万博の会場入り口からほど近い場所にある『科学の世界』。そのパビリオンの脇、連合王国と共和国の国旗が飾られた特設スペースが対面の舞台として用意されている。

世界の英雄をひと目見ようと集まった数百人の来場者とともに、バートとカイエは共和国一行の到着を待つ。

万博の実行委員を相手にバートはリハーサルをしたが、心臓のドキドキが止まらない。落ち着こうといくつか深呼吸をしたとき、入り口近くにいる群衆がざわめいた。

バートの視界に、テレビでよく見ていたふたりの姿が飛び込んでくる。

レフとイリナだ。

護衛の保安員を引き連れたふたりは細身のスーツを着こなし、来場者に手を振りながら、宇宙飛行士の堂々たる風格で歩いてくる。日傘を差したイリナは、青い宝石の首飾りは付けていない。

来場者は盛大な拍手をして、カイエも花のような笑顔で迎える。

イリナがカイエの前に進み、レフがバートの前に来る。

リハーサルどおりなのだが、一年前は妄想でしかなかったレフとの対面が現実になった衝撃で脳みそがショートし、事前にシミュレーションしていた内容が吹き飛んでしまう。

「あ……」

応対に戸惑っていると、レフから手を差し出してくれた。

「はじめまして、レフ・レプスです」

「は、はじめまして、バート・ファイフィールドです」

バートがレフの手を握ると、力強く握り返された。

「バートさん。お会いできて光栄です」

「と、とんでもない、光栄なのはこちらのほうです……！」
　かちこちのバートに向かって、レフは柔らかく微ほほ笑えむ。
　宇宙飛行士に選ばれる者は重量の関係で身長の低い者が多く、レフも同様、バートよりもひとまわり小さいのだが、圧倒されるオーラがある。
　バートの隣では、カイエとイリナが握手を交わす。
　ふだんは緊張など滅多に表に出さないカイエが珍しく硬い。感情を抑えるかのように唇を結んでいる。
　対してイリナは真まっ直すぐな視線をカイエに向け、まじまじと見つめる。しばらくすると、イリナは自分のなかで納得したように「へぇ……」とこぼした。
　相手が入れ替わり、今度はイリナがバートの前に来る。
　正対して目が合った瞬間、バートは息を呑のむ。間近で見る吸血鬼は、テレビの画面越しに見る姿とは全然違う。
　人間とも新血種族とも違う、近寄りがたいほどの高貴な威風。透きとおる白い肌と漆しつ黒こくの長い髪。夕陽を浴びた薄うす紅べにの瞳ひとみが深い朱あかに染まる。その美しさは、カイエとはまったく異質の、どこか背徳的とすら言える魅力がある。
「イリナ・ルミネスクです」
　透きとおった声はまだ幼く、バートは少し安心した。名乗って挨あい拶さつを返し、握手を求めて彼女の前にすっと手を差し出す。
　イリナは目を細めてバートの手を握る。
　ひんやりとしている。
　体温が低いのだろうか。
　虚空に浮かぶ月のような静けさをバートは彼女に感じる。
　互いに挨あい拶さつを終えると、レフとイリナは集まった人々へ向き合う。

まずはレフがマイクを取り、「こんにちは」と朗らかに話しはじめる。
「私たちは皆さんの国を東から西へと旅してきました。どの都市にも特色があり、美しい自然があり、おいしい食事があり、すばらしい国だと感じました」
次にイリナがゆるやかな口調で礼儀正しくしゃべる。
「学校訪問やテレビ出演など、たくさんの貴重な経験ができました。吸血鬼である私にも皆さんは優しく親切に接してくれました。感謝しています」
ふたりは世界中を歴訪しているだけあって、じつに堂に入っている。そうしてしばらくアーナック大陸横断旅行の感想を話し、最後にレフがまとめる。
「宇宙と平和の博覧会に、我が祖国のパビリオンがないことはとても残念です。ですが、皆さんの国の科学を体験し、楽しみ、よい土産話を持ち帰ろうと思います」
来場者から拍手が巻き起こり、歓迎のセレモニーは終わる。
そして最初の見学先である『科学の世界』へ、警備員や両国のスタッフ合わせて二〇人の大所帯で向かう。
その道中、レフとイリナは来場者たちに気軽にサインをして、あらかじめ用意してあった写真を配る。群衆が殺到して警備員がサインを断っても、ふたりは子どもには丁寧に応対し、少年や少女が「宇宙飛行士になりたい！」と言えば「宇宙は君たちを待っているよ」と笑顔で答える。
ふたりの人気のすさまじさをバートは肌で感じる。自身もサインを求められることは多いが、来場者の熱量が違う。アーロンやスティーヴといった連合王国の宇宙飛行士も人気だが、『史上初』という冠は偉大だ。

　宇宙での競争はよくないと思いつつ、この状況を見るに、月面着陸の一番乗りというのは重要に違いない。
　じつのところ、バートもレフとイリナにサインを貰もらうつもりで、ふたりの著書『宇宙への旅路』を自宅から持ってきていた。もちろん公務中にサインをねだるわけにはいかないので、ホテルでの夕食会のあと、隙すきあらばと狙ねらっている。
　この計画はまだカイエには言っていない。しかし、あらかじめ伝えておいたほうがいいだろうか。
　バートはジェニファーに聞かれないように、小声でカイエに告げる。
　すると、カイエは「えっ」と目をまん丸くした。
「いや、我ながらミーハーすぎるよね」
　バートが照れながら頭を掻かくと、カイエは胸の前で手を振る。
「じつは……私も本を持ってきてるの」
「君も!?」
　はにかむカイエ。
「だって、ふたりに会える機会なんて、もう二度とないかもしれないもの」
「職権乱用だ」
「あなたこそ」
　笑いながら話していると、ジェニファーが獲物を見つけたイーグルのように近づいてくる。
「こそこそと、悪事でも企んでるの？」
「いえ、なんでもないです」
　バートが誤ご魔ま化かすとカイエが適当な嘘うそを吐つく。
「カンファレンスについて話していただけです」
「ふーん、共和国のふたりにサインを頼むつもりかと思ったわ」
「ま、まさかぁ……」

鋭い。このお姉さんは怖い。
ジェニファーは冷たい顔で言う。
「記念に書いてもらってもいいんじゃない。業務時間外ならね。就寝前とか」
釘を刺された。
「まあ、私が許可しても、あちらさんがどうかは別問題だけど」
ジェニファーの視線の先には〔運送屋〕の女性がいる。周囲に目を光らせ、まるで戦場にいるようだ。
カイエがひそひそとジェニファーに確認する。
「秘密警察なんですよね……？」
頷うなずくジェニファー。
「粛清、拉ら致ち監禁、なんでもありの怖い組織だから。取って食われやしないでしょうけど、気をつけなさいよ」
「脅かさないでください」
にっこり微ほほ笑えむジェニファー。
「盗聴器を付けられないでね」
「は、はい……」
実際にありそうだから恐ろしい。
連合王国民の考える共和国は、重く、暗く、隣人がいつの間にか消えている世界だ。
笑顔が似合って温かみのあるレフとイリナは真逆と言える。
もっとも、ふたりが国家主導で世界中を回っている理由は、そんな悪いイメージを払拭させる目的があるのかもしれない。

『科学の世界』は連合王国の知を結集したエリアだ。
総勢一〇〇名以上の科学者が制作にかかわり、国民の興味を引く世界を創り出した。

テーマ別にいくつかのパビリオンがあるが、まずはレフとイリナに連合王国の科学を紹介するために、政府の出資する『科学館』を見学する。

科学の歴史を描いた短編映画からはじまり、物理学や数学の公式を解説するコーナー、五感を刺激する不思議なアート、科学が人生に与える影響など、さまざまな視点で科学を描いている。今この瞬間にも実験が行われている核ミサイルも科学の産物だが、そういった負の側面はここでは蓋ふたをされて見えなくなり、パビリオンは夢と希望だけで満たされている。

レフは展示に感嘆し、「すばらしい」と褒ほめたたえる。イリナは錯視や錯覚のアートに興味津々で、何度も不思議体験をしている。そんなイリナにカイエは積極的に話しかけ、早くも打ち解けている。

その胆力をわけてほしいとバートは心底思う。

尊敬するレフに話しかけたいが、どう声をかけていいのかわからず、近づいたり離れたりを繰り返す。

さあ、行くぞ……！

久しぶりに魔法を──レフが発射時に叫んだかけ声を唱えるバート。この言葉を支えにしていました、と伝えたいのだが、今この場で伝えるのはおかしい。

だんだんと混こん沌とんとしてくるバートの心を知ってか知らでか、レフが気さくに話しかけてくる。

「時間があるなら一日中でも見学していたいですね」

「は、はい！　そうです！　じっくり！」

あたふたしてしまい、会話のキャッチボールにならない。しかし、ゆっくりと見学したいのは本当だ。公務である以上、自分たちのペースでは見て回れない。

もしプライベートで来ていたら科学の海にずっと浸っていたい。

そう思わせる魅力がこの万博にはある。

科学館を出ると、今度はＡＮＳＡのパビリオンを見学する。展示物が多く、一周で約三〇分かかるほどの広さだ。

場内は宣伝広告の効果もあって混雑している。入り口では宇宙探査やロケット開発についての映像を流し、ＡＮＳＡの成り立ちを紹介している。人工衛星やロケットエンジンの模型には人だかりができる。また、一般人には理解が難しい展示──たとえば最新型の燃料システムや衛星の追跡方法には専門のスタッフを配置して、来場者の質問に答えられるようにしている。至れり尽くせりで、なんとしても成功させるという気合いを会場全体からひしひしと感じる。

そして、数ある展示のなかでももっとも注目を集めるのは、小さくて色も地味な円錐型のキャビン──

連合王国初の宇宙飛行士であるアーロンが搭乗した『ヘルメス宇宙船』の実物だ。ふだんは倉庫に格納されているが、今回ＡＮＳＡが万博のために特別に貸し出したもので、アーロンの実弟であるバートでさえ間近で見るのははじめてだった。

科学の粋すいを集めたこの乗り物は「宇宙船を着る」と表現されるほど小さな機体で、未知の空間を飛ぶにはあまりにも頼りない。これで兄が宇宙を飛んだのだと思うとバートは胸が熱くなり、宙そらから感慨が降ってくる想いだ。

レフとイリナは宇宙船と記念撮影し、記者から「イリナさん、宇宙船を見てどう思いますか？」と感想を求められる。

「自分の乗ったものと比べて、小さいかもしれないです」

イリナはにこやかに答え、レフもしっかりと頷うなずいて同意を示す。しかし、共和国の宇宙船はいまだに非公開なので、実際の大きさは不明だ。だから本当は共和国のほうが小さいかもしれない。今回に限ら

ず、各国の記者はなんとか真実を引き出そうと工夫を凝らして質問するが、マニュアルどおりに返されるだけでいつも空振りに終わっていた。
　質問攻めされるとレフとイリナをバートが遠目に眺めていると、ジェニファーに肩を叩たたかれる。
「カイエとふたりで宇宙船の前に行って。レフさんたちと記念撮影」
　命じられるがまま、バートはカイエと連れ立って向かう。
「私、宇宙飛行士でもないのに写っていいのかな」
　謙けん遜そんするカイエにバートは言う。
「君は弾道飛行に関する計算をしたんでしょ？　胸を張って写りなよ」
　するとカイエは顔を明るくしてバートを見る。
「うん、そうだね。ありがとう」
　実績のある彼女に比べたら、バートなどたんなる弟だ。こういうとき、以前のバートならば猫背で目が泳いでいたが、今では求められる役割をしっかり果たそうと思える程度には度胸がついた。
　連合王国の技術者と共和国の宇宙飛行士はヘルメス宇宙船の両脇にわかれて立ち、カメラのフラッシュを浴びる。
　そしてひとしきり撮影を終えると、バートはレフに話しかけられる。
「アーロンさんに会ったとき訊ききました。『弟は小型衛星打ち上げの記録ホルダー』だって」
　自慢してくれるのは光栄だが、なんとも照れくさい。しかし、どんな話をしたのか気になるので、おそるおそる訊たずねる。
「僕のこと、ほかに何か言ってました……？」
「『似てないかもしれないが、本当の弟だ。自慢の弟だよ』って」
「あはは……」と苦笑で誤ご魔ま化かす。たしかに外見も性格も似ていない。
「でも、どこか似てる気がする」
　レフが意外なことを言った。

「ねえ、イリナ？」
　問われたイリナはバートを見る。
「んー……」
　ルビーのように美しく朱あかい瞳ひとみで凝視され、バートがドギマギしていると、イリナは首をひねる。
「メガネのせいでわからないわ」
「あ、すいません。これさっき買ったばかりで似合ってないのかも……」
「外したら？」
　カイエにサッとメガネを取られた。するとイリナが即座に言う。
「全然似てない」
　ばっさり切られた。
　するとレフがイリナに「違うよ」と訂正する。
「顔が似てるというより、雰囲気っていうのかな」
「わからないわ」
　かたくなに認めないイリナはカイエに話を振る。
「カイエさんは、彼とアーロンさんが似てると思う？」
「それは……」
　カイエは腕組みし、バートにメガネをかけさせて、「うーん」と唸うなった挙げ句。
「似てないかな」
　微妙な空気が漂う。
　近くにいた記者や来場者たちのあいだでも「似てる」「似てない」論争がはじまる。衆目を集めるバートは居心地が悪くなり、メガネの弦つるを無意味に撫なでる。
　こんなとき、どう反応すればいいのだろうか？
　するとカイエが周囲の人々に向かってフォローを入れはじめる。

「待ってください。似てないというのは悪い意味じゃないんです。彼は彼と言うのでしょうか。広大な宇宙にひとつとして同じ星がないように、彼もまたひとつの星と言いたかったんです」
　話が壮大になってきた。
　イリナが「星？」とじろじろバートを見る。
「ええ。すべての星はそれぞれ違う光を放っています」
　カイエの過剰なフォローに呼応して人々が「星か……」と頷うなずき、バートに向けてフラッシュが焚たかれる。
　もう光のなかに消えたい。
　カイエは何が起きたのか理解できない様子でキョロキョロしている。
　しばらくバートがさらし者になっていると、騒動の元凶であるレフが頭を掻かく。
「結論としては、似てないそうです」
　来場者や記者から笑いが沸き、騒動が収まった。ようやく解放されたバートの全身から堰せきを切ったようにどっと汗が出る。
　兄と似ているか似ていないかはさておき、星にたとえてくれたカイエのフォローはうれしいものだった。バートがＡＮＳＡに入った一年前は、自分を闇やみに紛れた星ほし屑くずの一欠片かけらだと思っていたのだ。今の自分が光り輝く星になれているかどうかバート自身には判断できないが、長くいっしょにいるカイエが星のひとつとして見てくれているのなら、彼女を信じようと思う。

　次は、宇宙飛行士の訓練を体験できるアトラクション『ムーン・ジャンプ』に挑戦する。地球の六分の一しかない月面の重力を疑似体験できる装置だ。
　天井からハーネスで吊つるされた鞍くらに腰掛け、強化ゴムのベルトで身体からだを固定し、バネの力を使って月面での身の軽さを作り出

す。
　装置はふたつあるので、一度にふたりが体験できる。今も子どもたちが楽しげに一メートル以上も跳ねている。
　おもしろそうだが上う手まくできるだろうか。バートがひやひやしていると、この場を取り仕切るジェニファーが軽い調子で話を進める。
「まずはホスト国のバートとカイエにお手本をお願いしましょう」
「手本……!?」
　カイエも不安を見せる。
「やったことないんですけど」
「ただジャンプするだけだから大丈夫よ。子どもでもやってるんだから」
　そう言ってジェニファーはバートのメガネをひょいと取った。
「あっ！」
「預かっててあげる。落っこちて壊れたら大変でしょ」
　すると今度はカイエが「あっ！」と声を上げて、困ったような顔つきでスカートの端をつまむ。
「私、スカートなんですけど……」
　ジェニファーは首をかしげる。
「見たらわかるけど」
「いえ、ほら、ジャンプしたら下からふわっと……」
　スカートのなかが見えてしまう。
　そう言いたいのだろうが、ジェニファーは相手にしない。
「問題ないわ。スカートの上からベルトを装着したら見えないから」
　そうすればたしかに風を受けて膨らむことはないだろうが。
　疑いの目を向けるカイエ。
「本当ですか……？」
「見えないって言ってるでしょ」

いきなりジェニファーがカイエのスカートの裾すそをつまんで引っ張る。
「もし見えたらサービスでいいじゃない」
「ちょ、ちょっと!?」
カイエが慌ててスカートを押さえる。
ジェニファーは両方の手のひらを上に向け、ふんと鼻を鳴らす。
「これだから穢けがれなき純潔の聖女様は……」
「それやめてください……！」
意地悪されて顔を真っ赤にするカイエだが、かまわずジェニファーがぐいぐいと装置の方に押す。
「早く行きなさい。後ろが詰まってるから」
「わ、わかりました……」
あきらめたカイエはとぼとぼと装置へ足を進める。呆ぼう然ぜんとやり取りを見ていたバートもジェニファーに突かれ、もうひとつの装置へ。
するとイリナがレフを無理やりバートの側に押し向ける。
「そんなに押さなくても見ないから大丈夫だよ……」
「見えるかもしれない」
どうやらイリナは、レフの視界にカイエを入れたくないらしい。そんなレフと目が合うと、苦笑いを返された。英雄は英雄で大変なようだ。
こうして、まずはバートとカイエが『ムーン・ジャンプ』にチャレンジする。
スタッフに手伝ってもらいながらバートは装置を身につける。ハーネスで身体からだを固定し、股下から腰の両側にベルトを回して強く締める。そして、上から垂れ下がっているバネをつなぐと──
「うおっ？」
グイッと身体を引っ張り上げられる力を感じる。

　カイエは念入りにスカートの裾をベルトの内側に突っ込み、ラッキーなサービスを全力で防ごうとしている。そのガードはかなり強固で、スカートは鉄のカーテンのようになり、めくれても膝ひざ上くらいまでだろう。
　バートが見ていると、カイエに咎とがめる視線を向けられた。
「あんまり見ないでね」
「……ジェニファーさんが言うとおり大丈夫だと思うけど」
「そうかな……ならいいんだけど」
　カイエは安心して眉まゆを開きつつも、スカートをぐいぐいと押し込んで防御力を高めている。
　準備が完了すると、スタッフが「体験時間は一分です」とスタートの合図を出した。
　どんな感じかと、バートは試しに軽くジャンプする。
　すると、重力を全然感じず、自分の身長の倍くらいまで楽々と跳べた。
「軽いぞっ!?」
　バートは調子に乗って何度も飛ぶ。
　月面ではこんなに身体からだが軽くなるのだろうか？
「よしっ、全力で……！」
　持てる力の限りを使い、地面を蹴け飛ばす。
「うおお!?」
　月まで飛び上がりそうになり、下腹部がひゅんとなる。
　かつて小学校の障害走でハードルを全部倒したバートには信じられない。まるで改造人間になったか、スーパーヒーローに変身した気分だ。
「カイエ！　すごいねこれ！」
　と彼女を見て、
「──っ!?」

バランスを崩しかけた。
彼女は縄跳びみたいな低空ジャンプをピョンピョン繰り返す。
どうやらスカートを気にしているようだ。
気持ちはわかるが、このスーパージャンプを経験できないのはもったいない。
「カイエ、一回くらい思いっ切り飛んでみなよ！」
天から呼びかけると、カイエは羨うらやましげにバートを見上げる。
「で、でも……」
「僕ら技術者は月面には行けない。でも月は万博にあったんだ！」
気分が高揚して意味不明なことを口走ってしまう。
だが、熱い想いは伝わったらしい。
カイエはスカートの端をギュッと掴つかむと、「えいっ！」と力強くジャンプした。その跳躍はバートの上をいく。
「ひやぁあっ!?」
目をまん丸くしたカイエはスカートの端をひらひらとなびかせて地上へ降りる。
「もう一回っ！」
再び高くジャンプするカイエ。
「わぁ！」
ジャンプするたびに笑みがこぼれる。
「すごい！　私がこんなに高く飛べるなんて！　月の重力は魔法そのものだね！」
すっかり夢中だ。バートも競って高く飛ぶ。
そうして月面着陸を果たした宇宙飛行士になった気分でしばらく跳躍を繰り返していたが、意外と疲れる。
よくよく考えれば、少しの力で高く跳躍できるとはいえ、技術者としてデスクワークの日々を送るふたりに連続でジャンプをする機会などな

い。
　しかも、固定したベルトが足の付け根にじわじわ食い込んできて痛くなる。
　最初の元気はどこへやら、一分経った頃には、ふたりとも壊れた操り人形のようにバネで吊り下げられていた。
　装置を降りたバートは膝ひざが笑い、足が攣つりそうになる。カイエもぐったりと座り込み、太ももやふくらはぎを痛そうにさすっている。
　記者に感想を求められたバートはひと言。
「宇宙飛行士って過酷ですね……」
　続いて、本物の宇宙飛行士であるレフとイリナの出番だ。
　来場者からの拍手を受けて装置に向かったふたりはさすがに慣れたもので、ハーネスの装着も簡単にこなす。
　ジャンプも安定していて、来場者がレフとイリナに手を振ると、ふたりとも余裕の笑顔で手を振り返す。
　連続で跳躍しても息が上がらず、額ひたいに汗がうっすらとにじむ程度だ。
　汗だくだくのバートは素直に感心する。
「さすがだね。身体能力が全然違う」
　カイエも乱れた髪を直しながら、共和国組に羨せん望ぼうの眼まな差ざしを向ける。
「技術者で正解だったとあらためて感じるわ……」
　一分間の華麗な『ムーン・ジャンプ・ショー』が終わり、レフとイリナがハーネスを外す。
　そのとき。
「……ん？」
　バートは彼らに少しの違和感を覚えた。イリナが物憂げに装置を振り返り、レフが励ますように彼女の背中を軽くポンと叩たたく。そのレフ

もどこか寂しげだ。
　しかしそれは一瞬で、ふたりはすぐに記者や来場者に笑顔を向ける。
　肉体的には元気でも、精神的に疲れているのだろうか。なんせこの万博は、彼らにとって大陸を横断する長旅の終着地点だ。
　それに比べて、たかだか一分間の連続ジャンプで疲れている場合ではない。憧あこがれの宇宙飛行士に会ったのだから、ホスト国の広報員としてちゃんとしなければ。
　バートは汗を拭ぬぐうとすっくと立ち上がり、ふたりに笑顔で話しかける。
「レフさん、イリナさん。次のパビリオンは、万博でもっとも人気があるアトラクションのひとつ『スペース・フライヤー』です。ＡＮＳＡのロケット製造を受託している航空会社が制作した、未来型の映像体験です」
　レフもイリナもにっこりと頷うなずく。
「パンフレットで見て楽しみにしていました。ぜひ行きましょう」
　バートはようやく役目を果たせた気がして、心がほわっと温かくなった。

　ＡＮＳＡのパビリオンを出た一行は、一度に七五〇人を収容できるドーム型の劇場『スペース・フライヤー』に向かう。ドームの壁面に世界最大のプロジェクターで映像を投影し、観客の周りに宇宙空間を作り出す。宇宙時代のプラネタリウムだ。
　科学技術が進歩すれば宇宙旅行も可能になると言われているが、『スペース・フライヤー』に乗船すれば、いち早く惑星間飛行を体験できる。
　バートたち一行は、偶然いっしょになった幸運な来場者たちと劇場へ入る。

階段状の床に据え付けられた席へ並んで腰掛け、旅立ちのときを待つ。バートの右隣にはイリナが座り、左隣にカイエが座る。

未知への旅を前にして、皆そわそわしている。カイエもどことなく落ち着かない様子で、胸もとに手を当ててふうと息を吐く。

バートは湧わき上がる興奮を抑え、カイエに言う。

「月面ジャンプの次が宇宙旅行なんて、夢みたいだね」

「ええ。早く二一世紀になってくれないかな、なんて。おばさんを通り越しておばあさんになりかけだけど」

「惑星間飛行に年齢制限があったら嫌だな。体力がない老人は無理とか……」

未来に思いを馳せているとブザーが鳴った。

ドームの照明が消え、暗くら闇やみに包まれる。

航空機の機内アナウンス風のナレーションが流れる。

《──皆さま、こんにちは。現在、二〇〇一年、五月一二日、午後五時。この便は地球発、天の川ミルキーウエイ行きでございます》

管制室からの通信だ。

《──地球から太陽、月を経て、土星の輪をくぐり、星雲を越え、遙はるか宇宙の果てへ。二〇億光年の旅となります》

シンセサイザーでアレンジされた交響曲が流れ、出発を彩る。

《──当機はまもなく離陸いたします。それではよい旅を──》

機械音声でロケット発射のカウントダウンがはじまる。

《──一〇、九、八、七、六、五、四、三、二、一、〇、リフトオフ──》

発射音が鳴り響いた数秒後、劇場を包んでいた闇やみに星が煌きらめく。

ストップモーションとアニメーションで作り出された想像上の宇宙に、七五〇人を載せた巨大な宇宙船が出航する。

《―航路を太陽に設定します。太陽系の中心へ向かいます》
　進行方向に現れた小さな赤い点が、みるみる大きくなる。
　燃え盛る太陽だ。
《―私たちに恩恵をもたらす太陽。この巨大な核融合炉は、毎秒約四〇〇万トンの物質をエネルギーに変換します》
　バートのすぐ近くで「ワッ」と女性の歓声が聞こえた。
　カイエかと思ったが、違う。
　イリナだ。
「すごい！　ねえレフ！」
　そう言いながら、イリナはバートの袖そでを引っ張る。暗いうえに映像に夢中になるあまり、左右を間違えているのだろうか。
　ずっと引っ張られているので、バートはイリナに小声で言う。
「すみません、僕、バートです」
「えっ？」
　一瞬の間があり。
「ひァッ―!?」
　イリナは慌てて手を離した。
「ご、ごめんなさい……ッ！」
「いえ……」
　気づいたレフがひそひそとイリナを注意する。
「周りに迷惑だから静かにしなよ……」
「わ、わかってるわよ。まあ、その、人間の科学技術も捨てたもんじゃないわね……」
　強気に振る舞うが、すぐに声は小さくなって、最後にはもにょもにょと闇に消えていった。
　カイエがくすくすと笑い、バートの耳元でささやく。
「イリナさんって、意外とかわいいね……」

「うん、もっと気位の高い感じかと思ってた……」
　純血の吸血鬼ということもあり、神秘的なイメージが強かった。しかし、今はもう親しみすら感じる。そう思えるのも、宇宙に夢を見る同志だからというのもきっとあるだろう。
　そんなやり取りをしているあいだにも、宇宙船は光の速さで旅を進める。
　太陽を一周すると、今度は水星から金星へ。
　この宇宙旅行にバートは覚えがあった。病弱だった子どもの頃、『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を読んで興奮し、布ふ団とんのなかで夢想した景色と同じだ。
　あの夢の続きを、今この目で見ている。
　その向かう先は。
《──航路を月に変更します》
　地球のすぐ傍そばに浮かんでいる月へ接近する。アニメーションで描かれた月は黄色と灰色が混じったような色で、地表はごつごつしている。
《──二〇世紀の半ばまで、月は眺めるものでした。それが今や、宇宙旅行の最初の駅になったのです》
　この二一世紀は、有人月面着陸が成功した未来だ。
　いったい、どうやって成功させたのだろうか。
　バートは人類史上初の月面着陸を想像する。
　脳裏に浮かぶ光景は、『地球軌道ランデヴー方式』でも『直接降下方式』でもない。
『月軌道ランデヴー方式』だ。
　やはりこれこそ正解ではないか？
　想像が膨らみ、形になっていく。月を周回する宇宙船のなかから、『プロジェクト・ハイペリオン』をシミュレーションする。

宇宙船から月着陸船を切り離し、月面へ降下させる。

月着陸船から降りた宇宙飛行士が月面に立ち、調査をはじめる。

そのあいだ、司令・機械船は月軌道を行く。

調査を完了した宇宙飛行士は再び月着陸船に乗り込み、帰還のための再打ち上げを試みる。

そして月軌道で司令・機械船と月着陸船がランデヴーし、ドッキングする。『ムーン・ジャンプ』での跳躍を思い出しても、再打ち上げのエネルギーは少なくてすむ。

さまざまな条件を満たす、理に適った方式だ。

以前この方式を提出した科学者は上層部から嘲笑を浴びて却下されていたが、よく調べると嘲笑には理由があった。

技術論文が間違いだらけだったのだ。

論文に記載された月着陸船の重さは四・五トン。しかし、実際はその三倍が想定される。なぜここまで異なるかといえば、提案者は船内の空気の重さをまったく考慮していなかった。

これでは却下されて当然だろう。

とはいえ、その数値を正したところで、『月軌道ランデヴー方式』には大きな問題が残る。

「三八万キロ先でランデヴーすることの危険性」、および「それを成すためのコンピューターに対する信頼性」。この不安は解消できない。

「宇宙飛行士の生還確率は一パーセント」と否定した科学委員の考えをあらためる材料はない。

バートがあれこれ考えているうちに月は後ろへ流れ、小さな点になって消える。宇宙船は火星、そして木星を通過していく。

惑星間飛行をしながら、バートは月面着陸のことばかり考える。たしかに、現時点の技術力では、三八万キロ先での作業は困難かもしれない。

いや、困難ではなく、不可能だ。

しかし、カイエが言っていたあの言葉を思い出す。五〇年近く前にロケット理論学者が次世代に託した意志を――

『今日の不可能は、明日は可能になる』

有人軌道飛行も、不可能を超えて達成したのだ。

未来を作るコンピューターの可能性を信じ、再検討すべきではないだろうか。

明日のカンファレンスは議論をするいい機会だ。

だが。

登壇者リストのビッグネームを考えると気が引ける。

所属する有人宇宙船センターの長官と、病弱だった自分に夢を与えてくれたロケット博士。

ふたりの対決は、現在、クラウス博士が優位に立っている。四月に開かれた国家予算の審議会で、ＡＮＳＡ本部の副長官はこう述べた。

「『プロジェクト・ハイペリオン』にとって現状、最良の選択は『地球軌道ランデヴー方式』とする。『直接降下方式』はバックアップとする」

消去法によって導き出された結論だが、ようやく方針が見えてきたところだ。しかしキッシング長官はこの選択を「危険な賭かけ」として認めていない。

この状況で迎えるカンファレンスは「いかに妥協点を探すか」という内容になりそうだが、ようやく落ち着きそうなところへ第三者が横槍を入れれば、また混乱させることになりかねない。

そもそも、提案したところで無視されるのがオチかもしれない。

いや、無視ならまだしも左遷すらありえる。Ｄルームには優秀なＡＣＥ社員が入ったのだから、組織を乱す未熟者は不要になる。

唸うなるバートだが、大切なことを忘れていた。

カイエの考えを聞くのが先だ。パートナーなのだから、自分ひとりが暴走して彼女に迷惑をかけてはならない。

バートは隣にいるカイエに目をやる。

彼女は微動だにせず、星の海を真剣に見つめている。その表情はDルームで業務をしているときの顔つきだ。

今話しかけるのは邪魔になるからやめよう。バートも宇宙旅行に意識を戻す。

宇宙船は土星の輪をくぐり抜け、太陽系の果てへ進む。

地球があまりにも微少な存在に思えてくる。

《―私たちは天の川銀河を越えました。これより大星雲へ向かいます》

出発当初は雑談を交わしていた人々も、もう誰も口を開かない。

ただ、宇宙を漂流する物質になる。

二重星、赤色巨星、白色矮わい星せい。

《―私たちの住む巨大な銀河系。私たちが知る限りでは一〇〇〇億個の星があります。ほかの銀河系を合わせたら、いくつの星があるのでしょう》

超新星爆発。

星が死んで光が生まれる。

完全な闇やみと静寂。

ドクン、ドクンと心臓の音が聞こえる。

《―皆さま、二〇億光年の果てへ到達しました。それではこれより、私たちの惑星ほし、地球へ帰還します》

ナレーションが終わると、劇場のライトがパッと点灯する。観客たちはいっせいに息を吐いた。

《―またのご搭乗をお待ちしています》

「ふぅ……」

宇宙旅行を終えても、バートはまだ身体からだが浮遊している感覚が

残り、頭もぼんやりしている。
　隣ではカイエも顎あごに手を当てて放心している。
　いや、放心というより、脳内で計算して無心になっている雰囲気だ。
「おーい、カイエ」
　呼びかけても反応がないので彼女の肩を叩たたくと、ビクッと身体を揺らした。ようやく宇宙から戻ってきたようだ。
「あっ！　終わったんだ……？」
「魂を二〇億光年の彼方かなたに置いてきた感じ？」
「うん、そんな気分……」
　話していると観客の入れ替えがはじまった。彼女と『月軌道ランデヴー方式』についてゆっくり語る時間はない。
　今晩、カンファレンスの前日チェックをするときにでもじっくり聞いてみよう。
　何より忘れてはならないのは、今は共和国のふたりを案内するホスト役だ。次の目的地へ誘導しなければと、レフとイリナに目を向ける。
「ん……？」
　するとふたりは『ムーン・ジャンプ』を終えたときと同じで、物寂しげな微ほほ笑えみを無言で交わした。
　気になるが、彼らのすぐ傍そばには〔運送屋〕や記者もいるので、わざわざ訊ききに行くのは憚はばかられる。
　話せるチャンスがあれば、事情をそっと訊いてみようとバートは思う。もし連合王国を旅するなかで生まれた悩みならば、できる限り力を貸したい。

『科学の世界』の隣にそびえ立つ『スペースタワー』。見逃す手はないと言われる万博の象徴だ。記念撮影の人気スポットで、ＵＦＯの形を模した展望階には連日二〇〇〇〇人が訪れる。

高速エレベーターに乗ったバートたちは、まるでＵＦＯに誘拐されるように地上一六〇メートルにある展望階へと吸い込まれていく。

円形のガラスで囲まれた展望階はゆっくりと自動回転し、スカイレストランもあり、観光客でごった返していた。

そんな観光客はバートたちを見つけると景色も食事もそっちのけで、ワッといっせいに群がる。

殺到する人々を警備スタッフが止める傍かたわら、イリナが窓の外を見て感嘆の声を上げる。

「きれい！」

大海原は黄金色に染まり、湾に浮かぶ島々は黒真珠のような影となる。

視線を移せば、市街地には煌こう々こうと光が灯り、北方には雪帽子を被かぶった山脈が連なる。世界を包み込む大空は橙だいだい色いろと薄紫色の美しいグラデーションを描く。

そのまま絵葉書にできるほどの幻想的な風景が広がり、イリナはガラス窓にくっついて見入る。

そんな彼女を見てカイエが顔を綻ほころばす。

「あんなによろこんでもらえると、うれしいね」

「宇宙から見る景色とは違うのかな」

バートがふと疑問を口にすると、レフが笑って答える。

「全然違いますよ。宇宙船の覗のぞき窓から見るのと、自分の足で立って見るのとは」

「へぇ……」

宇宙からの景色は想像もつかず、バートはただ相づちを打つ。

レフはイリナの小さな背中に目を向ける。

「それに、彼女はここまで美しい海景をあまり見たことがないから。山奥で生まれ育ったし、ふだん暮らしている場所から海はすごく遠くて。

それに昔は高所恐怖症だったし」
「高所恐怖症……？」
　クエスチョンが浮かんだが―
「去年、凱がい旋せん祝典で言ってましたよね」
　カイエに言われてすぐに思い出した。共和国の首都、サングラードの城塞区画ネグリンにある大広場での演説だ。
　レフは懐かしそうにふふっと笑う。
「イリナって、はじめての降下塔の訓練で腰抜かして……」
　するとイリナがくるりと振り向く。
「レフ、何の話をしているの？」
「べつに。昔話だよ」
　レフはとぼけるが、イリナはムッと頬ほおを膨らませて詰め寄る。
「腰抜かしたって誰が？」
「さぁ……」
　とぼけ続けるレフにイリナはイーッと軽く牙きばを見せて、バートとカイエの方を向く。
「私は腰抜かしてないので」
　認めないと噛かみつかれそうなのでバートは話を合わせる。
「わかりました……」
「でもイリナさん、泣くほどだったのに克服できたんですね？」
　話を流せばいいのに、カイエはわざわざ掘る。
　しかし、泣くほどとはいったい？
　バートは疑問を抱いだくが、イリナの目には動揺の光が広がる。
「な、泣くなんて……それもレフが言ったの？」
「いえ、イリナさんご自身が凱がい旋せん祝典で『私は、高所恐怖症で、泣いてばかりいた』って世界中の皆さんに伝えてましたよ」
　カイエがはっきり言い切ると、イリナは心臓を矢で射抜かれたように

ギョッと目を見開く。
「そ、そんなこと言ってないけど……？」
「私、記憶力がいいんです」とカイエは得意げに人差し指で頭を指してつづける。「イリナさん、こう言ってました。『私は、人間が大嫌いで、ずっと恨んでた。私は、高所恐怖症で、泣いてばかりいた。そんな私を、ここにいるレフが、宇宙──』」
「わあああぁっ！」
　イリナがカイエに飛びついて口を押さえる。
「──もごっ」
「も、もういい。おしまい……」
　カイエがもごもご頷うなずくと、顔を真っ赤にしたイリナは手を外して小さくなる。
　笑いを噛み殺すレフ。バートも笑いそうになるのを堪こらえていると、カイエに微ほほ笑えみかけられる。
「バートも克服したことがあるんだよね」
　唐突に名前を出されてドキッとする。
　カイエはにこにこしてイリナとレフに話す。
「彼、大勢の前で話すのが大の苦手で、『アーナック・ワン』のはじめての挨あい拶さつで『ディールームって何の略？』ってアーロンさんに訊きかれたとき……」
「ちょ！　待って！」
　焦って遮さえぎるバート。地獄の光景が脳裏をよぎる。何より、カイエの記憶力がおそろしすぎる。
「それ、今言わなくてもよくない？」
　バートが諭すとカイエは首をひねる。
「でもカンファレンスの前に伝えておいた方がいいかと思って。あなたが急に硬直してしゃべらなくなっちゃったら、変に思われそうだから」

　くすくすと笑うカイエから嫌なプレッシャーを与えられる。
「たしかに、場合によっては、そうなるかもしれないけど……」
　背中にじわりと汗がにじむ。もしも『月軌道ランデヴー』を提案したら針のむしろになるだろうか。
　話のつづきをしたがっているカイエを止めるため、バートは反撃に出る。
「……でも、それを言ったら、君だって克服すべきことがある」
「私が……？」
「頭のなかで急に計算をはじめて、何度も階段を踏み外したり転んだりしてるじゃないか。カンファレンスの議論に熱中して、うっかりステージから落っこちたら……」
「うぅ……」
　カイエは転落する自分を想像したのか、両手で自分を抱きしめて身悶もだえる。
　すると黙っていたイリナが意地悪な視線をレフに投げる。
「それならレフなんて、熱く語りすぎて雪が解けちゃうかもしれないわ。だって彼は宇宙熱がすごすぎて『雪解け――」
「最近は言われてないから！」
　レフが慌てて口を挟むが、イリナは無視して続ける。
「『雪解けのレフ』っていう異名があるから」
「雪解け……？」
　首をひねるバートにレフはとぼけて返す。
「昔の話です」
「どんなふうに熱く語るんですか？」
　またカイエが掘り下げて、レフは頭を掻かく。
「えーっと、宇宙を……いえ、明日のカンファレンスに取っておきましょう」

と、そのとき。

展望階の反対側で異様なざわめきが起きた。それは悲鳴にも近い声で、傍そばに控えている〔運送屋〕の目つきがキッと鋭くなる。バートは不安を感じ、カイエも身構える。

怒ど涛とうの如ごとくざわめきが押し寄せてくる。

「□□ＵＦＯだ！」

「は？」

虚を衝つかれるバート。

周囲にいた観光客は「ＵＦＯ!?」と猛烈に反応。ひと目見ようと皆いっせいに駆け出す。押し合いへし合い、展望階が傾くのではないかという勢いだ。

呆あつ気けに取られたレフがつぶやく。

「すごいな―」

「どこ!?」

カイエが叫んだ。

「見たいっ！」

続いてイリナも声を上げ、ふたりはＵＦＯを求めて走り出した。記者やカメラマンはスクープを取りに急ぎ、警備スタッフはガードのために追う。

呆あきれているのはジェニファーと〔運送屋〕の女性だ。ふたりは気だるげな視線を交わし、互いに咳せき払ばらいをする。

気づけば、バートとレフの周りにいた人たちは皆ＵＦＯにさらわれてしまった。

やれやれ。

群衆に紛れて消えていくカイエを見ながら、バートは肩をすくめる。

「カイエは宇宙人を怖がっているんですけど、未知への好奇心が勝つみたいで……」

「うちのイリナは怖いもの知らずで、ＵＦＯに乗りたいと言ってました」
「どっちもどっちですね」
「まったく」
　あははと笑うふたり。
　それにしても、イリナに関しては、バートが抱いだいていた高貴なイメージはすっかり吹き飛んだ。
「イリナさん、テレビで見るよりもずっと無む邪じや気きな感じです。まだ一八歳でしたよね？　年相応と言いますか」
　レフは感慨深げに頷うなずく。
「世界中を回っていると疲労も溜たまりますが、彼女のお陰で気が休まることも多いです。正直なところ、俺ひとりだったら今の状況に耐えられたかどうかわかりません。そうだな……共和国の蒸留酒は『人生ジーズニ』という意味を持つんですが、酒が人生の伴はん侶りよになっていたでしょうね」
　酒を飲む仕草をしてレフは苦笑いする。
「だから彼女には感謝してます」
　完璧だと思っていたレフもバートと同じような悩みを抱かかえていた。世界的な英雄と比べるのはおこがましいが、共感を抱いだく。
「僕も、カイエがいるから、広報と業務を両立できています。彼女には本当に何度も助けられました」
「ええ。カイエさんも素敵な女性だ。軌道飛行の成功は彼女あってこそだと、大陸横断中によく耳にしました」
　カイエが褒ほめられるとなんだか誇らしくて、そして照れくさい。
　しかし、穏やかで柔らかなレフと話していると、アトラクションのときに見せていた寂しげな表情がどうしても気になる。
　今ならば周りに人も少ない。

　バートは思いきって訊たずねてみる。
「あの……この旅行中に、何かあったんですか？」
「はい？」
　唐突に問われたレフは首をひねる。
「どこの街でも歓迎していただいて、楽しいことばかりですが……」
「あっ、いえ……！」
　あまりにも言葉足らずだったかもしれない。
　バートは急いで言葉を付け足す。
「『ムーン・ジャンプ』や『スペース・フライヤー』が終わったあと、イリナさんとしんみりした雰囲気だったので、どこかで嫌な目に遭ったのかと思いまして」
　するとレフは困惑しきった面持ちになる。バートはよけいなことを言ったのかもしれないと後悔しつつフォローする。
「その、この国には新血種族や宇宙開発を嫌う人たちもいるから、気分を害する野次とかあったのかと……」
「俺とイリナ……そんな顔をしてました？」
「え、いえ、僕が勘違いしただけかもしれません……すみません」
「違うんです。ええと……」
　レフは言うか言うまいか迷うように視線を外すと、夜空を見上げ、ひとつ息を吐く。
「今度はいつ宇宙を飛べるだろうと考えると、胸がきゅっとなるんです」
「あ……」
　レフは再度バートを見る。微ほほ笑えみを浮かべているが、その藍あい色いろの瞳ひとみは儚はかなげに揺れる。
「祖国には優秀な訓練生がたくさんいます。みんなの夢の場所を独り占めしちゃいけないですから」

その言葉と表情で、事情は理解できた。

きっと兄のアーロンが置かれている立場と同じなのだ。

連合王国初の宇宙飛行士であるアーロンは啓けい蒙もう活動や訓練指導などの業務が主になり、宇宙からは離れている。上層部の視点で見れば、英雄となった人間をもう一回宇宙へ行かせることにメリットはない。事故の危険もある上に、べつの英雄を増やす方がいいに決まっている。実際、連合王国では『七人の飛行士ヘルメスセブン』以外にも新たに九名を選び、訓練を重ねている。

共和国に訓練生が何人いるのか明かされていないので詳細は不明だが、おそらく同じだろうとバートは思う。だから、レフやイリナにとって、『ムーン・ジャンプ』や『スペース・フライヤー』はたんなるアトラクションではない。いつ叶うかわからない、もしくは叶わないかもしれない夢を体験していたのだ。

そう考えると、イリナは。

彼女が演説で叫んだ願いは。

──レフと月に行く！

吸血鬼の少女の夢は、どうなるのだろうか。

バートが目を伏せて思い悩んでいると、レフにそっと声をかけられる。

「今の話は忘れてください」

「え？」

レフは後頭部を掻かきながら、ちらりと横を気にした。見ると、〔運送屋〕の女性が諫いさめるような視線を送っている。

共和国的には禁止されている話だったのか。本音を語ってくれたことが嬉しい反面、彼の気持ちを考えると切ない。

すると、レフはにこっと温かく微ほほ笑えんだ。

「バートさん。せっかくの機会なので楽しみましょう！」

気遣われてしまった。バートは申し訳なさを飲み込んで返事をする。
「はい、そうですね。気にしてすみません」
しかし、この話題を終える前に、ひとつだけ伝えたい。バートはレフに近づき、小声で言う。
「兄のアーロンも、レフさんと同じ気持ちだと思います」
それだけで意味がわかったのだろう。レフは目を細める。
「ありがとう。ところで、やっぱり、君たちは兄弟で似ていると思うな」
「そ、そうですか……？」
「うん。秘めたものがね」
そう言ってレフは自分の胸をとんとんと叩たたいた。
バートは胸元に手を置き、兄を思い出す。昔も今も兄の口から愚ぐ痴ちや弱音を聞いたことはないが、宇宙から離れてしまった切なさを抱いだいているのだろうか。今度会ったとき、それとなく訊きいてみようと思う。力になれなくても、話し相手くらいにはなりたい。
展望階の向こうから、ざわざわと群衆の声や足音が響いてくる。ＵＦＯ観測から帰ってきたようだ。皆が落胆の顔つきで、カイエとイリナも無念さをにじませている。ＵＦＯは見つからなかったらしい。
レフがシッと人差し指を口に当て、片目をつむる。
「俺がまた『似てる』なんて言ったの、彼女たちにはないしょだ」

　その仕草は親しい友人に見せるような感じで、共和国の宇宙飛行士としてではなく、レフ・レプス一個人として話してくれたのだろう。とはいえバートはすぐに言葉を崩せる性格ではなく、「秘密にします」とまじめに返してしまう。
　そこへつまらなそうな顔のカイエとイリナが戻ってきた。
　レフが冗談めかしてイリナに訊たずねる。
「宇宙人は捕まえられた？」
「何を馬鹿なこと言ってるの？」
　イリナはつんとする。
「私はカイエさんについていっただけよ」
　押しつけられたカイエはきょとんとなる。
「え？　イリナさん、あんなに身を乗り出していたのに？」
「っ……」
「人混みをかいくぐるから、髪もぐちゃぐちゃだし」
「なっ……!?」
　イリナは髪をさっと払って、すぐに突っ込み返す。
「け、けど、カイエさんこそ怖がって私の手をギュッと握ったじゃない！」
「あ……！」
　イリナが再現するようにカイエの手を握る。
「こうやって『出たッ！』って！」
「そ、そんなに強く握ってない！」
　カイエはわたわたと振り払う。
　そしてイリナはうんざりと腰に手を当てる。
「そもそも、ガラスに映り込んだ照明をＵＦＯと勘違いする人間の目が節穴なのよ」
「本当にそう。世の中の未確認飛行物体の大半が錯覚だから」

いつの間にかふたりは敬語ではなくなっている。
「私たちは悪くないの。ねえカイエさん」
「ええ、イリナさん」
共感し合ったらしきふたりは男性陣に忠告する。
「レフ、わかった？」
「はいはい」
「バートもいい？」
「なんでもいいよ……」
人騒がせなＵＦＯも、ふたりの仲を深めるのには一役買ったようだ。

こうして万博見学は終わった。
だが、これからが本日のメインイベント。
サンダンシア女王を交えての夕食会だ。

二〇世紀初頭の開業以来、最高評価を受け続けている五ツ星ホテル。
巨大なシャンデリアに照らされたロビーは重厚感のあるソファや美しい調度品で彩られ、誇り高き従業員が客を出迎える。
夕食会が開かれるレストランも超一流のシェフを擁した最高級店であり、ドレスコードは当然厳しい。
バートとカイエは正装に着替えてサンダンシアの到着を待つ。
フォーマルなスーツに着られたバートは生なま唾つばを呑のみ込む。
「こういう場所は、何度経験しても慣れないな……」
「私も……」
いつもは平然としているカイエも、女王の同席する今夜ばかりはさすがに表情が硬い。それでも、麗しい月げつ白ぱく色いろのドレスを纏まとい、月下美人の形をした髪飾りを付けた彼女はこのホテルにふさわし

い気品がある。
　ふたりの緊張をジェニファーが感じ取る。
「あなたたち、女王陛下の前で粗相しないようにね」
「はい……」
　ロビーを見回すと、万博の関係者が数多くいる。ピアノの生演奏を楽しめるバーラウンジではカンファレンスの出席者である科学者や政治家がくつろいで雑談している。
　壮麗な空間に似つかわしくないのは、カメラを構えるマスコミだ。女王と共和国の英雄たち二人の初対面を撮ろうと集まってきたのだ。
　レフとイリナはロビーの中央で写真を撮られている。漆しつ黒こくのシックなドレスに着替えたイリナは首飾りをかけており、彼女の胸元で青い宝石が輝いている。
　カイエはその宝石を「あとで見せてもらいたいな」と気にしている。これまでテレビの画面越しに見ただけだが、亡くなった母が持っていた指輪と同じ輝きなのだという。
「―女王陛下だ」
　マスコミがざわめく。
　王室秘書官を従えて、サンダンシアがロビーへ入ってきた。黄色のエレガントなドレスに身を包んだ彼女はそこにいるだけで場を明るくする。
　慌てて姿勢を正すバートとカイエ。ラウンジで座っていた者たちもいっせいに立つ。
　サンダンシアはゆっくりとレフとイリナの前に進み、マスコミがフラッシュを浴びせるなか対面を果たす。
　うやうやしくお辞儀をするレフとイリナ。
　サンダンシアは軽く頭を下げ、柔らかく微ほほ笑えむ。
「はじめまして。サンダンシア・ソフィ・アリシアです」

そう言ってレフに手を差し出すと、レフはその手を取り、握手をする。
「ツィルニトラ共和国連邦、宇宙飛行士レフ・レプスです。女王陛下にお目にかかれて光栄です」
つづいてサンダンシアはイリナに手を差し伸べる。
イリナはその手を取り、短く挨あい拶さつをする。
「リリット共和国宇宙飛行士イリナ・ルミネスクです」
連合王国の君主と並んでも遜色ない、高貴な風姿のイリナ。
だが、雰囲気は真逆だ。
サンダンシアが温かな太陽ならば、彼女は孤高の月。
そんな正反対の印象をバートは受けた。
サンダンシアをまっすぐに見据えるイリナの瞳ひとみからは、人間の権力者には媚こびないという強い意志を感じる。それを受ける女王もただ無言のまま見つめ返している。同じ一八歳だが種族も生い立ちも異なるふたりのあいだには、歴史そのものが横たわっているようだ。
報道用の撮影が終わると、次はバートとカイエが挨あい拶さつをする番だ。
サンダンシアに声をかけられる。
「お久しぶりです。昨秋の記念式典以来ですね」
前回はガチガチだったバートだが、二度目ということもあり、多少、心に余裕がある。
「覚えていてくださり、光栄です」
握手をするときの手も震えない。
それはカイエも同じらしく、自然な笑みを浮かべている。
こうして失敗もなく対面の儀を終えた面々はレストランへ移動する。

ふだんは結婚式が行われる広めの特別個室で夕食会はひらかれる。美

麗な彫刻が施された壁に囲まれ、音量を絞ったクラシックのＢＧＭがゆったりと流れる。
　円卓がいくつもあり、そのひとつにバート、カイエ、レフ、イリナ、そしてサンダンシアが着席する。
　あとは連合王国、共和国、王室の関係者に分かれて座る。
　公式記者以外のマスコミはいなくなり、ようやく場が静まった。
　しかし席に案内されたバートは冷や汗。目の前には見たことがないほど大量のナイフやフォーク、スプーンが並んでいる。
　ちゃんと使えるだろうか。
　不安に襲われ、隣のカイエを見ると、目が合った。
　彼女の瞳は助けを求めるように揺れる。
　ダメか……。
　バートは小声でひそひそとカイエに言う。
「自信がないときは、ほかの人のマネを……」
「うん、間違えないように……」
　夕食会は二時間で設定されている。無難に乗り切ることだけを考えよう。
　給仕がやってきて食前酒について訊たずねると、サンダンシアが皆に銘柄の説明をする。
「今日は特別なスパークリングワインを用意してもらっています」
　王室御用達の超高級品らしい。バートはアルコールは得意ではないが、飲まない手はない。カイエもスパークリングワインにする。
　するとレフとイリナが飲む飲まないで何やら言い合っていた。
「レフ、私一八歳になったけど」
「君はダメだ」
「すぱーくりんぐって炭酸の仲間でしょ？　しゅわしゅわ美お味いしそう……」

「迷惑をかけるからダメだって」
「むー……」
　カイエが訊たずねる。
「迷惑ってどうしてですか？」
　話を聞くと、イリナの出身地では飲酒は二〇歳からだが、連合王国は一八歳から飲める。だから飲みたいとイリナは主張するが、レフは許可をしない。
「彼女はアルコールが入ると、まずいことになるんです。とくにこのような公式の場では、ちょっと……」
　言われたイリナは反論せず、つまらなそうにテーブルクロスの端を指でつまむ。
　悪酔いして暴れたり泣いたりするのだろうか。
　いじけているイリナをレフが説得する。
「今日はノンアルコールにしなよ。炭酸飲料はいろいろあるだろうから」
「……しょうがないわね」
　サンダンシアが不思議そうに問う。
「炭酸飲料がお好きなんですか？」
「ええ、回る先々で飲み比べをいたしましてね。ざっと一〇〇種類は飲んだわ」
　中途半端な丁寧語で返すイリナ。その態度に、人間の女王に対して対等でいようとする意思をバートは感じる。
　しかし炭酸が好物とは意外だ。サンダンシアも信じられないという顔つきで「一〇〇種類ですか？」と訊ねる。
　イリナは顎あごに手を当てて、評論家のような口ぶりで話す。
「この国の商品は比較的炭酸が強いものが多い印象ね。ただ、着色されたものが多く、香りも人工的で好きになれないわ。まあ、すっきりはす

るかしら」
　カイエが身を乗り出して訊ねる。
「全世界で飲んだなかで、一番おいしかったものは？」
「共和国の炭酸レモネード」
　即答だった。
　あまりにもふつうだが、偉大な祖国のアピールということかもしれない。
　──と思ったが、レフが何やらニヤニヤしている。
　ひょっとして思い入れでもあるのだろうか。気になったバートは訊たずねてみる。
「レフさん、どうしました？」
「あ、いえ、なんでもないです。訓練センター近くのジャズバーで飲める炭酸レモネードがおいしいんです。機密情報につき、皆さんを招待するのは難しいですが」
　レフとイリナは軽く視線を交わしただけで、それ以上語らない。
　結局、イリナはスパークリングワインをあきらめ、しぶしぶアップルソーダを選んだ。
　するとサンダンシアがおもむろに提案をする。
「皆さん、乾杯はアップルソーダにしませんか？　お酒はあとでも飲めますから」
　気遣われて気まずそうなイリナだが、女王の提案に反対する者はいない。
　こうして、アップルソーダでの乾杯となった。
　グラスを手に、まずレフが招待のお礼を簡単に述べる。
「本日はこのような素敵な夕食会にお声がけいただき、ありがとうございます」
　それを受けてサンダンシアが乾杯の音頭をとる。

「ここに杯を上げて、両国のさらなる発展と親交を願います」
　関係者たちが声をそろえる。
「乾杯！」
　豪勢な夕食会がはじまる。
　アップルソーダを飲み干すと、各々好きなドリンクを注文する。
　料理は地元で採れた海産物が中心。前菜のクラブケーキはカニの身がぎっしり。新鮮な牡か蠣きやサーモンフィレ、ミル貝の数々。
　淡い薔ば薇ら色いろのスパークリングワインは見た目も味も上品で美しい。
　しかしバートはテーブルマナーを守るのに精いっぱい。極上の食材をゆっくりと味わえない。周りを見ればカイエもぎこちなく、不器用な彼女はまるでノコギリとドライバーを使うようにナイフとフォークを扱っている。
　サンダンシアの作法が優美なのは当然として、レフとイリナも馴れた手つきだ。ただ、おかしいのは、イリナがひとつひとつ香りをじっくり堪能していることだ。吸血鬼に味覚がないのはバートも知っているが、食事は嗅覚で楽しむのだろうか。
「すごくいい香り……すっごく……」
「ダメだぞ」
　イリナがレフのスパークリングワインにぐぐっと引き寄せられると、レフがグラスをすっと遠ざける。
「食事は香りだけを楽しむのですか？」
　プイッと顔を背そむけるイリナにサンダンシアが疑問をぶつける。
「あとは食感かしら。この貝は噛かみごたえがあっていいわ」
　するとイリナはカイエに話を振る。
「あなたはどうなの？　新血種族は味覚があるんでしょ？」
　問われたカイエはこくんと頷うなずく。

「でも、人間用の味付けでは少し物足りないかしら。ケチャップと、あとは辛からいものが好きで……それで昼間失敗したけど。ワサビっていう香辛料が……」
　彼女の目にじわりと涙がにじむ。
「思い出すだけで鼻がツンとなる……」
　映像記憶の能力は、強烈な瞬間を勝手に覚えてしまうと彼女は言っていた。きっとワサビは生涯忘れられないだろう。
　スパークリングワインを飲んで少し頬ほおを赤らめたサンダンシアは共和国のふたりに訊たずねる。
「おふたりも『宇宙蛍』は見えたのですか？　スティーヴ飛行士が見た謎なぞの光です」
　レフが残念そうに首を横に振る。
「私もイリナも見ていません」
「そうですか……。いったいなんなのでしょうね？　ＵＦＯの一種かしら？　ついさっきも万博で騒動があったみたいですけど」
　当事者のバートたちはそろって苦笑いを浮かべる。
　サンダンシアは宇宙に興味津々のようで、食べる手を止めて話を続ける。
「そういった謎をひとつひとつ解き明かしながら、月へ向かうんですね。イリナさんは凱がい旋せん祝典で、レフさんと月へ行くとおっしゃってましたよね。よく覚えてます」
「え、はい……」
　イリナは目を伏せ、元気なくアップルソーダを飲む。これ以上は答える気がないというように口を閉ざす。月へ行く予定などないのだから、触れられたくないのだろう。
　だがサンダンシアは事情をまったく理解していない様子で問いかける。

「先日のインタビューで、『共和国は一九六七年を目指す』と聞きましたが……」
　しょんぼりしているイリナに代わって、レフが会話を引き取る。
「月までは長い道のりです。万博で観た『スペース・フライヤー』みたいに、数十秒で着けたらすばらしいのですが。ところで陛下はあの映画はご覧になりましたか？」
「いえ、まだです。パビリオンは明後日に視察をする予定です」
　しばらく無言で話を聞いていたカイエは「あっ」と漏らし、バートに小声で訊ねる。
「もしかして、お兄さんと同じ状況？」
「らしいよ……」
「そっか……」
　宙そらから離れてしまったふたりを憂うれうように、カイエは息を漏らす。
　しかし、宇宙の話題に触れにくい。その理由はレフとイリナの件だけではない。共和国の宇宙開発に触れた瞬間、別のテーブルにいる〔運送屋〕が鋭い視線を送ってくるのだ。
　こうして、しだいに会話は少なくなり、カチャカチャと食器の音だけが響く。
　周りのテーブルでは、連合王国政府の職員が電話で呼び出されてバタバタと中座したが、雑談に花が咲いている。一方、夕食会の主役たちが集まるテーブルは静かで、時が凍ったようだ。
　何を話せばいいのやら。柔らかなマグロのステーキを食べながらバートが考えていると、カイエがおずおずと切り出す。
「イリナさん。その首飾りの宝石ですけど……」
　イリナの胸もとで輝く青い宝石に、テーブルの皆が目を向ける。
　宝石をそっと触るイリナ。

「これが、どうかしたの？」
　皆の視線から宝石を守るように手を置くイリナに、カイエは優しい声で言う。
「私のお母さんがすごく似た宝石を持っていたの。それは、もうなくなってしまったんだけど……」
「お母さん……」
　イリナの表情がふっと曇る。おそらく、カイエの母―リベルテ・スカーレットが人間に殺された事件を知っているのだろう。
　カイエ本人は公おおやけに発言していないが、活動家が差別撤廃運動のネタとして大々的に使っていた。それに対して彼女は複雑そうに「騒がれるのは嫌だけど、みんなが事件を知ってくれて、もし盗られた宝石も見つかれば最高ね」とバートに話した。
　カイエはそんな哀かなしみを表に出さず、朗らかに頼む。
「もしよければ、見せてもらえると、うれしいな」
　一瞬考えたイリナだが。
「いいわよ」
　すっと首飾りを外し、隣のレフに「彼女に回して」と渡す。やや意外そうな顔つきで受け取ったレフは、カイエに首飾りを差し出す。
　カイエは大切な宝物を扱うように受け取り、手のひらに載せた。
　透きとおる青い宝石はシャンデリアの光を浴びて神秘的に煌きらめく。
　宝石の輝きがカイエの瞳ひとみに映る。
「お母さんのと同じ光……」
　瞳が濡ぬれて、声が揺れる。亡き母を思い出しているのだろう。
　サンダンシアは宝石を覗のぞき込みはしないが、関心はある様子で、スパークリングワインを飲みながら遠目に眺めていた。
　黙って宝石を見つめつづけるカイエに、イリナが声をかける。

「ルミネスク家に代々伝わる月の石、ルーンヌィ・カーミェニ」
　カイエは顔を上げ、イリナに目を向ける。
「不思議ね……私たちは遠く離れているのに」
「ええ……」
　時と場所を越えた絆きずなをたぐるように、ふたりは視線を交わす。
　見つめ合う朱あかと朱の瞳ひとみ。
　そこには人間にはわかり得ない、立ち入ることを許されない血脈があるのだろう。
　しばらくのあいだテーブルの上には沈黙が落ちていたが、給仕が料理を運んでくると時が動き出す。
　カイエが取り繕って笑い、首飾りを返す。

「ごめんなさい、しんみりしちゃって。何の話をしましょうか？」
　とはいえ、宇宙開発に関する会話はしにくい。
　するとレフが思い出したように、サンダンシアに訊たずねる。
「ククーシュカの調子はどうですか？」
「とても元気ですよ。最初はひとりぼっちで寂しそうでしたけど、今ではすっかり『ロイヤルドッグ・ルーム』の一員です」
「それはよかった。なあ、イリナ」
「ええ」
　首飾りを付け直したイリナは笑みをこぼす。その表情はまるで飼い主か育ての親のようで、サンダンシアが訊たずねる。
「ククーシュカはイリナさんと関係あるのですか？」
「全然関係ないけど、そういう犬がいるって知ったときから気になってたの。元気ならいいわ」
　それだけ言うとイリナは話を切り上げ、メインディッシュを食べはじめた。

　その後はとくに深い話はせず、サンダンシアの希望でコンピューターの話をしたり、レフとイリナの連合王国旅行記を聞いたり、当たり障さわりのない会話をして親交を深め、夕食会は幕を閉じた。

　長かった一日の業務が終了した。
　疲れ切ったバートとカイエは静かな場所でひと息吐つきたくて、ホテルの中庭に出る。
　さわやかな春の夜風が心地いいが、ふたりのほかには誰もいない。歩道灯に照らされた石畳を歩き、ライトアップされた噴水の近くにあるベンチに向かう。

「今日はサインもらうの難しそうね……」
　カイエは肩を落とす。夕食会後、レフとイリナに著書へのサインをねだるつもりだったが、彼らは科学者や政治家に捕まってロビーで質問攻めにあっている。
　質問者の行列が途絶えるのを待っていてもよかったのだが、ロビーには政府やＡＮＳＡの職員がうろうろしていて落ち着かないので外に出てきた。
「サインは、まだ明日チャンスがあるからさ」
「ええ……でも『打倒共和国』って、いったい何なのかしら。ふたりの話を科学者が聞きたいのはわかるけど、政府の人たちもふつうに握手してるし」
「最初に言い出したのは誰って思うよね……」
「もしかして共和国が大嫌いなデイモン部門長が―きゃっ」
　熱く語っていたカイエが石畳のわずかな段差にひっかかった。転びはしないが、足がふらついている。
「大丈夫？　かなり飲んだでしょ」
「おいしくて、ついつい……」
　ついついで、スパークリングワインをグラス六杯とは。
　照れて舌をペロッと出す彼女の頬ほおは、ほんのり桃色に染まっている。
　酒の苦手なバートは一杯にとどめたが、それでもほろ酔いになるほどアルコール度数は高い。
　それを六杯だ。
「君はお酒強いよね」
「親譲りかなぁ。お父さん、毎晩密造酒ムーンシャインをぐびぐび飲んでるし……」
　スキンヘッドのいかつい新血種族がバートの脳裏をよぎる。広報業務

のイベント会場にときどき姿を現すが、いつも怖い顔でバートをにらんでいる。
「宇宙開発は、相変わらず嫌ってるの？」
　カイエはわざとらしく眉み間けんにシワを寄せて口まねをする。
「宇宙蛍なんて食えないだろう」
　歩み寄る姿勢すらないらしい。
「……でも、内心では応援してるんでしょ」
「あー……どうかな。応援は……あぁ……」
　急にカイエは言葉を濁した。
「ん？　どうしたの？」
「ううん……」
　バートから視線を逸そらした彼女は、ほろ酔いでは説明できないほど頬ほおを染めている。
「顔が赤いけど」
「え、え？　酔ってるからだと思うよ……」
　両手を頬に当てて顔を隠すカイエ。誤ご魔ま化かそうとしているのが丸わかりだ。
「僕と万博に来ることを認めないって言われたとか……？」
「なっ、違うよ!?」
　ビンゴだ。
　まあ、わからなくもない。目の敵にしている人間と愛娘がいっしょに万博を回るなど、彼からしたら許されざる行為だろう。
「でも業務だし……べつに愛の逃避行ってわけでもないのに」
「っ！」
　カイエが目を見開いた。
「……逃避行がどうかした？」
「この話は終わりっ！」

　あわあわと遮さえぎるカイエ。
「あ、うん……いいけど」
　家庭の事情に深入りする気はないが、不仲というわけではなさそうだ。
「でも逃避行とか勘違いされてたら僕が平手打ちされそうだし、そこだけは頼むよ……」
「そんな勘違いないから！　もうおしまい！」
　などとくだらない雑談をしながら、ベンチに並んで腰掛ける。
　と、そのとき。
　ドンッ──
　重い爆発音がいきなり響いた。
「あっ、あれ！」
　カイエが指した夜空を見ると、色とりどりの花火が打ち上がり、スペースタワーを明るく照らす。万博の閉園を告げる短いショーだ。
　バートは一日を思い返す。
「いろんな展示物があって楽しかったけど、もっとじっくり見たかったなぁ……」
　明日の予定はカンファレンスのみで、終わったらすぐに帰らなければならない。
「休みを取って、今度はプライベートで来たいな」
　バートが言うと、カイエがうんうんと頷うなずく。
「私もそう思うわ」
　じゃあカイエもいっしょに来たら──なんて。逃避行してみる？　とか冗談っぽく訊きいてみようか迷うが、断られたら痛々しいので、ぼんやりと花火を眺める。
　するとカイエがチラッとバートの顔をのぞき込む。
「ねえ、バートはプライベートだったら……」

「ん？」
「『大人のエンターテインメントの世界』に行ってみたい？」
「へ？」
　ジェニファーにからかわれた一件を蒸し返された。
「だから、僕は行きたいなんてひとことも言ってないよ」
　きっぱりと答える。
　するとカイエは納得いかない顔で。
「言ってないのはわかったけど、言ってないだけで、内心では行きたいのかなって訊いてるんだよ？」
「っ……？」
　心を見透かされている。
「えーっ……と……」
　バートがメガネを直しながら必死に言い訳を考えていると、まだ顔の火ほ照てっているカイエは人差し指を立てて、首を左右に振る。
「違うの。べつに行きたい気持ちを非難するつもりはなくて……追及されたのを必死で否定してたから、気になっただけ」
「必死だった？」
「うん。かなり。今も必死だよね？」
　あははと笑って誤ご魔ま化かす。
「ほら、花火がきれいだよ……」
　しかしカイエは花火には目もくれず、バートの横顔をじーっと見つめる。
「行きたい？」
「そんなこと……」
　彼女を直視できない。うやむやにしようとするが、カイエはバートの二の腕を肘ひじでつんつんしてくる。酔っているのか、いつも以上につっこんでくる。

「今から行ったら？　走ればまだ間に合うよ。ほら、花火が終わる前に」
　やられっぱなしも癪しやくなので、反撃を試みる。
「だったら君こそ、『煩悩まみれ』って言われたとき必死だったよ」
　余裕綽しやく々しやくだったカイエがアッと表情を一変させる。
「ひ、ひっしなんかじゃ、ないし……！」
「逃避行にも反応してたし、よからぬ妄想をしてるんじゃ……？」
「それはバートでしょ!?　セイザで私の上に倒れてきたとき、すっごいニヤニヤしてた！」
「なっ!?」
　ついカイエの胸を見てしまい、ジトッとした視線を向けられる。
「ほら。それに『ムーン・ジャンプ』のときも、私のスカートじろじろ見てた」
　追い込まれ、背水の陣で抵抗するバート。
「ぼ、僕は宇宙の妄想しかしない」
　最低の言い訳に対して、カイエは不満げに頬ほおを膨らませる。
「嘘うそよ！　素直に白状しなさい。妄想したって」
「……え？」
　もし肯定すると、カイエが妄想の対象ということになるのだが。たしかに、ピンキー・ブラッドのときも彼女に噛かまれる妄想をしてみたけれど、それを素直に言ったら引かれるのではないか。
「えーっと……それは……」
　答えられずにバートが口ごもっていると──
「あっ！」
　いきなりカイエは声を上げ、ハッと口をつぐんだ。そして、スカートの裾すそを握ると、顔がみるみるうちに真っ赤になる。自分の問いかけの意味に気づいたのだろう。

「……」
　売り言葉に買い言葉の末に、ひどい状況に落ちた。
　花火の破裂音だけが響く。
「……この話、やめよっか……？」
　バートが提案すると、カイエもこくりと頷うなずく。
　痛み分けとなった。
　微妙な空気になってしまったので、バートは咳せき払ばらいし、話題を変える。
「カンファレンスの話をしない？　ひとつ確認したい件があって……」
「ええ……」
　ふたりは同時にひと息吐つき、仕事時のまじめな顔になる。
　そしてバートはさっそく、『スペース・フライヤー』で宇宙旅行をしたときに考えたことをカイエに伝える。
「月面着陸の方法だけど、僕は『月軌道ランデヴー方式』を再検討すべきだと思う。だから、明日提案してみるのはどうかなって……」
「バート……!?」
　目を丸くするカイエにバートは切々と語る。
「カンファレンスの資料には載っていないし、議論にも上がらないと思う。でも、この方式こそ、最良の手段に思えるんだ。却下されてる理由は、三八万キロも先にある月の向こう側でランデヴーとドッキングを成功させるのが困難だから」
「達成のためには技術力が足りず、コンピューターも信頼性に欠ける。これが、みんなの共通認識よね？」
　カイエの冷静な指摘にバートは深く頷うなずく。
「そのとおり。でも、コンピューターは劇的に進化してる。月の向こう側で複雑なオペレーションを行うことだって、数年後には正確にできるようになっているかもしれない。だって――」

「今日の不可能は、明日は可能になる……かな？」
「うん、それ……」
　先に言われてバートが当惑すると、カイエは笑いをこらえきれない様子でしゃべる。
「じつは、私もあの映画を観ながらずっと考えてたの。『月軌道ランデヴー方式』を」
「カイエも!?」
　びっくりして大きな声を出してしまった。
　カイエは一笑して言う。
「宇宙旅行が終わったあとに放心してたのはね、二〇億光年の彼方かなたに魂を置いてきたからじゃないの。私はずっと月にいた」
「月に……」
「そう。降り立つ姿を想像してた。それは、今日は不可能なこと。でもね、二一世紀の未来を体験すると、なんでもできる気がしたの。『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』に書かれていた空想科学の世界だって、空想じゃなくなって、きっと現実になるんだって」
　と、カイエは言い終えるや否いなや、いきなりバートの腕をグイッと掴つかんで立ち上がる。
「な、なに？」
「ブルーエンジェル号の航路を、月へ設定します」
「え？」
　戸惑うバートを横目に、カイエはライトアップされた噴水を指さす。
「当機はまもなく離陸いたします。フライトの準備はいいですか？」
　そう言ってカイエは悪戯いたずらっぽくウインクする。
「あ……」
　宇宙旅行のアナウンスを真ま似ねているのだとわかった。
　ふだんの彼女ならこんなことはしない。

二一世紀の世界と、星が煌きらめくようなスパークリングワインが彼女に魔法をかけたのだ。
その魔法はバートにも伝でん播ぱする。
ライトアップされた噴水は黄金色の月。歩道の足元灯フツトライトは滑走路。
二一世紀の宇宙船にバートも搭乗する。
「僕を月へ連れて行ってくれる？」
「『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』。月軌道ランデヴー方式で着陸しましょう。さあ、出発のカウントダウンです」
一〇、九、八、七、六、五、四、三、二、一──
リフトオフ。
足をふらつかせるカイエに軽く手を掴つかまれて、バートは黄金の月へ導かれる。
「こちらブルーエンジェル。本機は第二宇宙速度を超え、大気圏を突破し、順調に航行中」
カイエが通信を入れる。
引き寄せられたバートは隣にいるが、管制室からの通信を代弁する。
「ブルーエンジェル、こちらライカ・クレセント。宇宙蛍は見えるか？」
「こちらブルーエンジェル。超新星爆発ならいくつも見えます」
色とりどりの鮮やかな光がドン、ドンと弾はじけ、黄金の月を彩る。
「了解。ＵＦＯの襲来に気をつけろ」
カイエはクスッと笑う。
「了解。バタークッキーを強奪されないように気をつけます」
黄金の月が近づく。
「当機はこれより月軌道に入ります」
ゆっくりと月の周回を開始。

　しばらくして。
「それでは、着陸船を切り離します」
　カイエは腕組みを解き、ライトアップされた噴水へ向けてバートをすっと押す。
「切り離し完了」
　カイエから離れたバートは黄金の月の端にすとんと着陸を果たす。
「着陸成功」
　光り輝く月の表面はざらざらで、そしてひんやりとしている。
　カイエはそのまま月の軌道を回っていく。煌きらめく水霧の向こうで時折くるりと回転し、楽しげな笑顔を見せる。そして、月軌道を一周して戻ってくる彼女から通信が入る。
「こちらブルーエンジェル。着陸船の再打ち上げをお願いします」
「了解」
　バートは月を離れ、近づいてくるカイエに並走する。
「ランデヴーは成功」
　カイエがバートに手を伸ばす。
「あとはドッキングを」
　バートがその手を取ろうとすると、
「こちらブルーエンジェル！　エラー発生！　スピードが落ちません！」
　カイエはバートから逃げるように駆け出す。
「あっ！　待て！」
　軌道を外れたカイエを追いかけるバート。カイエは陽気に笑いながら蛇行し、最初に腰掛けていたベンチに向かう。
　バートはなんとかカイエに再接近し、捕まえようと手を伸ばしたそのとき。
「──え？」

　カイエはいきなり急ブレーキをかけた。
「うわっ！」
　急に止まれずカイエの背中に抱きついたバートは、彼女の肩越しに人影を見つけてギョッと息を呑のむ。
「女王陛下……!?」
　地味なワンピースに着替えたサンダンシアが、なんとも言えない表情でたたずんでいる。
　なぜここにひとりで？
　抱きついたまま固まるバート、ぴくりとも動かないカイエ。
　サンダンシアはきまりが悪そうに一歩下がる。
「すみません、お邪魔だったかしら……？」
「え？　あっ！」
　バートは慌ててカイエから離れ、ズレたメガネを直す。カイエも乱れた前髪をそそくさと直して背筋をぴんと伸ばす。
　酔いが一気に覚めた。
　首をかしげるサンダンシアに、バートは痴態の言い訳をする。
「その、今のはですね、シミュレーションをやっていて、事故で……」
「シミュレーション？　事故？」
　オウム返しされてしまい、カイエが慌てて付け足す。
「は、はい、事故です！　ただの事故です！」
　むしろよけいに誤解を生みそうな焦りっぷりで、サンダンシアはますます訝いぶかしがる。
「私、出直したほうがよければ、あとでも……」
　誤解を持ち帰られるわけにはいかない。
「だ、大丈夫でございます！　ご用命がおありでござりましょうか!?」
　焦りすぎて謎なぞの丁寧語になってしまうバート。
　冷や汗を流してかしこまるふたりに、サンダンシアはやわらかな笑み

を投げかける。
「夕食会のとき、宇宙開発についてあまりお話ができなかったので、その続きができればと思っておふたりを探していたのです」
　思わぬ申し出に戸惑ってバートがカイエに目を向けると、カイエも同じようにバートを見た。無論、断る理由などない。
「……僕たちでよければ」
「はい、ぜひ」
　サンダンシアは頬ほおをゆるめる。しかし、君主を相手に屋外で立ち話というのは失礼にも程がある。
「ラウンジに行きますか？」
　バートが提案するが、サンダンシアはここで構わないと言う。
「ロビーやラウンジには王室の者以外にもたくさんの方がいて、ゆっくりできないので」
　たしかに周りの注目を集めてしまうだろう。それに女王自身がこの場所を望むならば移動する必要もない。
　Ｌ字型のベンチに腰掛け、バートとカイエはサンダンシアの話を訊きく。
「私、カンファレンスに参加するのに、知識が全然ないんです」
　議論する内容については事前に配布された資料のみ。あとはテレビで報道される一般的な情報しかないという。
「宇宙開発には興味があるので本当はくわしく勉強したいのですが、公務に追われて……」
　女王は宇宙科学の専門家ではないのだからそれでも十分だとバートは思うが、サンダンシアは納得していないようだ。
「秘書官には『傍聴者だから問題ない』と言われてまして、たしかにそうなのですけど……先ほどの夕食会で、やはり不安になってしまいまして……」

　カイエが訊たずねる。
「不安、ですか？」
　サンダンシアは心配そうに訊きく。
「共和国のおふたりが浮かない顔をしていた理由がわかれば、教えていただきたいです。私の発言に誤りがあったのでしょうか」
　月や宇宙について問われたレフとイリナは言葉を濁していた。彼らの事情を知らなければ、たしかに気がかりな反応に違いない。宙そらを飛べない宇宙飛行士の件はあまり明かすべきではないかもしれないが、女王の不安は取り除くべきだ。
　そこで、レフから訊いた事情をバートが率直に伝えると、サンダンシアはうなだれる。
「知らなかったとはいえ、傷つけてしまいました……」
「いえいえ、しょうがないですよ」
　カイエもフォローを入れる。
「彼らも気にしていないと思います」
「それならいいのですけど……」
　君主という立場上、発言のひとつひとつが気になってしまうのだろうか。しかし、もし毎日そうだというなら、とてつもない心労だ。バートならば何もしゃべれない置物になって、気が滅め入いってしまう。
「とにかく理由がわかって安心しました。ありがとうございます」
　素直に感謝を述べるサンダンシアは偉ぶったところがまったくない。夕食会の前までは緊張していたバートも、今では目を見て話せる。
　しかし、親しみやすい反面、『太陽王』と呼ばれた前国王のような威厳はないと、失礼ながら思ってしまう。
　一八歳の少女に老王の如ごとき貫かん禄ろくがあったら、それはそれでおそろしいが。
　ともかく宇宙開発に興味を持ってもらえるのは喜ばしく、質問をされ

るのは光栄だ。
「ほかに疑問はありますか？」
「今、『プロジェクト・ハイペリオン』はどういう状況なのでしょうか？」
「状況とは……」
「開発は順調なのですか？」
　返答に困る。
　月面撮影の失敗もそうだが、すべての面で遅延している。それに加えて表には出ていない真実──組織間の争いを明かせば、失望させてしまうのではなかろうか。
　バートは迷い、カイエに助けを求める視線を送る。
　するとカイエは頷うなずいて引き取り、感情を交えない口調でサンダンシアに報告をする。
「開発は着実に進んでいます。ですが、解決すべき課題がたくさんあります」
「月面の撮影などでしょうか」
「はい。ほかにも挙げればキリがないです。宇宙船への複数人の搭乗、自動誘導システムの開発、船外活動にランデヴーなど、シミュレーションを重ねて試行錯誤をしています」
「あの、ランデヴーというのは……」
　引っかかった様子のサンダンシアは、バートとカイエを交互に見る。
「先ほど噴水の周りでされていた、あれですか？」
「あっ……！」
　見られただけでなく、やり取りも聞かれていたのか？
　気まずい。
　カイエがもじもじしていると、サンダンシアはよけいに気になったらしく、バートに問う。

「たしかシミュレーションと……？」
　君主に追及されては正直に答えるしかない。
「『月軌道ランデヴー方式』という月面着陸方法を試していました……」
「月軌道？　地球軌道ランデヴーではなくて……」
　女王は記憶をたどるように夜空を見上げる。そしてしばらく考えていたが、思い当たらなかったらしく首をひねる。
「その方式は初耳です。カンファレンスの資料には載っていなかったと思うのですが」
　バートとカイエが噴水の周りをくるくる回っていたことには触れず、技術的な疑問が飛んできた。しかし、記載がないとすぐにわかるとは、資料をかなり読み込んでいるのだろうか。
「陛下のおっしゃるとおり、今回の議論からは除外されています」
「では、なぜ……？」
　サンダンシアは身を乗り出し、真剣な顔でバートに訊たずねる。宇宙開発に興味があるというのは社交辞令ではないらしい。
　それならば下へ手たに隠して誤解を与えるより、包み隠さず話したほうがいい。
「これは、ここだけの話にしていただけますか？」
　前置きして実情を話す。
　月面着陸の方式はふたつの組織間で争われていて、『月軌道ランデヴー方式』は却下されている状態だと。だから、カンファレンスでは取り上げられないと。
　するとサンダンシアは腑ふに落ちない様子で片かた頬ほおに手を当てる。
「提案はしないのですか？」
　第三者視点での率直な疑問は心臓をえぐってくる。

　バートはどう答えるべきか考えながら、慎重に話す。
「……提案も検討しましたが、じつは万博の見学中に思いついたことでして……登壇者を説得できるデータがないので、今回は見送ろうと……」
　そこまで言って、カイエに確認の視線を投げる。
　冷静に判断したらそうなるだろうと。
　するとやはり、カイエも残念そうに首を縦に振る。
「議論の予定にない提案をして場を乱すのは、私たちにとっても、この方式にとっても、悲しい結果を生むのではないかと思います」
　カイエの言葉を受けて、バートが結論づける。
「今回のカンファレンスでクラウス博士の提唱する『地球軌道ランデヴー方式』に方針が定まれば、それを月への道しるべとして前進するだけです。もし決まらなければ、そのとき再検討します」
　サンダンシアは納得したように頷うなずくが、声のトーンを落とす。
「いずれにせよ困難な道なのですね……」
　困難なので無理だと思われたくない。悪い心証を与えるのは避けたい。だからバートは気持ちをぶつける。
「困難ですが、だからこそ、挑戦するんです」
　ハッと顔を上げたサンダンシアに、バートはさらに訴える。
「予算の無駄遣いなどと批判もありますが、挑戦する機会を与えられている以上、僕たちは困難と戦いつづけます」
　カイエも想いを伝える。
「挑戦は一歩を踏み出したばかりです。道に迷うこともありますが、私たちの想像する未来がある場所へ、少しずつでも進んでいきます」
　ふたりの心意気を受け止めたサンダンシアは、夜空に輝く月を見つめる。
「『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』……。私も読みました。ブルー

エンジェル号が困難を乗り越えて月に到達したように、皆さんの挑戦の成功を祈っています」
　読んでいたなど意外だ。
「陛下もＳＦ小説を読まれるのですか？」
「はい、人工衛星がはじめて宇宙を飛んだときに興味を持ちまして。女王となった今では読書を楽しむ時間は全然取れないのですが、一日の公務のあとに愛犬たちと夜空を眺めては、宇宙の旅を想像しています」
　天と地ほど離れた存在だと思っていた女王を、バートは一気に身近に感じる。
　サンダンシアはバートとカイエを交互に見て、熱心に問う。
「小説に描かれていた有人宇宙船での惑星間飛行は、どのくらい現実味があるのでしょうか？」
　バートは苦笑いを浮かべる。
「できるとしても遠い未来だと思います。火星ですら、ようやく実態が掴つかめてきたところですから」
「なるほど……。では、地球に飛来しているＵＦＯが本物ならば、ものすごい科学技術力を持っているのですね」
　真顔でサンダンシアが言うので、カイエが前のめりに食いつく。
「陛下もＵＦＯを信じてらっしゃるのですか？」
「いえ、あまり信じてはいません」
　即否定され、カイエは気まずそうに姿勢を正す。
「あはは……ですよね」
「でも、想像はします。もし誘拐──」
　言いかけてサンダンシアはハッと口に手を当てた。
「あっ……今のは忘れてください」
　バートとカイエは思わず顔を見合わせる。さすがに女王が誘拐されたら大事件だ。一瞬、サンダンシアの頬ほおを影が掠かすめた気がした

が、忘れてと言われたらこれ以上触れられない。まさか異星人から脅迫を受けているわけもないだろうし、くだらない冗談を口にしかけて、立場上自制したのだろう。
　ふたりを困惑させたサンダンシアは素知らぬふりをして微ほほ笑えむ。
「ところで、コンピューターについて伺うかがいたいことがたくさんあるのですけど、教えていただけませんか？」
「はい、もちろんです！」
　カイエがよろこび勇んで解説する。一国の君主が科学教室の受講生のように耳を澄まし、子どものような純粋な瞳ひとみで何度も頷うなずく。
「ＦＯＲＸフオークス？　高水準言語……？　低水準もあるのですか？」
「そちらは機械語なので非常に難しいです」
「機械語……」
　以前バートがカイエにした質問と同じ内容だ。女王という冠を外せば、彼女はまだ学生の年齢。あらゆることに興味は尽きないだろう。
　そんな好奇心に溢あふれた彼女を見ていると、バートは大学時代を思い出す。
　あの頃、宇宙開発は黎れい明めい期で、人工衛星は打ち上げられておらず、ＡＮＳＡは前身組織の航空委員会だった。バートはひたすら研究に没頭して、世間も知らなかった。そんな当時の自分よりも若い年齢で超大国の君主を務めるなど、到底考えられない。自分ならばプレッシャーで心身ともに潰つぶれてしまうだろう。
　女王の私生活はバートの知るところではないが、好きな本を読む時間もないと言うのなら、もしかしたら、すごく不自由な暮らしを強いられているのかもしれない。

　そうして真剣に聞いていたサンダンシアは『ライカ・クレセント』の街の話題になると、ふっと、声のトーンを落とす。
「ところで、カイエさん」
「はい」
「昨秋の行進のあと、状況は変わったのでしょうか？」
　明言を避けているが、揺れる瞳ひとみから新血種族への差別を憂いていることがわかる。カイエはその気持ちに寄り添うように神妙に答える。
「お気遣いありがとうございます。そうですね……技術者に新血種族が以前よりも多く採用されている点はうれしいですが、毎日の暮らしそのものは改善されず、つらくないと言えば嘘うそになります」
「そうなのですね……」
　不安を覗のぞかせる女王に、カイエは微ほほ笑えみかける。
「ですが、みんな前を向いて生きています。科学教室をひらくと、子どもたちも集まってくれるようになって。ね、バート？」
　以前なら新血種族の子どもたちと小型衛星を飛ばすなど考えられなかった。バートの脳裏に行進を決めたあの日の光景が蘇よみがえり、身体からだの芯が少し熱くなる。
「勇気を出して行進して良かったと思っています。やらなければ、きっと後悔していました」
　カイエはしみじみとした口調で語る。
「彼には本当に助けられました。今、私がここにいられるのも、宇宙が嫌いなふりをしなくてよくなったのも、すべて彼が提案をしてくれたおかげです」
「あ、いや……」
　感謝の言葉を綴つづられ、バートは照れ隠しでメガネにかかった前髪を何度も払う。

　するとサンダンシアは胸に手を置き、ほっと嘆息した。
「おふたりと話していると、人間と新血種族はきっと上う手まくいくと思えます。広報員というのは表面上ではなくて、お互いを尊敬し、信頼している、とても良い関係を築いていらっしゃるのですね」
　あまりにも率直な言葉に、バートはドギマギしてしまう。
「きょ、恐縮です。ええと、夢をともにする同志というのが大きいと思います……」
　あせあせしてカイエを見やると、彼女は目の周りを薄赤くして、こくりと頷うなずく。
「私もそう思います……」
　照れるふたりをよそに、サンダンシアはどこか寂しげな口ぶりで言う。
「共和国との関係もうまくいけばいいのですが……レフさんもイリナさんも笑顔で接してくださいますが、本来は競争相手なんですものね……」
　それは誤解だ。彼らは同志であって、争う相手ではない。少なくともバートとカイエはそう思っている。
　女王に意見するのは失礼極まりないが、こうして直接話せる機会などそうそうないのだから、誤解は解いておきたい。
「待ってください。僕たちは共和国との競争に興味はありません」
「え？　競争に興味がない……？」
　言葉足らずでよけいな誤解が生まれた。
　慌てて訂正するバート。
「いえ、申し訳ございません！　負けてもいいという意味ではなくてですね……ええと」
　しどろもどろになっているとカイエがフォローする。
「競争意識はあっても、それは共通の目的を達成するためです。共和国

のふたりと交流してみて、宇宙への想いはきっと共有できると確信しました」
　しかしサンダンシアの顔は曇っている。
「共同開発は実現可能なのでしょうか？」
　返答に窮する。協定が結ばれているだけで目め処どは立っていない。
「……政治的な問題を抜きにすれば、できるはずです……」
　弱々しく答えると、サンダンシアはうつむいて、唇を軽く噛かんで押し黙ってしまった。その『政治的な問題』こそが最大の障害であり、抜きにして考えられるものではないのだ。
　バートは間接的に女王に苦言を呈してしまったのではないかと猛省する。
「申し訳ございません。今のは、政府批判ではなくてですね……」
「……いえ、おっしゃるとおりです」
「はい？」
　口を開いたサンダンシアは切々と語りはじめる。
「障害は多くあります。ですが私は……宇宙開発も、人間と新血種族の皆さんとの関係も、それに共和国との共同開発も、すべてうまくいけばいいと願っています」
「陛下……」
　バートとカイエが驚きとよろこびの交じった眼まな差ざしを向けると、サンダンシアは羨せん望ぼうの光が宿った瞳ひとみで返す。
「昨秋、おふたりが行進で旗を掲げる姿をニュースで見て、心が震えました。記念式典のときは私自身いろいろと悩んでいて、あまりお話ができなかったのですけど……今日こうして直接お話を伺うかがって、気持ちが改まりました。女王という立場上、公おおやけの場での発言は控えねばならないのですが、できるかぎり、少しでもお役に立てれば―」
「―こんなところにいらしたのですか！」

女王の告白を遮さえぎり、険しい声が飛んできた。振り向くと、王室秘書官がただごとではない形相で駆けてくる。
サンダンシアはハッと口に手を当てる。
「すみません、勝手に出歩いて……」
やってきた王室秘書官は激しい狼ろう狽ばいをあらわにする。
「すぐにお戻りください！」

ホテルのバーラウンジにカンファレンスの関係者が集まる。
その視線は一台の大型テレビに向けられている。
政府の緊急報道。
官邸にいる首相が切迫した表情で全国民に向けた演説をする。
〈『囚とらわれの島』である隣国に、共和国の手によって核ミサイルの基地が造られている証拠が見つかりました〉
偵察機の撮影した写真が拡大してテレビに映し出される。
連合王国の南端からわずか一五〇キロメートルの距離にある、共和国とつながりの深い島国。その深い森のなかにある、不気味な人工物。
ラウンジにいる誰もが言葉を失う。
疲労の脂汗を光らせる首相は唇をかすかに震わせながら、危機の概要を淡々と述べる。
〈近距離用ミサイル、六か所。建造中の中距離用ミサイル基地、三か所〉
核ミサイルの射程範囲がくわしく表示される。
近距離用はライカ・クレセントを含む東南部を覆う。
中距離用の射程距離は二〇〇〇キロ。北西部の端に位置するマリンシティはかろうじて射程を外れるが、連合王国の九割以上が射程範囲内となる。
カイエはテレビを見つめて微動だにせず、バートも全身の血が凍りつ

く。サンダンシアはハンカチを口元に押しつけ、顔を真っ青にしている。

首相は憤いきどおりをにじませながらも、あくまでも冷静に伝える。

〈一か月前、共和国政府は公式に、このように発表しました。『我らの保有するロケットは強力であり、核弾頭を世界の果てまで運べる。よって、国外の基地は不要です』と。この発言を信じれば、『囚われの島』にミサイル基地などあるはずがない。ですが、先週の火曜日、基地が存在する疑惑について私は報告を受けました。そこで直ちに監視の強化を命じました〉

政府は一週間前には事態を察知していた。

つまり、首相がカンファレンスの挨あい拶さつを欠席した理由は風邪ではない。この危機に極秘裏に対応していたためだ。

ラウンジには首相の危機的な声だけが響く。

〈監視の結果、共和国の政府発表は虚偽だと判明しました。ここで重要なのは、共和国が領土外にはじめて戦略兵器を配置した点です。これは挑発にほかならない。この行為を正当化してはいけない〉

首相は語気を荒らげて訴える。

〈いまや世界は核戦争の瀬戸際にあります。もし攻撃を受ければ防衛するすべはありません。わずか数分で都市が壊滅します。この攻撃的な軍備強化を中止させ、ミサイルの搬入を阻止しなければならない〉

そしてひと呼吸置き、言い放つ。

〈海上封鎖を発動する〉

テレビから流れた言葉によって、ラウンジにどよめきが響き渡る。

隣国に対する強硬手段。封鎖ラインを超える船舶は停船させて検疫する。これは、封鎖をされる側にとっては事実上の宣戦布告にあたる。

〈共和国に対してミサイル基地の解体と撤去を要求する〉

怒りを漲みなぎらせていた首相は少し間を置き、今度は国民に向けて

危機への対応方針を丁寧に説明する。冷静な口ぶりからは、安心させて混乱を防ごうという意思が伝わる。つづいて『共和国に囚とらわれた島民』へ同情のメッセージを送る。共和国の国際的陰謀を責め、自由を手にすべきだと訴える。

〈この事態がどのように運ぶのか……問題なく収まるのか、あるいは惨事が発生するのか、誰も正確には予測できません。不安と危険に満ちています。しかし、我々は勇気をもって意思を示します。世界中の自由と平和を望みます〉

首相は最後に神に祈り、一七分間に及ぶ緊急報道は終わった。

人類未曽有の危機。

ホテル中が動揺に包まれる。

気づけば、バートの手のひらは汗でぐっしょりと濡ぬれていた。

もはや、酔いはすっかり覚めた。

一触即発で、いつ核戦争がはじまってもおかしくない。

テレビを見ているあいだは現実感のなかった恐怖がじわじわと押し寄せてくる。

隣のカイエはテレビを見つめたまま硬直している。

「カイエ……」

呼びかけると、彼女はハッと振り向いた。顔面蒼そう白はくでひどくショックを受けている。言葉はなく、怯おびえた目で訴えてくる。

どうしたらいいの、どうなるの、と。

バートは答えられず、自問自答する。

今、何を、どうすればいいんだ？

逃げるべきなのか？

逃げるってどこへ？

シェルターに避難すべきなのか？

周囲を確認するが、誰もが平静さを失っている。ふだんは強気なジェニファーですら愕然としている。

ロビーで話す記者と政治家のやり取りが耳に届く。

「海上封鎖をはじめた場合、次の問題は、どの段階で空爆へ移行するかだ……」

「一気に壊滅させなければ報復されるのでは……？」

「封鎖では甘い。先制攻撃か上陸作戦をすべきではないか……」

不穏な言葉が飛び交う。

ロビーの隅では共和国一行が連合王国政府の職員に「どういうことだ」と詰め寄られている。〔運送屋〕はただ戸惑い、レフは拳こぶしを握りしめて憤いきどおりを湛たたえ、イリナは眉まゆをひそめて途方に暮れている。その反応からすると、彼らにとっては寝耳に水らしい。

サンダンシアは今にも泣きそうな顔で王室秘書官にすがりつく。

「なぜ教えてくれなかったのですか。ミサイルの件、あなたは知っていたのではないですか？」

「いえ、先ほどはじめて……首相からの連絡で『結論が出るまではよけいな心配をおかけしたくなかった』と」

信じがたいが、サンダンシアは君主であるにも関わらず、今の今まで事実を知らされていなかったようだ。

「私はどうすればいいのですか……」

狼狽うろたえる女王に対して王室秘書官がぴしゃりと言う。

「海上封鎖の宣言書に署名をしていただきます」

サンダンシアの声が震える。

「……本当に、封鎖をするのですか？」

「国家安全保障会議執行委員会エクスコムの決定です。同盟国の首脳も同意済みとのことです」

「その執行委員会というのは、はじめて聞くのですが……」

　それは、通常の国家安全保障会議―首相以下、国務長官や国防長官らで構成される―に、諜ちよう報ほう機関の長官など多数の識者や賢人を加えた『数十名による危機対応の臨時機関』だと王室秘書官は説明した。
「我らが頭脳集団ブライテストを信じてください」
「どのような状況なのでしょうか……」
「全世界に配備された兵力は最大厳戒態勢デフコン３に入りました。事態はもはや制御できず……今はただ、経過を見守るしかありません」
　血の気を失ったサンダンシアはよろめきながら王室秘書官に連れられていった。
　無為な時間が流れてゆく。
　カイエはひとことも話さず、元気なく椅い子すに腰かけている。バートは励ます言葉が見当たらず、ただ隣に座っている。
　そのまま一〇分もすると、動きがあった。
　万博の実行委員と老齢の政府の高官が連れ立って現れ、ロビーやラウンジにいたカンファレンスの参加者を集める。
　すぐに人垣ができる。皆みな一様に表情は重い。
　バートとカイエは座ったまま、少し離れて話を聞く。
　腰の低い実行委員は額の汗をハンカチで拭ふきながら、かすれた声で伝える。
「明日のカンファレンスですが、予定どおり開催します」
　思いもよらぬ選択に、ＡＮＳＡの職員が詰め寄る。
「やっている場合なのか!?」
「話を最後まで訊きいてください！」
「くわしく説明をしろ！」
　そこへ老齢の政府の高官が割って入り「落ち着きなさい！」と大声で怒鳴りつける。

「世間の注目度が高いカンファレンスを中止にすれば、あらぬ憶測を呼ぶ！　だから『開催せよ』と国家安全保障会議より指示が届いている！」
「しかしだな！」
「現状はミサイル基地が確認されただけで、明日核戦争が起きるわけではない！　それにここはミサイルの射程外だ！」
「射程の問題ではない！」
　怒号の飛び交う不毛なやり取りが勃発する。優雅な空気が流れていたラウンジはもう影も形もない。
　事態を傍観しているバートとカイエのもとに、疲れ切った眼まな差ざしのジェニファーがやってくる。
「ふたりとも、ひとまず部屋に戻りなさい」
「本当に明日、やるんですか？」
「今のところはね。もし変更があれば連絡するわ。何もないといいのだけど……」
　溜ため息いき交じりに腰に手を当てる彼女に、いつもの余裕は微み塵じんもない。
　うつむいているカイエの肩をバートは優しく叩たたく。
「行こう。ここにいてもしょうがない」
「うん……」
　右往左往する人たちをかいくぐり、重い足取りで部屋に向かう。

　カイエを隣の部屋に送り届けたバートは自分の部屋に入るなりテレビをつけて、息苦しい正装を脱いで投げ置くと、下着姿でベッドに身を投げる。
　ニュースは首相の語った内容を繰り返すだけで、新たな情報はない。
　腹の底から大きく息を吐き出す。

「ミサイルか……」
　今夜はカンファレンスの議題について最終確認する予定だったが、とてもそんな気分にならない。
　カイエをひとりにしてしまったが、大丈夫だろうか。
　部屋に戻る道中、彼女はひとこともしゃべらなかった。別れぎわに「おやすみ」と声をかけたが、返事はなかった。
　気になってしまい、カイエの部屋側の壁に耳を当ててみる。しかし、物音ひとつ聞こえてこない。
　ニュースでは非常時の避難方法が紹介される。
　──地下に逃げ込め。頑強な建物に逃げ込め。閃せん光こうを見るな。
　息が詰まる。
　窓際に行き、光沢のあるブルーベルベットのカーテンを開ける。窓に細かい水滴が付着している。いつのまにか霧雨が降りはじめていた。
　窓を開けると、湿った空気と雨の匂においが流れ込む。
　大きく深呼吸するが、胸騒ぎがおさまらない。話し相手がほしい。カイエを呼びに行こうか。きっと彼女は孤独に打ち震えているはずだ。
　しかし、何を話せばいいのだろう。話しても慰めることなんてできない。
　窓枠に手をかけ、肌寒い夜風になぶられていると──トントンと、聞き逃しそうなほど弱々しくドアがノックされた。
　カイエ？
　直感でわかる。急いで部屋着を着るとドアに向かい、外にいるのが誰かも確認せずに開ける。
　やはり、カイエだった。ドレスから普段着になった彼女は憔しよう悴すいしきった瞳ひとみで、消え入りそうな声で言う。
「……ちょっとだけ、いっしょにいてもいい……？」
「あっ、もちろん……僕も話がしたかったんだ」

少しだけ表情を和らげたカイエを招き入れるとソファに促し、バートはベッドに腰かける。
「コーヒーでも飲む？」
「ううん、大丈夫……」
ソファに浅く腰掛けたカイエは傍そばに置いてあったレフとイリナの著書―『宇宙への旅路』を手に取る。見開きのカラー写真では、宇宙服を着たふたりがヘルメットを抱えて誇らしげに胸を張っている。
「ふたりとも、ミサイルの一件はまったく知らなかったんでしょうね……」
憤いきどおりをにじませていた彼らを見る限り、ミサイル基地の設置など望んでいないことは明白だった。
バートは彼らを気の毒に思う。
「ふたりが初訪問して横断旅行をする裏で、こっそり基地を作ってミサイルを運ぶなんて、まるで視線を逸そらすための隠れ蓑みのじゃないか……」
そう疑うのは、事件に重なったのが今回だけではないからだ。
思い返せば共和国は昨夏も同じことをしていた。ミハイル飛行士による地球軌道飛行が注目を集める裏で、衛星国の都市を有刺鉄線で封鎖する準備を進めた。
一か月前のローザ飛行士たちによる『虚偽のランデヴー』も同様の狙ねらいだった可能性がある。
偶然かもしれないが、タイミングが一致しすぎている。もしそういう目的で宇宙飛行士を利用しているなら、本当にやりきれない。
新しい情報を求めてテレビのチャンネルを変えるが、どこも似たような内容だ。そんななか、国内各都市の様子を生中継している番組にバートの目が釘付けになる。
「カイエ見て！」

顔を上げたカイエは目を丸くする。
「……あっ！　ここ……」
ライカ・クレセントの市街地だ。スーパーマーケットに殺到する人々。核シェルターに非難する家族。渋滞してクラクションを鳴らす自動車。
いつもはジャズが流れる賑にぎやかな街が、叫喚と混乱に満ちている。
コメンテーターの軍事評論家が警告する。「この都市には空軍基地や航空研究施設があるため、まっさきに核攻撃を受ける可能性が高い」と。
月げつ影えい区くはいっさい映らないが、きっと大騒ぎになっているに違いない。
カイエは泣きそうな声でつぶやく。
「みんなが心配……お父さんも……。もう、今すぐ帰りたい……」
ライカ・クレセントは彼女の生まれ故郷だ。打ちひしがれる彼女に声をかけたいが、この状況ではどう励ましても、空虚に響くだけだろう。
ニュースは執しつ拗ように危機と不安を煽あおり、軍事評論家はさも得意そうに空爆と報復について仰々しく話す。
「もういいよ……」
バートは聞いているのが嫌になり、テレビを消音にする。電源を切れないのは、切ったら切ったで緊急速報が入らないか気になってしまうからだ。
開けっ放しの窓から風が吹き込み、カーテンがひらひらと踊る。
虚うつろな表情をしていたカイエが大きく息を吐いた。そしてゆっくり腰を上げると、窓際に行く。
彼女は何をするでもなく、窓枠に手をかけ、ぼんやりと外を眺めている。夜の闇やみに溶けてしまいそうな儚はかなげな背中を見ていると、

彼女をひとりにはしておけない。バートはカイエの隣に立ち、ただ同じ景色を見る。

しとしとと降りしきる霧雨に街灯や車のテールランプがにじむ。未来の象徴であるスペースタワーは照明が落ち、真っ黒な影になって街を見下ろしている。

夜風になびく髪をそのままに、カイエは前を向いたままゆっくりと口を開く。

「核戦争が起きたら、この世界はどうなってしまうの」

切実な問いに胸を貫かれる。

カイエは静かに瞳ひとみを閉じて、世界に語りかける。

「鮮やかな夕焼けや、星の輝く夜空。月下美人の花や、森を漂う蛍。みんなで作ったパンチカードの山も、いつもお惣菜を買ってるスーパーマーケットも、全部……なくなってしまうかもしれない……」

バートも目を瞑つむり、想像する。

核ミサイルが落とされて壊滅したライカ・クレセントを。

家も街も。

有人宇宙船センターもロケット発射場も。

軌道飛行の日に行進をした道も。

新血種族の子どもたちと小型衛星を飛ばした平原も。

ＵＦＯを探した湿原も。クッキーを奪った水鳥も。

全部消えてなくなる。

「ねえ、バート……」

悲嘆に暮れたカイエはかすれた声を絞り出す。

「宇宙ロケットは全部ミサイルに代わる。コンピューターは軍事目的だけに使用される。そんな世界になったら、宇宙旅行や月面着陸どころじゃないよ……そうでしょ」

カイエは崩れ落ち、両肩を抱いて震える。

「みんなを安心させるためにカンファレンスをやるって、そんなの、何の意味があるの……！」
　不安に襲われている彼女を勇気づけたい。いつもいつも、彼女の笑顔に数え切れないほど助けられている。こんなときこそ、自分が彼女の支えになりたい。
　バートはカイエの前にしゃがみ、震える彼女の手を両手でそっと握る。
「何が起きても、僕は君といる」
　顔を上げたカイエの瞳に涙が浮かぶ。
「バート……」
「君といっしょにいる。だから……」
　だから、安心してなんて言えない。
　だから、もう大丈夫なんて言えない。
　だから。
「明日も同じ夢を見よう」
　それが自分にできるただひとつのこと。
「国家の危機なんて、僕たちに解決できる問題じゃない。僕たちに戦争を止める力なんてない。でも、この広い世界で、僕たちにしかできないことがある」
「私たちだけに……」
　バートはカイエの手を固く握りしめる。
「僕たちは科学の力を使って、ブルーエンジェルを現実のものにして、みんなの夢を叶えられる。二一世紀の未来にみんなを連れて行ける」
　カイエは無言で手を握り返す。細い指先にぎゅっと力が入る。言葉にならない思いが伝わってくる。
「正直、僕も不安だ。いつこの危機が去るかわからないし、永遠に去らないかもしれない。もしかしたら、最悪の事態になるかもしれない。で

も、僕たちは信じつづけるべきだ。銀河の果てまで、宇宙旅行をできる日が訪れるって」
「うん……」
「だから、同じ夢を見よう。明日も、あさっても、ずっと」
「ずっと……」
　開け放している窓から冷たい夜風が吹き込み、肌を撫なでていく。
「こんな状況で月を目指すなんて、世間の人たちには馬鹿だと呆あきれられるかもしれない。空に浮かぶ石ころに行って何の意味があるんだって。たしかに馬鹿かもしれない。でも、好きな気持ちは簡単には捨てられない」
　バートは夜空を見上げる。厚い雨雲が天を覆っている。
「今は月は見えない。でも、そこに月がある限り、空想を現実にする挑戦をつづけよう」
　カイエは目尻に浮かんだ涙を指で拭ぬぐい、ふっと笑みをこぼす。
「そうね。大嫌いな月を征服しなくちゃ」
　彼女の微ほほ笑えみを見ると、自然と心が和らぐ。
「でも、うーん、月が大嫌いという気持ちは分かちあえないかな」
　バートがからかうと、カイエはむっと頬ほおを膨らませる。
「あなたは月を好きでいいから」
「はは、でも月へ到達するって目的はいっしょだよ」
　テレビはいつしか天気予報に変わっている。明日も雨だ。
「朝になったら危機が去っているといいんだけどね。神のみぞ知るかな……」
　するとカイエがもじもじと訊たずねてくる。
「ねえ、さっき言ってた、何が起きてもいっしょにいるって……」
「あ、うん……」
　あらためて繰り返されると恥ずかしい。バートは自分の顔が赤くなる

のを感じた。
「あのね……私もそう思ってる」
「え？」
「仕事のときだけじゃなくて、万博をふたりで回ったり、ＵＦＯを探したり、小型衛星を作ったり、ご飯を食べながら宇宙について語り合ったりしたい……」
　せきを切ったようにカイエから思いが溢あふれた。
　その気持ちを受け止めて頭と心がいっぱいになったバートは、ただ「うん」としか言葉が出ない。
　するとカイエはアッと顔を曇らせた。
「ご、ごめんね。そういう意味じゃなかったかな……」
　そう言って、身を隠すようにカーテンにくるまってしまった。
「ううん、そんなことない……」
　バートが声をかけるも、カイエはカーテンにくるまったままだ。
「夜遅くにお邪魔しました。自分の部屋に戻るね。また明日……」
　カーテンの裾すそからカイエの手が出てきて「ばいばい」と手を振る。
　このまま帰していいのか？　ちゃんと伝えるべきじゃないのか。そう迷っているうちにカイエはカーテンを脱ぎ捨て、視線も合わさず部屋を出て行こうとする。
「待って！」
　気づくとバートはカイエの手首を掴つかんでいた。
「僕も君と同じことを考えてる」
　バートは手を取ったままカイエの前に傅かしずく。ゆらゆらと揺れる瞳ひとみで見下ろす彼女にバートは誓う。
「街に帰ったら、今君が言ったことを全部やろう。万博ももう一回ふたりで来よう」

　もっと君を知りたいと思う。
　だから、バートは小指を立てる。
「約束しよう」
「……あっ。ピンキー・プロミスだね」
　カイエは笑みを浮かべて床に腰を下ろすと、小指を絡めようと手を伸ばす。
　だが、バートは首を横に振った。
「違うよ」
「え？」
「この約束は、君たちのやり方で」
「私たちの……って？　それ……」
　言わんとすることに気づいたカイエはびっくりして目を見開く。
「ピンキー・ブラッド……？」
「うん」
「だ、だってそれは……」
「君のことを、もっとわかりたいんだ」
「本気で、言っているの？」
　バートは強く頷うなずく。
「前に約束を交わそうとしたとき気づいたんだ。僕は君とわかり合っていると思い込んでいた。でも、それは勘違いだった。今日、万博をいっしょに回ったけど、君と僕は違う未来を見ていたのかもしれない。だって万博は人間が主催して、人間の視点で作られたものだから」
　困惑を浮かべるカイエ。
「あなたがどう感じていたかは、私にはわからない……」
「だから、いっしょにいるなら、少しでも差異をなくしたい」
「それは、私もそう思う。あなたのことが知りたくて、人間の小説を読んで勉強もした。でも……」

　カイエはバートの小指を見つめたまま、黙り込んでしまった。
　バートとしてはもちろん無理強いするつもりはない。
「嫌なら、もちろんしなくていいから……」
「嫌じゃないわ。でも、血の契りだから……あなたも私の血を舐めるのよ？」
「それは、わかってる。でも切り傷からの出血くらいのものだよね。それくらいなら」
　傍かたわらから見たら背徳的な行為だ。
　しかし、彼女の血を舐めることに何か問題があるだろうか。禁止されているわけでもなく、法に触れる行為でもない。純粋に彼女と真の契りを交わしたいだけだ。
「気になるのは、僕には牙きばがないから、君の血をどうすればいいんだろうって……」
「それは、私が自分の牙で軽く傷つけるけど……」
　カイエは言いよどみ、目を伏せる。
「……気持ち悪くないの？」
　不安と怯おびえを抱えた彼女に、バートは素直に想いを告げる。
「君を気持ち悪いと思ったことなんて一度もない」
　ハッと顔を上げたカイエはバートを真剣に見つめる。彼女は朱あかい瞳ひとみを揺らし、自分の小指をきゅっと握りしめると、やがて、決心したように頷いた。
「あなたが、いいなら……」
「うん、ありがとう」
　しかしバートはやり方がわからない。
「どっちからするものなの？」
「私が先に、あなたの血を舐める。利き手と逆の小指を出して」
「わかった」

　そう了解しつつも、いざとなると痛い注射を受ける前の心持ちになり、バートは左手の小指を幾度もつまむ。
「指は洗ったほうがいいのかな……？」
「私はかまわないけど。私こそ洗ってきれいにしたいかも……」
「洗ってこようかな……」
「どうする……？」
　お互い、踏ん切りがつかない。
「……噛かんだあとって当然血が出るよね。この高そうなカーペットを汚したらまずいな……」
「うん、どうしよう……」
「……バスルームなら、すぐに流せるかな」
　バートの提案に、カイエは静かに「そうね……」と言った。
　自宅のシャワールームの五倍は広い、大理石のバスルーム。
　服を血で汚さないように部屋着を脱いで、薄手のシャツ一枚になったバートとカイエは洗面台で指先を洗う。
「なんか緊張する……」
「……ねえ、バート。私、噛むから、歯磨きしたほうがいい？」
　カイエはアメニティの歯ブラシを指す。
「いや、いいんじゃないかな……」
「そ、そう……？　でも、いちおう軽く磨こうかな……」
「じゃあ、僕も舐なめるんだし、いちおう……」
　ふたりで並んで歯を磨き、血の契りの前に身を清める。こうして儀式の準備を終えると、浴槽の縁に並んで腰かける。
　覚悟を決めて、バートはカイエに向けて左手の小指を立てる。
「お願いします」
「はい……」
　カイエは一度深呼吸をすると、両手でバートの左手を包むように握

る。
「失礼します……」
おずおずと小指に顔を近づけた彼女は、指先に軽く口づけをする。
唇の柔らかい感触。
カイエは口を小さく開く。
細くかわいらしい牙きばが顔を覗のぞかせる。
温かな吐息が指先をくすぐる。
「私に誓って。同じ夢を叶えると」
「誓います……」
カイエは、バートの小指の先を甘く噛かんだ。心臓がどくんと鳴る。

牙きばの先端が小指の腹に食い込む。
皮膚がぷつんと突き破られる。
「っ……」
鈍い痛みが指先から腕へ、そして首へ走り、脊せき髄ずいがぴりぴりと痺しびれ、頭がぼうっとなる。濡ぬれた舌先に傷口を優しく舐なめられると、身体からだの芯が燃えるように熱くなり、経験したことのない甘やかな痛感に心が絡め取られる。
カイエは最後にもう一度指先に口づけをして、顔を離した。瞳ひとみの朱あかは深みを増し、白い頬ほおが桃色に上気している。
支配から解放されたバートは指先を見る。噛まれた傷口からぷくりと真っ赤な血液がにじみ出る。
「大丈夫……!?」
「うん……そんなに痛くない」
むしろもっと続けてほしかったとすら思ってしまうが、傷を心配そうに見るカイエにそんなことは言えない。やましい気持ちは胸の奥にしまっておく。
水道で血と唾だ液えきを洗い流すと、鋭い枝先で突かれた程度の、ごく小さな刺し傷ができていた。
「カイエ、どうだった……？」
「私の血と同じ味がした……」
「そ、そっか……」
「次はバートの番だよ」
「ああ……」
彼女の小指を見て、生なま唾つばを飲み込む。
カイエは緊張をほぐすように両頬ほほを両手で軽く二度、三度と叩たたき、ひとつ大きく息を吐いた。
「よし、じゃあ誓いの準備するね」

　カイエは自分の左手の小指をくわえて、ぎゅっと噛かんだ。
「っ……。はい……」
　バートの前に差し出された彼女の細く白い小指には、真っ赤な血がにじみ出ている。
「えっと、君と同じようにすればいいんだよね」
「そう……」
「じゃあ、いくよ……」
　深呼吸をして、カイエの手を両手で包む。
「僕に誓って。同じ夢を叶えると」
「誓います……」
　濡ぬれた朱あかい瞳ひとみと目が合った。
　鼓動が高鳴る。小指の傷口から血が噴き出てしまうのではないかというほど、どくどく脈打つ。
　ごくりと唾を飲み込む。
　カイエの小指に顔を近づけ、指先に軽く口づけをする。
　そのまま指先を口に含み、舌で血を舐なめる。
　ピクッと小指が動いた。
　血の味が口のなかに広がる。
　自分の血と同じで、しょっぱくて、鉄の味がする。
　彼女の生命を直じかに感じる。それは、握った手の体温や、身体からだが折り重なったときの重みとは違う、彼女の生命そのもの。まるで体内に彼女が入ってきたような、約束を破れば身体中が痛みそうな、そんな不思議な感覚を得る。
　最後、バートは小指に口づけをして、顔を離す。
「これで、いいの……？」
　紅潮しているカイエはくたっと力が抜けたように頷うなずく。
「ふたりだけの秘密だからね」

「もちろん。誰にも言わない。ふたりだけの誓いだ」
　ふたりという響きが胸の奥にじんわりと染み入る。血の契り──婚姻という言葉が頭をよぎる。無論、今の契りはそれとは違うが、特別な関係になったのは確かだ。
　直感の鋭いジェニファーに悟られないように気をつけねばならない。
　血の痕こん跡せきを消すために手を洗い、トイレットペーパーで押さえて止血し、トイレに流す。張り詰めていた空気が緩ゆるみ、気持ちがふわりとする。
　そのとたん、カイエが暗い顔になる。
「……ねぇバート、核ミサイル基地の続報、出てないかな」
「そうだね……」
　忘れたままでいたかったが、そうはいかない。バスルームを出ると、閉ざされたふたりの世界から一気に現実に引き戻される。
　テレビでニュースを確認するが、新情報はとくにない。
　いや、正しくは、バートたち一般人が知り得ぬだけだ。海上封鎖に向けて事態は水面下で進行しているだろう。計画を察知された共和国側にも動きがあるはずだ。
「明日のカンファレンス、こんな状況で議論になるのかな……」
　バートが疑問をこぼすと、カイエも元気なく頷うなずく。
「宇宙開発よりも軍事費に予算を回せっていう話になりそうね……」
「ああ。このままじゃ、核戦争が起きなくたって、月への道が閉ざされてしまうかも……」
　数多くある宇宙開発計画のなかでも、月面着陸は軍事との関わりが薄い。目先だけを考えれば、月面を支配するよりも地球の周りに軍事衛星をいくつも打ち上げるほうが実用的だ。
　だから、さらに危機が深まれば『プロジェクト・ハイペリオン』は真っ先に予算を削られる。国家のお偉方にとって、月へのレースなど、

超大国同士の意地の張り合いでしかないのだから。
　だったらどうするのか。
　カンファレンスで指をくわえて見ているだけではダメだ。
　ＡＮＳＡの開発陣と予算を決める政治家が一堂に会するという滅多にない機会で、コンピューター技術者代表として呼ばれた自分にできることは何だろう。
　何をすべきか。
　著名な登壇者たちの顔色を窺うかがって発言し、ご機嫌を取ることが正しいのか。
　そうじゃない。
　実現したい未来があるならば、他人に任せず、自分の力で作るべきだ。
「カイエ、決めた」
「ん？」
「明日、『月軌道ランデヴー方式』を提案しよう」
「え？　でも、説得できるデータも不足しているのに……」
　目をぱちくりするカイエにバートは強く告げる。
「予算が削減される恐れがある現在、最良の方式は、コストがかからず、シンプルであることだ」
「そうだけど……」
　さすがに迷いを見せるカイエ。突然の提案に頷うなずけないのも当然だが、彼女ならわかってくれるという確信がバートにはある。
「明日、もし世界が終わるとしても、君は遠慮する？」
　ハッと息を呑のんだカイエに、バートはまだ血のにじむ小指を向ける。
「誓ったばかりだよ。夢を叶えるって」
「……ええ、あなたの言うとおりね。私たちにしかできないことをやら

なきゃ」
　腹をくくった顔つきのカイエは小指を立てると、バートの小指に絡める。
「私とあなたの夢。それから──」
　結んだ指を、夜の底に埋もれてしまっているスペースタワーに向ける。
「宇宙に未来を見て、科学に希望を抱いだく、世界中のみんなの夢を──」
　そして、テレビから流れてきたヒット中のラブソングに合わせて、魔法を唱える。
『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』
　あなたたちを月へ連れて行く。

　バートの部屋で、ふたりは夜通し『月軌道ランデヴー方式』の資料を作成する。
　とはいえ、今さらしっかりしたものを作るのは難しい。
　カイエの記憶にあるデータや計算結果をもとに作成するが、図表を書く道具がない。そこで手先の器用なバートがコップの底やバインダーの外縁を使って、図画工作の要領でグラフや図を描く。
「カイエ、ちょっと押さえてて」
「こうかな……？」
　カイエは力を込めてコップを押さえつける。
「それだと、軌道を描くのに手が邪魔だね……」
「あっ、全然気づかなかった……」
　苦心を重ねてスライドで投影する資料を何枚か用意するが、すべて手書きで図も歪ゆがんでいる。こんなものを公式の場に出したら失笑を浴びるに違いない。しかし内容は正しいはずなので、笑われようが伝わっ

てくれればいい。
　眠気覚ましに苦いコーヒーを飲むと、バートはふと昔を思い出す。
「君と徹夜するのは、皆既月食の夜以来か……」
　ハリケーンが通過するなか、軌道飛行の成功に向けて必死になって計算をした。
　カイエは懐かしげに微ほほ笑えむ。
「あの日、あなたに吸血鬼症候群を見られちゃったんだよね。あれから、まだ八か月……すごい昔みたいなのに」
「もう何年もいっしょに作業してる気分だよ」
「私も。広報もいっしょにやってるし、倍なのかも」
「軌道飛行のときもこうしてがんばって、デイモン部門長に認めさせたんだ。今回もいけるさ……！」
　己を鼓舞して精を出して作業を進めるが、バートは昨晩ほとんど眠っていないうえに万博とディナーで精神力を削られたせいで、さすがに睡魔に襲われる。
「ふわぁ……」
　大あくびをすると、カイエに意地悪な視線を向けられる。
「眠くなったらワサビがあるからね」
「遠慮しとく……」
　眠気を覚ますために窓を開ける。
　霧雨は降りつづき、黒雲が月光を遮さえぎっている。
　今にも暗くら闇やみに覆われてしまいそうな二一世紀への道に、ふたりで希望の光を灯す。そうバートは気持ちを入れ直した。

　星の瞳　Ｓｔａｒ　ｅｙｅｓ

危機への対応を協議する国防会議は紛糾している。連合王国を代表する頭脳集団ブライテストが幾度となく顔を突き合わせても答えが出ない。

「ゲルギエフはいったい何を考えているんだ!?」

ミサイル基地の存在が明らかになったとき、まっさきに共和国大使館に連絡を取ったが、官邸に駆けつけた駐在大使は本国から何も知らされておらず、がたがたと震え上がった。

『囚とらわれの島』に運搬されたミサイルのうち、現在では三〇基が発射可能だと判明している。

状況は混迷を極め、情報の伝達が遅れに遅れ、もはや共和国の意図がまったく読めなくなっていた。一分一秒を争う事態だというのに、連合王国と共和国首脳間のやりとりには暗号化や書簡郵送の手間が必要で、通常時でも六時間かかるのだ。

『皆殺し』の異名を持つタカ派の空軍参謀総長が先制攻撃を主張する。

「もはや核戦争は避けられません。ならば先にしかけるべきです。封鎖程度では友好国から甘いと思われますよ。国民もそう思うでしょう」

しかし、首相は強く反対する。

「先制すれば核攻撃の報復を喰らうだろう！　『アンドレイ』で世界中が核に汚染されてもいいのか!?」

タイミングが悪いことに、レポートを送ってきていた諜ちよう報ほう員が捕らえられたとの一報が入り、相手の動きがますます読めなくなっていた。

空軍参謀総長は共和国民の大半を殺害する計画を提案する。

「報復を恐れるならば、報復もできないほど壊滅させればいい。やられる前に、共和国の主要都市に核爆弾を落としましょう」

「馬鹿を言うな！　先制攻撃の案は却下する！　身勝手な行動は世界に破滅をもたらすぞ！」

　連合王国は迎撃態勢を取る。中距離弾道ミサイル部隊は瞬時に対応できる準備を固め、原子力潜水艦は海上封鎖ラインへ向かって基地を発つ。
「共和国の狙ねらいはわからないが、我々はあくまでも和平を望む。共和国の良識を信じる」
　ゲルギエフと密みつに連絡を取り合い、妥協点を探す。
　それが唯一残された希望だ。
　ロケットに搭載するモノと標的次第で、世界の未来は変わる。
　人類を月へ運ぶのか。
　それとも。
　悪魔を地球へ落とすのか。

第五章　未来の行方

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

一夜明け、国際情勢はさらに悪化している。

各マスメディアは非常事態を騒ぎ立て、『囚とらわれの島』へ核弾頭を運んでいるとされる船団がテレビで中継される。そのうちの二隻は『レフ・レプス号』『イリナ・ルミネスク号』だ。

昨晩の首相のテレビ演説に対し、共和国政府は国営放送を通じて声明を発表した。

「―連合王国の海上封鎖は国際法に違反する海賊行為であり、挑発的蛮行である。ゆえに、ミサイルの撤去も、航行中の船舶二五隻の引き揚げも、我が国は承諾しない。また、核弾頭を装着した大陸間弾道ミサイルは、発射準備が整っている」

共和国軍に加えて同盟国までもが警戒態勢に入り、衝突の危険はますます高まる。連合王国の各地は恐怖に襲われ、核シェルターは人で溢あふれ、スーパーマーケットから商品が消え、首都では平和を訴える大規模なデモが行われる。

バートたちの滞在するマリンシティも例外ではない。デモ隊が霧雨を浴びながら「核兵器実験の終了」を叫び、万博の会場に向けて行進する。

そんな非常事態でも『二一世紀博覧会』は通常どおり開かれた。

とはいえ、来場者は激減。さらに開場直後に反戦運動家がスペースタワーによじ登るトラブルが発生した。

前代未聞の異様なムードのなか、カンファレンスの開始時間が迫る。

客席はガラガラではないかと心配されたが、会場となるオペラハウスの前には長蛇の列ができている。一〇〇〇人の客席はいっぱいになるだ

ろう。マスコミは『囚われの島』に関する新情報を得ようと躍起だ。
　何せ、科学界の重鎮だけでなく、女王や共和国の宇宙飛行士まで登壇するのだ。
　しかし、マスコミの期待は空振りに終わるかもしれない。国家安全保障会議から登壇者に対して「危機について推測で発言してはならない」というお達しが届いていた。

　オペラハウスのだだっ広い控え室で、登壇者たちは出番を待つ。共和国一行はまだ姿を見せていない。
　バートもカイエも発表の準備をしていたせいで全然眠っていないが、眠れなかったのはふたりだけではない。
　この場にいる全員が疲労を漂わせている。
　新聞を読んで危機に怯おびえる工科大学教授。
　コーヒーをがぶがぶ飲んでいる、でっぷりとした州知事。
　初老の気難しそうな男は政府の科学諮し問もん委員。以前「『月軌道ランデヴー方式』の生還確率は一パーセント」と断じた堅物だ。
　そして国内航空機メーカー大手三社の宇宙工学者や重役たち。それぞれロケットや宇宙船の開発契約を獲得しているが、どの月面着陸方式が選ばれるかによって受注が大きく変わるのだから、今日の話し合いは各社にとって極めて重要だ。そのうちの一社の副社長は危機について気が気でないようで、何度も電話をかけに部屋を出て行く。この企業の主要部門は宇宙開発ではなく、軍用機やミサイル製造だった。もし戦争となれば、宇宙開発部門はすぐに停止されるだろう。
　ＡＮＳＡの二大巨頭であるクラウス博士とキッシング長官の姿もある。
　いつも苦虫を噛かみつぶしたような面持ちのキッシング長官だが、今日はさらに苦々しい。ライバルのクラウス博士との討論に加えて核の危

機だ。ピリピリするのは当然だろう。
　そしてバートは自分の父親と同じくらいの年齢のクラウス博士と挨あい拶さつをして、握手を交わす。
　白髪交じりの博士は穏やかで気品がある一方、政治家のようなどっしりとした威圧感を放つ。キッシング長官が『冷』だとしたら、こちらは『温』だ。
　バートにとっては子どもの頃からの憧あこがれであり、宇宙の道に引きずり込んだ張本人でもあるのだが、キッシング長官が真横にいるため、想いを口にするのは憚はばかられる。
　結局、名前を言い合っただけで会話は終わった。こんな殺伐とした状況ではなく、もっとなごやかな場で話したかった。
　クラウス博士はカイエと握手をしながら、彼女の瞳ひとみをまじまじと見つめる。
「君の研究論文や技術報告書を、私はとても評価しています」
「ありがとうございます。光栄です」
「ところで、君は非常に優秀だと思いますが、月面着陸は『直接降下方式』がいいと思っているのですかな？　それとも『地球軌道ランデヴー方式』ですか？」
「そ、それは……」
　いきなり直球を投げられてカイエが返答に困っていると、隣にいるキッシング長官がわざとらしく咳せき払ばらいをする。
　するとクラウス博士はにやりと余裕の笑みを浮かべ、カイエに頭を下げる。
「これは失礼。では、ご意見はあとで伺うかがいましょう」
　そう言い残してクラウス博士はすたすたと去って行く。
　居心地の悪いバートとカイエはキッシング長官に睨にらみを利かされる。

「バート君、カイエ君。我がセンターの推し進める方式は完全ではないが、博士の推す方式も不完全だ」
「はい、わかっています」
　バートが素直に返事をすると、キッシング長官は満足そうに頷うなずく。
「議論中、博士が強引に航空機メーカー各社に指示を出したら、コンピューター技術者の視点で批判してほしい」
　カイエが真顔で即答する。
「かしこまりました」
　キッシング長官がふたりに背を向け、ほかの登壇者のもとへ向かうと、バートとカイエはチラと目を合わせて眉まゆをひそめる。
　予想どおり、二大巨頭は譲り合わない。議論はおそらく平行線だろう。しかし『月軌道ランデヴー方式』について発表することは事前に伝えない。もし言えば、議論の前に却下されるのは明らかだからだ。
　控え室の入り口あたりで、ざわりと空気が変わる。
　共和国一行がようやくやってきた。皆、表情は重い。
　レフとイリナは下唇を噛かんで、登壇者たちに深々と頭を下げる。この事態を心底申し訳なく思っているようだ。政府職員が「どういう状況だ？」と問うと、〔運送屋〕の女性は「大使館に連絡したが返事を保留されている」と険しい顔で説明した。
　ミサイル危機の影響はセッション内容にも及んでいる。
　議論される予定だった『六、宇宙科学の共同開発について』は丸ごと除外された。協力についてまじめに話し合ったところで、会場が白々しさと虚無感に包まれるのは目に見えているからだ。
　そのため、本日のセッションはふたつ。
『五、有人宇宙飛行と月面着陸について』、そして『七、質疑応答』。
　万博の実行委員長は渦中のレフとイリナに『質疑応答』の辞退を勧め

たが、ふたりは参加を決めた。「非難があればすべて受け止める」と。
　レフは再度、登壇者たちに頭を下げる。
「ミサイル基地の設置ももちろんですが、自分たちの名を冠する貨物船がミサイル運搬に使われていることを、とても心苦しく思っています」
　悲しげにイリナは懇願する。
「迷惑かもしれませんが、質疑応答にだけでも参加させてください。もし観衆が騒いで私たちが邪魔になれば、すぐに退場します」
　ここまで言われて拒絶する者はいない。彼らに非や責任があるとは誰も思っていない。むしろ同情すらしている。
　そこで、セッションをどう進行するか検討した結果、質疑応答をはじめる前に、レフとイリナが単独で挨あい拶さつをする形で落ち着いた。それならば観客も納得するだろうと。
　バートはレフに握手を求める。
「参加を決断してくださり、ありがとうございます」
「それはこちらの台詞せりふです。宇宙開発については深くしゃべれませんが……自分たちの役目は果たしたいので」
　その硬い笑みからは悲壮な覚悟がうかがえる。
　カイエは縮こまっているイリナを励ますように軽く抱きしめ、無言で背中をポンポンと叩たたく。
　すると、少しだが、イリナの表情がやわらいだ。
　吸血鬼の彼女の心情を知るよしもないが、周りが人間ばかりで、しかも国同士が敵対してしまった今、カイエの存在がどれだけ心強いだろうか。
　皆に少し遅れて、サンダンシアが王室秘書官とともにやって来た。顔には疲労の色が濃く、泣いたのかまぶたが腫はれぼったい。おそらく彼女も眠れていないのだろう。
　それでも、皆に顔を向けるときは微ほほ笑えみを浮かべる。

「皆さま、本日はよろしくお願いいたします」
　気丈に振る舞うが、ふとした瞬間に崩れてしまいそうな脆もろさを感じさせる。
　サンダンシアは質疑応答に傍聴者として参加し、閉会の挨あい拶さつをする予定だ。しかし出番までは舞台袖そでに行かず、控え室で音声だけを聞いて休んでいるという。椅い子すに腰かけた彼女はうつむいて放心しており、バートは心配になる。ひと声をかけたいが、周囲がそんな雰囲気ではなく、遠くから眺めるしかなかった。

　カンファレンスの開始時刻五分前となる。
　バートはファイルを握りしめる。そのなかにこっそりと『月軌道ランデヴー方式』の資料を忍ばせてある。
　いよいよ、ステージの舞台袖へ移動する。
　だが。
　クラウス博士たち登壇者に囲まれると気持ちが少しだけ引いてしまい、バートはカイエに小声で最終確認する。
「やる……でいいんだよね」
「ええ……」
　若干、カイエも飲まれ気味だ。そうしてこそこそ話していると、ジェニファーに肩をつかまれた。
「また密談？　デートの約束でもしてるんでしょ」
「し、してませんよ……」
　誤ご魔ま化かすとジェニファーはジッと見つめてきた。
「昨日の夜、ふたりでバートの部屋にこもって何してたのかしらね？」
「っ！」
　バレていた。
「今日の打ち合わせですよ！　ねえ、カイエ？」

「うん！　月面着陸についての話をたくさん……」
　ふたりで誤ご魔ま化かしながら、かさぶたになった小指の傷をサッと隠す。
　するとジェニファーは探りを入れるような目つきで言う。
「まあ何してくれてもいいけどね。私、あなたたちのプライベートにはタッチしないから。ね、穢けがれなき純潔の聖女ちゃん」
　カイエが慌てて遮さえぎる。
「こんな場所でそれはっ……！」
　あははと口を開けて笑うジェニファー。もしかしたら緊張をほぐそうとしてくれたのかもしれない。
「で、デートの約束なの？」
　いや、そうともかぎらない。しかし、なんだかんだでジェニファーには世話になっている。『月軌道ランデヴー方式』を提案したら彼女にも迷惑がかかるだろうか。
　などとバートが悩んでいると、いきなりジェニファーに両耳を強く引っ張られた。
「いだだっ！」
「いい？　ミサイルの件なんて、広報係のあなたがどれだけ考えても無駄だから。今はカンファレンスに集中しなさい」
　悩みの種は誤解されているが、バートはこくこくと必死に頷うなずく。
「よろしい」
　ジェニファーはバートから手を離すと、カイエに目を向ける。
「聖女も顔が硬いわね」
「！」
　カイエはとっさに両手で両耳をガードした。だが、ジェニファーはがら空きの脇腹を狙ねらってくすぐる。

「いっ！　や、やめっ……ひぃ！」
「議論に集中できるかしら？」
　身み悶もだえるカイエを責めつづけるジェニファー。
「ひぁ、ひゃい！」
「よし」
　解放されてぜいぜいと息を切らすカイエ。
　悲鳴をあげて騒いだせいで登壇者たちから訝いぶかしげな目で見られ、ばつが悪くて小さくなる。そんなバートとカイエに対して、ジェニファーは胸高に腕組みする。
「こんな豪勢なメンバーとステージに立つ機会はそうそうないんだし、楽しんできなさいよ。っていうか私が楽しみにしてるから。あなたたちがどれだけ目立つか」
「目立つ、ですか？」
「行進をやってくれたとき、正直驚いたわ。こんなやり方があるんだって。まあ、私の上司はご立腹だったけど。あの人、脳みそが戦前で止まってるから参っちゃうわ」
　ジェニファーはわざとらしく肩をすくめると、声を潜める。
「登壇者のおじさん連中なんて二一世紀にはとっくに引退してるんだから、ぶちかますような若気の至りも今なら許される……はずよ？」
　ひょっとしてジェニファーは何か勘づいているのかもしれないとバートは思う。
　なんせ、怖いお姉さんだ。
　しかしぶちかませと言ってもらえるなら、心おきなく。
「ぶちかまします」
　カイエはとぼけた調子でジェニファーに言う。
「税金で観劇料を払ってる分くらいは、みんなを楽しませます」
「はいはい、いってらっしゃい」

ジェニファーはふんと鼻で笑った。
舞台袖そでに向かう途中、バートはカイエに耳打ちする。
「いつ切り出すかは、状況を見て判断するから」
「合図は？」
「メガネを外して拭ふく」
ふたりで作り上げた手書きの資料を議論中に公開する。
作戦などない。
ただ思いをぶつけるのみだ。
バートはかさぶたになった小指の傷に成功を誓った。

ついに開始時刻となる。客席は満員だ。
司会進行を務めるＡＮＳＡの科学局員がステージ中央に出て、はじまりを告げる。
「本日は『宇宙の平和利用に関するカンファレンス』にお越しいただきありがとうございます」
平和利用という言葉がむなしく響く。
観衆は挨あい拶さつを静聴していたが、『六、宇宙科学の共同開発』が中止になったと発表されると、大きな溜ため息いきを漏らし、ブーイングを飛ばす。
「皆さん、お待ちください！」
科学局員は慌てて訂正を入れる。質疑応答にはレフとイリナは質疑応答には参加して、単独での挨拶もすることを伝えると、ブーイングは収まった。観衆の多くは共和国のふたりが目当てなのだ。
果たして質疑応答はトラブルなく進むのだろうかと、舞台袖で待機するバートは不安になる。
だが、今は他人のことより自分のことだ。
「それでは、『有人月面着陸について』のセッションに参加する皆さん

をお呼びしましょう」
　科学局員に名前を呼ばれた登壇者が順々にステージに出る。
　政府の科学諮し問もん委員。州知事と大学教授。航空機メーカーの宇宙工学者や重役。
　観衆から拍手を受けながら、ひとりひとり簡単な挨あい拶さつをする。皆みな、万博を褒ほめたたえ、カンファレンスに招待されたことを感謝する。誰ひとりとして核の危機には触れない。
　キッシング長官も来場者に向けて礼を述べるだけだ。
　次はバートの番となる。グッと息を呑のみ、ファイルを握り直す。
「有人宇宙船センター、デジタルコンピュータールーム職員。バート・ファイフィールド氏」
　ステージの中央に歩み出ると、バートは一礼する。
「この素晴らしい博覧会でお話ができることを光栄に思います」
　客席を見回すと、観衆の表情は硬く真剣で、議論を楽しむ雰囲気ではない。人間が大半で、新血種族はごくわずかだ。
　半円状に並べられた席にバートが着くと、カイエがステージ袖そでから出てくる。
「有人宇宙船センター、デジタルコンピュータールーム室長。カイエ・スカーレット氏」
　カイエは凛りんと一礼すると、皆と同じように型にはまった挨拶をする。
　登壇者の最後を飾るのはクラウス博士。ゆっくりとステージに出てくる。
「ロケット開発センター責任者。ヴィル・クラウス氏」
　すると客席からヤジが飛ぶ。
「ミサイル開発者！」「戦争犯罪者！」と。
　一般の来場者に紛れて過激な平和主義者が入り込んでいた。

クラウス博士は彼らをジロリと見やると、怒りは表さず、ただ神妙な面持ちになった。非難を否定できないのだ。軍事用弾道ミサイルを開発したのは事実であるから。世界が危機的な状況にあるゆえ、心中に去来する思いがあるのだろう。

ヤジを飛ばした者たちは会場スタッフによって強制退場させられた。

重く不穏な空気が漂うなか、『有人宇宙飛行と月面着陸について』のセッションがはじまる。

最初に、科学局員が観衆に向けて概況を簡単に説明する。

有人軌道飛行を目指した『プロジェクト・ヘルメス』は成功し、現在の目標は月に設定されていること。目標を達成するには、歴史上類を見ない困難を乗り越えねばならないこと。

そして、最難関は月面着陸であること。

着陸は『地球軌道ランデヴー方式』で固まりつつあるが、予算や技術面を考慮すると、妥協の末の賭かけである。また、バックアップとして選択された『直接降下方式』については、超大型ロケット『ギャラクティカ』が必要だが、開発は未定である。

「六〇年代中に月面着陸を達成するには、そろそろ最終的な結論を出さねばなりません」

科学局員が登壇者に議論を促すと、大方の予想どおり、クラウス博士とキッシング長官のあいだで論戦が展開される。様子見から徐々にヒートアップし、キッシング長官は厳しい口調で攻める。

「『地球軌道ランデヴー方式』ならば『ギャラクティカ』は不要だ。しかし代わりにロケットを一五回も打ち上げなくてはいけない。そのうえ、まったく新しい離着陸技術を開発せねばならない」

クラウス博士は首をひねる。

「まったく新しいとは」

「一機の宇宙船に月面着陸と地球帰還というふたつの機能を持たせる

と、当初の想定以上に機体が大型化すると判明している。下方視界も確保しにくい。それを無事に月面に軟着陸できるか？　以前に比べて技術面での不安が増している」

　指摘された懸念に対して、クラウス博士は落ち着き払った物言いをする。

「それはつまり、有人宇宙船センターの技術では、宇宙船を小型化、軽量化することは困難であると言いたいのですか？」

「『ギャラクティカ』と同じで非現実的という話だ」

「しかし、『直接降下方式』が不可能と判断された以上、がんばっていただくほかありません」

「それは、がんばれば『ギャラクティカ』も完成するという論理だ」

　ふたりの議論にバートは耳をかたむける。もし、『地球軌道ランデヴー方式』の問題を解決する画期的な妥協点でも見つかれば、『月軌道ランデヴー方式』を無理に提案する必要はない。

　しかし、クラウス博士とキッシング長官は責任を転嫁するだけで、前に進まない。するといよいよクラウス博士は航空機メーカー各社にプレッシャーをかけていく。

「いかがでしょうか、開発契約を獲得した皆さん。宇宙船が月面に着陸するとき、いかにして下方視界を確保するのか？　これぞ技術の見せどころではないでしょうか？」

　航空機メーカーは戦々恐々で、発言をけん制し合い、あいまいな回答に終始して明言を避ける。未知の技術を「できる」と言ってできなかった場合のリスクが大きすぎるのだ。

　時間の無駄に思える不毛なやり取りに、政府の科学諮し問もん委員はイライラして膝ひざを揺する。客席には溜ため息いきが満ちる。司会の科学局員はセッションを早く切り上げたいような顔で腕時計を何度も見る。

埒らちが明かない。
バートはカイエとそっと視線を交わす。
そろそろだろうか。
乾いた唇を舐なめ、メガネを外して合図をした、そのとき。
終始無言だった州知事がおもむろに口を開く。
「ところで、そもそも人類が月へ行く必要はあるのでしょうか？」
宇宙開発の根本を揺すぶる爆弾だ。
バートはメガネを握ったまま呆ぼう然ぜんとなる。ほかの登壇者も硬直する。
言ってやったと言わんばかりの州知事は一同を見渡す。
「宇宙開発よりも軍事防衛関連に予算を割くべきという意見を多く耳にします。そうではありませんか、皆さん？」
客席のあちこちから肯定の拍手が湧わく。明確な危機が目の前にある今、有人宇宙飛行は想像以上に歓迎されていないのかもしれない。
しかし、なぜこの場で訊きくのか。話の腰を折る必要があっただろうか。疑問を抱いたバートは満足そうに眉まゆを上げる州知事を見てハッとなる。
人気取りだ。
観衆の気持ちを代弁して、支持を得ようというのだ。
気を良くした州知事は勢いに乗ってしゃべる。
「宇宙探査ならば無人機でも成果を上げられるそうです。さて、莫大な予算をかけて、なぜ人を宇宙に飛ばすのでしょうか？」
超大国の意地のぶつかり合い。国家予算を使う理由はほかにない。
衝突が地上で起きた今、どうするのかと問われれば、返答に窮する。
登壇者は皆、口をつぐみ、誰かが発言するのを待っている。下へ手たを打てば観衆を敵に回してしまう。バートもどう答えるべきか迷う。
司会役の科学局員は弱り果て、場の空気がどんどん重くなっていく。

あろうことか、質問をした州知事の目が泳いでいる。自身には答えなどなく、あとさき考えずに発言したのだろうか。

暗鬱な沈黙が会場を支配する。

何か言わなければと心が焦り、胸が早鐘を打ち、喉のどが締まる。

「―なぜ月へ行くのか、お答えします」

声を上げたのはカイエだ。

皆の注目を集めるなか、彼女は立ち上がる。

「そこに月があるからです」

きっぱりと言い切った。

州知事は困惑を浮かべる。

「……君は何を言っているんだね」

カイエは真剣な瞳ひとみで州知事を見すえる。

「私たちは同じような批判をたくさん受けます。『なぜ月なのか？』『なぜ有人飛行なのか？』と。ですが、こういう意見は昔からありました。『なぜ高い山に登るのか？』『なぜ海の果てへ航海するのか？』。……これらについて、知事はどうお思いですか？」

まくしたてられて、州知事はたじたじになる。

「なぜ、と問われてもだね……」

「そうです。そこに理由などありません」

「ん？」

「私たちは太古の昔から冒険をして、世界を広げてきました。アーナック大陸の西端にあるこの街が生まれたのも開拓の結果です。今、冒険の対象が地上から宇宙になっただけです」

バートは援護したい気持ちもあるが口を挟まず、黙ってカイエの話を聞く。

「私の言い分は、論理的な回答ではないかもしれません。ですが、世間に馬鹿だと罵ののしられながらも突き進んだ先人がいたからこそ、今が

あるのです。月は大きな石ころと言われることもありますが、私にとってはふたつとない、光り輝く宝石です」

州知事をこくりと頷うなずかせたカイエは会場全体に向けて訴える。

「私は信じています。月を目指す冒険の先には、この博覧会で展示されている素晴らしい未来が待っていると。だから私たちは未知への挑戦をつづけます」

静聴していた一部の観衆が拍手を送る。

押し込まれた州知事は額の汗を拭ぬぐい、観衆の反応を窺うかがいながら足あ掻がくように意見を返す。

「ええと、ですが……現実問題として、軍事予算を拡大するのは避けられないでしょう。先ほどの博士たちの議論からすると、いかんせん、技術も予算も見通しが厳しく感じましたが……」

クラウス博士は言葉を探しているのか、顎あごに手を当てて黙っている。

ここで切り出すべきだ。

機を窺っていたバートが決意したとき、カイエと視線がぶつかった。

行こう。

外していたメガネをかけて、挙手をする。

「ひとついいでしょうか」

「ファイフィールド氏、どうぞ」

科学局員に発言許可を得たバートは深呼吸をして、怯おびえや緊張を腹の底から吐き出し、立ち上がる。

「今から提案する内容は、私とカイエ・スカーレットがコンピューター技術者の視点から月面着陸を再考したものです」

カイエは軽く頭を下げる。

「言うなれば、荒野に葬られた者の叫びです」

バートは登壇者を一いち瞥べつし、敢然と言い放つ。

「『月軌道ランデヴー方式』の再検討を提案します」
　刹せつ那な、クラウス博士とキッシング長官にきつく睨にらまれる。非難の鋭い視線が胸に突き刺さるも、カイエにもらった勇気で跳ね返し、彼女と手分けして資料を登壇者に配る。
　クラウス博士に資料を差し出すと、さも不愉快そうに捻ひねり取った。キッシング長官も科学諮し問もん委員も軽けい蔑べつの眼まな差ざしを向けてくる。航空機メーカーの人々は訝いぶかしげに、州知事や大学教授はポカンとしている。
　針のむしろのような状況で配り終えたバートは、まず観衆に謝る。
「この提案は急きゆう遽きよ決めたもので、事前に配布されている冊子に概要は載っていません。理解しにくい部分もあるかと思いますが、どうかお許しください」
　観衆はざわつくも、大半は不思議そうに首をひねる。
　それでいい。申し訳ないが、これは観衆に対しての話ではない。
　上層部へのプレゼンだ。
「それでは、はじめます」
　萎い縮しゆくしそうになる心に鞭むちを打ち、バートは登壇者たちに説く。
「『月軌道ランデヴー方式』こそ、もっともシンプルで予算もかからない方法だと私たちは考えます。以前に却下された計画書で誤っていた箇所『宇宙船内の空気を無視した数値』は修正してあります」
　カイエと一晩かけて検証した。手書きで不細工な資料だが内容は正しいはずだ。
　キッシング長官がこめかみを痙けい攣れんさせる。
「そもそも、ランデヴーやドッキングは地球軌道でさえ行われていない。必要な技術や装置も未完成だ。それを月軌道でやろうなど、夢に溺おぼれた寝言だ」

想定していた批判だ。
「未完成なのは『地球軌道ランデヴー方式』も同じです。そうですよね、クラウス博士」
憧あこがれの科学者に回答を促す。
するとクラウス博士は呆あきれを含んだ声で答える。
「たしかに、現時点では未完成です。しかし数年内には完成する予定です。ところで『月軌道ランデヴー方式』における問題はそこではない。地球と月の距離でしょう。もし三八万キロ離れた月の向こう側でランデヴーに失敗すれば、月着陸船に搭乗している宇宙飛行士は地球に生還できなくなる。我々の希望だった宇宙船は、永遠に月を周回する棺ひつぎとなってしまいます」
客席がどよめく。危険だから却下されたのだと理解したようだ。
とどめを刺すがごとく、科学諮問委員がふてぶてしく言い放つ。
「人命をないがしろにする悪魔の妄想だ。宇宙飛行士が生還する可能性など一パーセントもない」
冷淡な態度を取る理由は、政府職員としての保身だ。予算を握る自分が賛同した計画で、もし人命が失われれば方々から追及される。そんなデメリットしかない挑戦など論外なのだ。
この壁を打ち崩すために、バートは準備をしてきた。
「お言葉ですが、その『一パーセント』という数字は、計算によって弾はじき出された数字でしょうか？」
「計算する時間ももったいないほど非現実的である」
「『月軌道ランデヴー方式』の懸念ですが、自動操縦の精度……つまりコンピューターの性能によるところが大きいと思います」
「そのとおり」
「では、あなたはどのくらいコンピューターを理解してらっしゃいますか？」

「……基本的な機能は、資料を読んで理解しているつもりだ」
　あいまいに言葉を濁した。
　未知の機械であるコンピューターへの理解が乏しいのに勉強もせず、不可能というイメージだけで排除している。一般市民ならともかく、予算決定に関わる上層部の人間が。公務に忙殺される女王ですら知ろうとする気持ちを持っているというのに。
　バートは憤いきどおりを押し殺し、追及する。
「もう一度言いますが、『月軌道ランデヴー方式の再検討』は、コンピューター技術者からの提案です」
「つまり、ランデヴーの技術は確立していると言うのか？」
　黙っていたキッシング長官がいらだつ。
「確立したという報告は届いていない」
　クラウス博士も訝いぶかる。
「君たち、どういうことだね」
「それはですね……！」
　責め立てられるバートに代わってカイエが発言する。
「確立していません」
　一同の注目がカイエに集まる。
「今は不可能です」
　彼女が言い放つと、皆、呆あつ気けにとられる。
　一瞬の沈黙ののち、科学諮し問もん委員が爆発する。
「……ふざけているのか！」
　カイエは動じず、毅然とした態度で反論する。
「皆さんは『今日の不可能は、明日は可能になる』という言葉をご存じですか？」
　会場にいる全員に彼女は問う。
「科学の進歩は不可能を可能にしていきます。万博の展示を見れば一目

瞭然ですが、皆さんが知っている最先端技術を上回る未知の技術がどんどん開発されています。それはコンピューターも同様で、急激な進歩を遂げています。『月軌道ランデヴー方式』を非難する人々は、その事実を無視しています」

　科学諮し問もん委員が居丈高な態度で食ってかかる。

「では、一〇〇パーセント可能になると言い切れるのか？　君はコンピュータールームの室長だったな」

　カイエは少し困った表情を見せる。

「私自身、コンピューターを完全に理解しているとは言えません。いえ、理解していると断言できる者は開発者にもいないでしょう」

「馬鹿馬鹿しい。話にならん」

「誤解しないでください。それだけ進歩が早いのです。つまり、いずれは月軌道でのランデヴーよりもさらに高度な技術を獲得できると私は考えます」

「それは『変人の天国ナード・ヘヴン』の妄想だろう。荒野に葬られた科学者の亡霊に取り憑つかれているんだ」

「妄想ではありません。綿密な計算に基づく実現可能な想像です」

　そう言って自分の頭を指したカイエは、顔を真っ赤にした科学諮問委員を見すえる。

「月の向こう側でのランデヴーを今すぐやるのは無理です。でも、明日にはひとつできるようになります。ひとつ、またひとつ。毎日の積み重ねで、不可能が可能になる日はいつか絶対に来ます。コンピューター技術者の代表である私と彼が自信を持って保証します」

　カイエに託されたバートは会場へ呼びかける。

「皆さんは、月の裏側で複雑なやり取りをするなんて信じられないかもしれません。ですが、彼女の頭のなかでは、月面着陸はすでに成功しています」

両手を広げて自信ありげに大見得を切ると、観衆は感嘆の吐息をこぼした。
そしてバートは腕を組んでいるクラウス博士と向き合う。
「『月軌道ランデヴー方式』ならば、打ち上げるロケットは現在開発されている『クロノスV型』の一機で済み、月着陸船の大きさも解決できます」
クラウス博士は憮ぶ然ぜんとしている。
「それは重々承知だ」
「博士、先ほど知事から指摘があったように、今の状況では予算が軍事費に回されてしまうかもしれません。悲しいことですが、有人月面着陸はまっさきにやり玉に挙げられるでしょう。その逆風のなかで、一五機ものロケットを作る予算を確保できるのでしょうか？」
「確保しましょう」
根拠があるのかわからないが、クラウス博士は自信に満ちた表情で言い切った。
「では、まったく新しい宇宙船を開発する件は……」
「それはロケット開発センターの業務の範はん疇ちゆうではありません。そうですな、キッシング長官、メーカーの皆さん？」
圧をかけられた者たちは渋い表情になる。
しかしそれにしても、クラウス博士は『地球軌道ランデヴー方式』に固執している。コンピューターの可能性など関係なく、まるで世情に反して予算を浪費することを良しとするかのように。
いや、そういうことなのだ。
『月軌道ランデヴー方式』に決定した場合、ロケットは一機で済む。そうなってしまうと、クラウス博士率いるロケット開発センターの仕事量が減り、組織の影響力も低下する。
固執する理由が保身なのだとすれば、あまりにも利己的だ。しかし、

それを公衆の面前で問い詰めるのは違う。
　おそらくクラウス博士の頭にはもうひとつ、別の理由がある。それは、地球軌道上に複数のロケットを打ち上げなければ成し遂げられない計画。月を目指しながら宇宙開発の主導権を握り、『とある野望』を叶えようとしている。
　バートには、それが何かわかった。
「博士。私はあなたの著書を読んで育ちました。科学者を目指したのは、あなたに憧あこがれたからです。そして今、こうして意見を交換できることを光栄に思っています」
　突然の告白にきょとんとするクラウス博士だったが、すぐに相好を崩す。
「それはけっこうなことです」
「ですから私は、博士が『地球軌道ランデヴー方式』を強く推している真の理由が想像できます」
「真の理由……？」
「地球軌道上で、複数台のロケットによる複雑なランデヴーが成功すれば、その技術を使って宇宙ステーションを作り上げられる。博士は月よりも、もっと先を見ている。月は通過点に過ぎず、火星を越え、土星の輪をくぐり、銀河の果てに到達する。そんな未来を思い描いている。違いますか？」
　クラウス博士は眉み間けんにしわを寄せて少し考えたあと、腕組みを解いた。
「もちろん、宇宙ステーションは念頭にある。ランデヴーの開発を進める共和国に先んじて着手すべきだと私は考えます」
　隠してもしょうがないという開き直りすら感じる。いや、むしろこの場で明かすことで同意を得てしまおうとしているのかもしれない。その言動にキッシング長官は眉間を曇らすが、バートには博士の想いがわか

る。部下の雇用を守りながら、科学者として名声を獲得し、人類の夢想する大目標を叶える。
　だが、それは天才科学者の理想でしかない。現実は変わってしまっているのに、自分の考えが正しいと信じて曲げず、現実を適合させようとしている。もうひとりの天才、東の妖術師チーフデザイナーよりも先に宇宙の果てに到達するために。
「博士。敵は共和国の設計技師長チーフデザイナーではありません」
　クラウス博士の頬ほおがピクリと引き攣つり、わずかに動揺を見せた。
「何を言っているのかね」
　ぺこりと頭を下げるバート。
「失礼しました。ですが、そもそも月へ着陸できなければ、宇宙ステーションも惑星間飛行もすべて幻に終わってしまいます。ですから、あらためて『月軌道ランデヴー方式』を検証し、俎そ上じように載せていただけませんか」
　真しん摯しに訴えると、クラウス博士は納得がいかないように顎あごを触る。

「『今日の不可能は、明日は可能になる』。もっともです。コンピューターの進歩も認めましょう。しかし、その明日が来るのが三〇年先だったらどうなりますか。六〇年代中に、宇宙飛行士の安全を保証できる技術が確立できるとは限らない」

クラウス博士の言い分は正しく、反論できない。わかりきっていたことだが、即席の手書きの資料では説得材料に欠ける。

せめて再検討に頷うなずいてもらえないだろうか。

バートが説得の言葉を探していると、カイエが一歩前に出る。

「博士が以前書かれた小説で、火星に着陸するとき、火星軌道ランデヴーを用いています。月は火星よりもずっと近いはずです」

「あれは、現在の視点で見ると科学的な誤りもある。それに何よりＳＦですから」

苦笑いして肩をすくめるクラウス博士に、カイエは真剣な顔を向ける。

「しかし書かれた当時は、火星軌道でのランデヴーが正解だと思ったのですよね？」

「ですから、昔の話なのでね」

のらりくらりと相手にされず、網で風を捕まえるような調子だ。

するとカイエは哀かなしみを含んだ瞳ひとみでクラウス博士を見つめる。

「昔とは……博士がこの国に部下といっしょに亡命してきて、弾道ミサイルの開発者として戦犯呼ばわりされ、辺境の研究所で不遇の扱いを受けていた、そんな時代ですよね」

観衆はざわめき、クラウス博士は硬直する。

ミサイルという言葉を出して大丈夫だろうかとハラハラするバートの横で、カイエはひたむきに話をつづける。

「絶望的な暮らしのなか、夜空を見上げて宇宙旅行を思い描いていたの

ではないのですか。自分の開発したロケットが戦争に使われるのではなく、みんなの夢を叶える手段になると信じて。罵ののしられようと、希望を抱いだいて。たくさんの部下のために、仕事を確保しようとして……」

　カイエの澄んだ瞳が切なげに光る。

「そうですよね……博士」

　バートは気づいた。カイエはただ説得しているのではない。自分の境遇に昔の博士を重ねているのだと。世界の底辺から月を目指す自分に。

「そんな過去を乗り越えて、有人軌道飛行を達成して、長年の宿願を果たしたんですよね……？」

　情のこもったカイエに、クラウス博士は声をかすれさせる。

「だとしたら、なんだね」

「ですから……」

「博士」

　バートは辛抱ならず、声を上げる。

「みんなで同じ夢を見ませんか」

　明日は必ず来る。その想いを共有したい。

　クラウス博士は嘆息し、無言で二度、三度と頷うなずく。

　カイエが両手を胸の前で組み、懇願する。

「『月軌道ランデヴー方式』、再検討していただけませんか」

　バートはまっすぐな眼まな差ざしを向ける。

「お願いします」

　観衆が息を詰めるなか、クラウス博士は軽く咳せき払ばらいをすると、やれやれと後頭部を掻かく。

「再検討する価値はあるかもしれませんな」

「ありがとうございます！」

　約束を取り付け、バートは身体からだの芯が熱くなる。満面の笑みを

浮かべるカイエと溢あふれるよろこびを分かち合いたいが、ステージ上なので自制する。
　何より、あくまでも再検討であって、認められたわけではない。キッシング長官は物言いたげな顔でわざとらしく溜め息いきを吐つき、科学諮し問もん委員は不満をあらわに司会役を呼び寄せた。
　その後すぐ司会役によって月面着陸方式に関する議論は打ち切られ、ランデヴー技術や宇宙遊泳に関するプロジェクトの方針確認をして、『有人月面着陸について』のセッションは幕を閉じた。

　登壇者は一度ステージを降り、質疑応答まで一〇分間の休憩となる。
　質疑応答は基本的にセッションと同じ面子メンツだが、州知事と科学諮問委員は危機対応もあって参加せず、航空機メーカーも一社を残して会場を去った。
　控え室に戻ると、皆はいっせいにテレビに群がり、危機の状況を確認する。
　しかし好転の兆きざしはない。共和国船籍の貨物船が封鎖海域に接近している状況を、ニュースキャスターは使命感を持って執しつ拗ように不安を煽あおる。
〈このままでは、一週間以内に核戦争がはじまります。いえ、訂正します。前触れもなくミサイルが飛んでくる可能性も捨てきれません――〉
　航空機メーカーの重役が軍用機増産の相談をする傍かたわらで、バートとカイエはキッシング長官に手書きの資料を突きつけられる。
「予定にない提案を勝手にするなど、どういうつもりだ」
「申し訳ありません。ですが、僕たちは僕たちの考える最良の方針を示しただけです」
「私も彼と同じ思いです」
「論点をずらすな。なぜ事前に伝えなかった」

先に伝えれば却下されたはずです、とは言えない。遠目に眺めているジェニファーは苦笑いしつつこっそり親指を立てたが、助けには来ない。

怒り心頭のキッシング長官にガミガミ責められていると、クラウス博士が歩み寄ってきた。

「まあまあ。手荒なやり方だったとはいえ、彼と彼女の意見には納得できる点も多い。それに、おたくが『新型宇宙船の開発は不可能』とおっしゃるのであれば、やむを得ないでしょう」

チクリと刺されたキッシング長官は露骨に口元を歪ゆがませる。

「では、博士は『月軌道ランデヴー方式』を採用するつもりか？」

「数ある選択肢のなかから最適解を探すだけです」

軽く受け流したクラウス博士はバートとカイエに面と向き合う。

「同じ夢ね……例の『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』かな」

「はい……！」

ふたりが声を揃そろえて同時に頷うなずくと、クラウス博士は目尻の皺しわを深くして微笑を浮かべる。

「『今日の不可能は、明日は可能になる』。この言葉を遺した科学者に私は影響を受けて、宇宙旅行の夢を見た。君たちが生まれるよりずっと前だが、そのときの気持ちを久しぶりに思い出したよ」

そう語る博士の瞳ひとみは少年のようにきらきらと輝いていたが、ふっと曇りが走る。

「宙そらに近づくために手を出した物には、少々悔いているがね」

戦略ミサイルだろうとバートは察するが触れられない。カイエも口を結んでいる。

するとクラウス博士は空気を変えるようにパンパンと手を叩たたく。

「さて、『月軌道ランデヴー方式』の件だが……手書きではない資料を見て、可否を判断しましょう」

「研究所に戻ったらすぐに作成します！」
　そう意気込んだバートの視界に、テレビに映るミサイル射程図が飛び込んできた。
　真っ赤に塗られた危険区域に指定されているライカ・クレセント。
　背筋がスーッと冷える。
　クラウス博士は額に手を当て、苦々しく唸うなる。
　カイエがぽそっとつぶやく。
「うちの研究所、どういう状況なんだろう……」
　キッシング長官は物憂げにぼやく。
「避難用具を手元に置き、シェルターに逃げられる態勢を取って職務にあたっているそうだ」
　表情がズンと沈んだカイエに、バートが声をかける。
「心配だね……」
　カイエは気丈に首を振る。
「ええ……。でも、私たちは私たちにできることをやりましょう」
「うん……そうするしかない」
　運命に身を委ねるだけなんて、ひたすらもどかしい。しかし、世界を変えるような力は持っていない。
　しばらく無言で報道を見ていると、レフとイリナ、そしてサンダンシアがそれぞれのお付きのスタッフとともにやってきた。皆、浮かない顔をしている。
　司会役が質疑応答の開始を告げ、登壇者は舞台袖そでへぞろぞろと移動する。
　バートは気持ちを切り替え、口元に無理やり微ほほ笑えみを作る。観衆に対して元気のない姿を見せるわけにはいかない。
　その移動中、バートはレフにそっと声をかけられる。
「先ほどのセッション、すばらしい提案でした」

「あ、光栄です……」
「おふたりの戦う姿勢に、この国の底力を感じました。イリナもこっそり応援していましたよ」
「ありがとうございます……！」
　認めてもらえて、重かった心が少しだけ軽くなった。
　するとレフはさらに小声で言う。
「女王陛下も感心してらっしゃいました」
「そうなんですか……？」
　昨夜、サンダンシアと中庭で会ったとき、月軌道ランデヴー方式を提案するつもりはないと言ったことを思い出す。結果的に女王まで騙だました形になってしまったが、感心していたというのを聞いて安あん堵どする。
　しかし、きっと驚かれただろう。バートは後ろを歩いているサンダンシアをチラと振り返る。
　地球の重力に負けそうなほど弱々しい足取りの彼女は、背負いきれない重荷に潰つぶされているようだ。
　ふと、彼女が昨夜に語った言葉が脳裏をよぎる。
　王室の規則で発言できないが、共和国とうまくいけばいいと思っていると。
　その願いは今や宇宙の塵ちりとなる寸前だ。
　バートは心から思う。
　本当にうまくいってほしいと。

　カンファレンスの最後を飾る質疑応答がはじまる。まずはスペシャルゲストであるサンダンシア、レフとイリナの挨あい拶さつがある。バートたちは舞台袖そでに控え、三人がステージに出るのを見送る。
　登場を待ち望んでいた観衆は温かい拍手で迎える。

ついさっきまで陰いん鬱うつさを纏まとっていたサンダンシアだが、大衆の面前に立ったときにはやわらかな微ほほ笑えみを湛たたえており、朗々と挨拶をする。

「皆さん、本日はお越しくださり、ありがとうございます」

原稿どおりの模範的な挨拶。核戦争の危機にはいっさい触れない。しかし、時折声が揺れて、隠しきれない心苦しさが表れる。

「この二一世紀博覧会は、宇宙開発のもたらす……明るい未来に満ちています」

バートは昨夜のサンダンシアを思い出す。宇宙旅行について話したときの純粋な瞳ひとみを。コンピューターについてカイエに夢中で訊たずねる様子を。その姿は一国の君主ではなく、好奇心に溢あふれる一八歳の少女だった。まだ若い彼女は、世界が危機に瀕ひんしている今、いったいどんな想いを抱かかえているのだろうか。

舞台袖からサンダンシアを見つめる王室秘書官は険しい顔つきで、女王を守護する騎士の威厳を放つ。祖父と孫ほどの年齢差だが、娘を見守る思いなのかもしれない。

挨拶を終えたサンダンシアは、質疑応答では聞き役となり、来場者からの質問には答えられない旨を告げると、レフとイリナに交代する。

まずはレフがマイクを取り、一礼する。

クラウス博士のときのようなヤジを飛ばす輩やからはおらず、バートは安あん堵どする。しかし、昨日のような英雄を歓迎する熱気もない。観衆は共和国のふたりが何をしゃべるのか聞き逃すまいと構えている。

緊迫した空気のなか、レフは笑顔で明るく話しはじめる。

「こんにちは、皆さん。お会いできてうれしいです」

連合王国各地で何度も繰り返されたおなじみの挨あい拶さつをして、すばらしい万博であると感想を述べる。今起きている危機についてはいっさい触れない。次のイリナの挨拶も定型文を並べただけだ。

観衆からは落胆の溜め息いきが漏れる。

レフとイリナは軍人のように姿勢を正し、口を閉ざす。ふたりの名を冠したミサイル輸送船が封鎖海域へ近づいているのだから、ひと言くらいは謝罪したいに違いない。しかし国家の都合で話せないのだろう。舞台袖そでては〔運送屋〕も用心深く目を光らせている。

三人の挨拶が終わると、バートたちは司会役に招かれてステージに出ていき、サンダンシアを中心にして半円状に着席する。

左端にカイエ、隣にバート。さらにその隣にイリナ、レフと座る。半円右側にはクラウス博士やキッシング長官といった重鎮が腰かける。

司会役が質疑応答における注意点を観衆に伝える。

「時間の都合もありますので、質問は三名までとさせていただきます」

一〇〇〇名近い来場者数のわりに少ないが、今日カンファレンスを開いた目的は国民を安心させるためで、主催者側からすれば妥当な人数と言える。そんな裏事情を知らない観衆にとっては不満だろうが。

司会役が一段と声を強める。

「また、質問の内容は、宇宙に関することのみとなります。それ以外の質問は退席していただく場合もございます」

客席のあちこちからざわめきが聞こえる。会場を出ていく者までいる。

その反応にバートは少しがっかりするが、自分自身、ミサイルの状況が心配で仕方ないので複雑な気持ちになる。ひとときでも危機を忘れられるくらい、質疑応答が盛り上がればいいのだけれど。

「それではスペシャルプログラムの質疑応答をはじめます」

司会役が開始を宣言し、客席のブロックごとに挙手を求める。

すると、勢いよく無数の手が上がる。

誰を当てるか悩んだ司会役は「二一世紀博覧会なので、二一世紀の主役になる子どもを優先します」と、目の前に座っていた人間の少女を指

す。
　まだ小学校低学年くらいの少女は幼い声で言う。
「私は動物が大好きで、将来は動物園をやりたいんですけど、宇宙飛行士の代わりに動物で実験するのはかわいそうだと思います！」
　質問ではなく非難だが、純粋でかわいらしい少女に客席から拍手が送られる。
　とはいえ、技術的な問いではないだけに回答が難しい。
　司会役は苦笑いを堪こらえ、登壇者に振る。
「いかがでしょうか？　クラウス博士」
　指名を逃れたバートが安あん堵どすると同時に、カイエも小さく息を吐いた。司会役がクラウス博士を当てたのは、彼が以前子ども向けの科学番組に出演していたのでいけると踏んだのだろう。
　その期待に応えるように、クラウス博士は優しい眼まな差ざしで答える。
「なぜ動物を使うか。それは難しい問題です。そして、それを疑問に感じるのはとても良いことです。では逆にあなたに質問しましょう。毛虫は好きですか？」
「嫌い。気持ち悪いし毒があるから」
「では、毛虫は実験に使ってもよいのですかな？」
「え？　うーん……」
　少女は考え込んでしまった。
　そのとき、レフとイリナが目を合わせてかすかに頬ほおをゆるめた。イリナはどことなく切なげで、瞳ひとみが少し潤んでいるようだ。そんな彼女を見たバートの脳裏に、真偽不明の妙な噂うわさが蘇よみがえる。
　―吸血鬼の彼女は、じつは実験体だった。
　嘘うそでも平気で掲載するタブロイド紙『アーナックニューズ』の記

事だ。以前カイエと「いくら共和国でも、そこまで非人道的な実験はしないのでは？」と話したが、今のイリナを見て、まさかと。

　万が一、宇宙開発競争に勝つために異常な実験をしていたらと思うと、心が乾いてかさかさしてくる。共和国が鉄のカーテンで秘ひ匿とくするのは、やましい事情があるのではないかと。

「―では、難しい顔で考え込んでいるバート・ファイフィールド氏」

「え」

　心臓がドクンと跳ねる。いきなり回答者に指名された。毛虫について考えていると誤解されたのか。

「動物実験についてどう思われますか？」

「そ、そうですね……」

　メガネを直しつつ必死に考えるが良い回答を思いつかず、沈黙が怖いので思いつくままにしゃべる。

「えー……僕は、動物にも、宇宙飛行士の皆さんに対しても、申し訳なく思っています。安全な地上から宙そらを見上げているだけなのですから。……ですが、その……僕がもし川底にいる泥ナマズに生まれたとしたら、自ら進んで実験体になったかもしれません。水面みなもに映る太陽や月を見て、きっと宙そらを飛びたいと思ったはずです……」

　少女は納得したのか、こくりと頷うなずく。観衆からも雨だれのような拍手が起こり、最悪の失態は免れた。ほっとバートは胸をなで下ろしつつ、気がかりだったイリナを横目に確認する。

　と、彼女の薄うす紅べにの瞳ひとみと視線がぶつかった。ドキリとなるバートだが、イリナはツンと取り澄まして、すっと目を逸そらす。

　今のはどういう反応だろうと疑問に思うが、質疑応答と無関係なことを考えているとまた誤解を受けそうなので、気を引き締める。

　次の質問者は、生徒会長を務めていそうな、理知的な雰囲気の少年だ。

「レフさんとイリナさんにお訊たずねします」
「はい、なんでしょうか」
　にこやかに質問を待つレフに、理知的な少年が問う。
「共和国のランデヴーが偽装であるという証拠が出ていますが、真実はどうなのですか？」
　ズバッと切り込んだ。
　しかしレフは動じず、申し訳なさそうに頭を下げる。
「祖国の公式発表が答えです」
「すみませんが、私からも言えることはありません」
　イリナもそっけない。鉄のカーテンは徹底している。舞台袖そでででは〔運送屋〕の女性が面倒臭そうに腕組みする。詮せん索さくされて不愉快なのだろう。
　質問者の少年に見解を求められたクラウス博士とキッシング長官は、偽装飛行の推測をつらつらと述べる。だが、共和国のふたりは反論もせず、黙っている。
　史上初のランデヴーが偽装か否いなかで争われるが、一番の被害者は搭乗員のローザ・プレヴィツカヤだ。宇宙を飛んだのは事実なのに、『人間女性初の宇宙飛行士』という栄光に泥を塗られてしまった。もしプロパガンダに利用されなければ、彼女は英雄のひとりとして胸を張って表舞台に立てたはずだ。
　レフとイリナの宇宙飛行は疑わないが、彼らの著書である『宇宙への旅路』で描かれた共和国の風景はどこまでが真実なのか。
　宇宙開発競争は両国の技術を磨くことには貢献する。けれど、相手を貶おとしめ、自分だけが勝者であろうとする考えは誰も幸せにしていない。
「──コンピューター技術者の視点からはどうでしょうか、カイエ・スカーレット氏」

司会者に指名されたカイエが答える。
「ランデヴーの真偽については、さまざまなデータを見て各々が判断するしかないと思います。それよりも、このような疑惑が生まれる事態が、この先なくなることを願います」
カイエの視線はレフやイリナではなく、舞台袖そでの〔運送屋〕の女性に向いている。その〔運送屋〕は共和国の職員に耳元で何やらささやかれると、冷たい視線を残して奥へ去っていった。
危機に進展があったのか気になるが、今は確認もできない。〔運送屋〕の隣に立っていた王室秘書官は相変わらず厳しい目つきでサンダンシアを見つめている。
そのサンダンシアはステージの中央に座ったまま、ひとことも発していない。誰かから質問を投げかけられることはなく、自分から口を挟むこともない。ただ質疑応答を見守る彼女は「公おおやけの場で発言してはいけない」という王室の規則を遵守している。そしてその姿は鎖に縛られているようでもあった。
次は最後の質問者となる。
司会役は指名のバランスを考えたのか「新血種族の方、どなたかいませんか」と訊たずねる。しかし、ごく少数いる新血種族は誰も手を挙げない。周りを人間に囲まれたなかで、しかも宇宙開発について質問するのはかなりのプレッシャーだろう。
結局、誰も挙手しなかった。
司会役は新血種族をあきらめて、両手を天に突き上げてアピールする小太りの少年を指す。
バートはその少年に見覚えがあった。昨日、惑星クッキーを手に『ＡＮＳＡに入る』と宣言した、宇宙クラブの少年だ。カイエも気づいたらしく「あっ」と声を漏らす。
当てられた少年は勢いよく立ち上がって早口でまくし立てる。

「月への競争で共和国を倒せますか!?」
　あまりにもストレートでバートは面食らう。子どもらしい無む邪じや気きな質問だが、この答えを知りたい観衆は多いだろう。
　敵役のレフとイリナは苦笑を口元に漂わせる。一方、連合王国側の登壇者は一様に渋い顔つきになる。倒すどころか、成果ではまだまだ劣っているのだから。
　司会役に促されたキッシング長官は頬ほおを引きつらせながらも、笑顔を作って答える。
「倒せるように努力をしているところだよ」
　クラウス博士も頷うなずく。
「勝利のために試行錯誤をしています」
　航空機メーカーの職員も同様。
「レースに負けるつもりはない」
　揃そろいも揃って競争を肯定する。彼らはいったい何を大目標にしているのか。
　深い霧雨のようなもやもやとした違和感が腹に溜たまっていく。
　月に着陸して銀河の果てを探索することと、共和国を完膚なきまでに叩たたきのめすことと、どちらを優先し、どちらを成し遂げたいのだ。
　著名な科学者の意思を聞いて、少年は鼻息を荒くする。観衆はうんうんと同意して頷く。ミサイル危機のせいで、敵国という意識がいっそう高まっているのだろう。レフとイリナは心苦しそうにうつむく。サンダンシアは物もの憂うげに視線を落とし、腿ももの上で拳こぶしを軽く握りしめる。共同開発を内心では肯定しているはずの彼女は今の状況を望んでいない。
　カイエはバートに迷いの視線を送ってくる。どうしよう、と。
　その視線にバートは強く頷うなずく。世界が終わるかもしれない今、言いたいことを言わずに後悔はしたくない。

　そしてバートは決意を固め、少年に訊たずねる。
「どうして共和国に勝たなければならないのかな？」
　少年は一瞬きょとんとするが、純粋な目で答える。
「だって月を一番に征服しないと、共和国に月面ミサイル基地を造られて、宇宙から支配されるから」
　昨日までなら冗談として笑っていられたが、今や真実味を帯びていて、観衆も絶句する。たしかに、先に月へ行かれたら何をされるかわからない恐怖はある。
　しかし、競争で勝たなくても解決する方法はある。
　それは、除外されてしまったセッション。
『六、宇宙科学の共同開発』
　今、議論すべきはこの内容だ。
　月面着陸方式につづいて予定外の議題をぶち上げることになるが、誰かが切り出さねば永遠に形にならない。
　強い意志を胸に、バートは少年に優しく語りかける。
「もし、連合王国と共和国がいっしょに宇宙船やロケットを開発して、二か国の宇宙飛行士がいっしょに月へ行ったらどう？　それなら、両方一番になれるよね？」
　思わぬ問いかけに、少年は戸惑ったように首をかしげる。
「そうだけど……」
　競争を放棄する案を推したバートはキッシング長官にギロリと睨にらまれる。
　だが、ひるまない。
　間違ったことは言っていない。
「どうかな？」
　あらためてバートが少年に訊きくと、少年は顔を曇らせる。
「いっしょになんて無理だと思います。だって、核ミサイルを撃とうと

してる国だし。ミサイルも運んでるって……」
　深刻な危機が思い起こされ、会場に異常な緊張が走る。涙目になった少年がバートにすがるように訴える。
「本当に撃ってくるんですか!?　どうなるんですか!?」
　まずい。少年を追い込んでしまった。
　バートがなだめようとすると、慌てて司会役が割って入る。
「これを持ちまして、質疑応答は終わりとします！」
「待ってください！」
　咄とつ嗟さにバートは立ち上がり、議論の継続を訴える。
「まだ時間はあるはずです！」
　ここで終わらせてはいけない。
　それでは何も解決しない。
　少年の沈んだ心も救わないといけない。
　しかし司会役は幕を下ろそうとする。
「時間の問題ではなくてですね……」
「宇宙開発の話をします！」
　大声で遮さえぎり、バートは登壇者全員に問う。
「史上初の月旅行が、どうして競争になってしまうんですか!?」
　皆、ぴくりと顔を上げた。
　少し間を置き、バートは熱心な口調で説く。
「たしかに、地上には積み重なった歴史や、国同士のしがらみがあります。ですが、宇宙は誰のものでもありません。残念ながら、今回は共同開発のセッションが中止になってしまいましたが、あらためて話し合いの場を設けるべきだと思います」
「共同開発など無理だろう」
　キッシング長官に冷たく一いつ蹴しゆうされた。
　バートは食い下がる。

「現在の両国が緊張状態にあるからですか？」
「違う。以前からの問題だ。宇宙開発と軍事開発は密接に結びつきすぎている。実際、協定が締結済みの分野ですら──たとえば宇宙医学でさえ、いっさい動いていない」
「それは、これから改善すべき課題だと思います」
　座したままのキッシング長官は上目にバートを睨にらみ、頑として譲らない。
「共和国が鉄のカーテンを開けてくれない限り、どうにもならない。もしこちらが心を開いて技術提供しても、ランデヴーを偽装する秘密主義者たちに一方的に盗み取られるだけだ」
　ひどい言いようだ。だが共和国の秘ひ匿とくが行き過ぎているのは事実だ。もはや諜ちよう報ほう合戦になっていて、歩み寄ることもできない。
　レフとイリナは目を伏せて唇を噛かんでいる。何を言っても言い訳になってしまうから、口を閉ざすしかないのだろうか。
　そんなふたりのつらそうな様子を見ていたカイエがたまらず擁護する。
「レフさんとイリナさんは世界中の人々と交流し、こうして万博にも来てくださいました。一概に否定するのは良くないと思います」
　キッシング長官はレフとイリナを一いち瞥べつすると、うんざりと鼻先をかく。
「無論、個々人ではそうだが。ともかく、共和国と宇宙開発をするなど、私には想像もできない。月面着陸ひとつ取ってみても、同じ国民ですら相容れない壁があるのだからな」
　水を向けられたクラウス博士は静かに目をつむり、発言を拒否する。そして拒絶の態度を硬化させるキッシング長官に、バートは胸中に鬱うつ積せきしたいらだちをぶつける。

「人間と新血種族はわかり合えない。それがこの国の常識でした。ですが、私は新血種族の皆さんと仲良くやっています。理解しようと努力しています。それに比べて、同じ国の人間同士で相容れないと言うのは、互いの意見を尊重せず、個人的な利益や名誉を求め、プライドを守ろうとして意地を張っているからではないですか？」
「なんだと？」
　こんなふうに公然と上司や組織を非難すれば左遷されるかもしれない。しかし爪つめ痕あとを残せるのならかまわない。今日という日を逃したら、大勢の人の前で言う機会は二度とないかもしれないのだから。
　心配そうな目を向けるカイエを見返し、大丈夫だと頷うなずく。
　Ｄルームには優秀な人材がたくさんいる。自分がいなくても問題はない。
　それより大事なのは、皆が一丸になること。
　そして、ＡＮＳＡに入ろうという、これからの時代を生きる少年に想いを伝えることだ。現場で働く一技術者がどう考えているのか、真実を知ってほしい。
　だからバートは決然と訴える。
「税金の無駄遣いが批判され、予算が不足しているなか、我々は失敗を重ねています。たとえば、何年も前に月面撮影を成功させた共和国に追いつこうとしていますが、共同で月を目指せれば、この無駄はなくせるんです」
　キッシング長官にものすごい眼まな差ざしで睨にらまれる。
「敗北を認めて、教えを乞えというのか？」
「ですから、勝ち負けの問題ではありません」
「君とは根本的に相容れない。宇宙の果てまでいっても平行線だろう」
「そんなことは……」
「妥協をよしとする者は組織を腐らせる」

「っ……」
　妥協ではない。
　反論したいが、言い争いには慣れていないので、心が折れそうになり、手も声も震えてくる。
　しかし、譲れないものがある。
　左手小指のかさぶたを親指で触る。
　同じ夢を持つ皆で月へ行く。
　これは、その誓いを守るための闘いだ。
　バートは気持ちを奮い立たせ、捨て身で意見を投げる。
「一方的に教えを乞うのではありません。互いに欠けているものを補い合うことはできないのでしょうか？　ＡＮＳＡ本部で開かれた会議の議事録にありました。『共和国は足りない技術を誤ご魔ま化かすために誇大広告をしている』と。共和国も困難に陥っているはずです。宇宙飛行士たちを英雄に祭り上げて、言葉を封じて……！」
　ひどい状況に置かれているレフとイリナの顔が見られない。きっと居心地は最悪だろう。早く舞台を降りたいに違いない。
　それでも、登壇者と会場の皆に訴える。
　宇宙開発の現状を。
　夢が夢で終わってしまうかもしれない危機を。
「このまま両国が無駄を重ねたら、どちらかの夢が潰ついえるか、あるいは共倒れになってしまうかもしれません！　『囚とらわれの島』の危機があろうとなかろうと、考え直す時期にきているのではないでしょうか？」
「まったく馬鹿馬鹿しい」
　キッシング長官は額ひたいに手を当てて大げさに溜ため息いきを吐つく。
「君の意見は科学者の夢想であり理想論だ。現実を見ろ。我々は個人の

金で研究開発をしているのではない。ＡＮＳＡという政府機関の一員であり、国民の血税で成り立っている」
「それは……！」
　バートは返す言葉を必死になって探す。
　しかし、見つからない。
　山積みになった問題の何をどう解けばいいのだろうか。
　棒立ちになったバートは拳こぶしを握り、血が出そうなほど唇を噛みしめる。
　重い沈黙が横たわる。
　登壇者たちは口をつぐんでいる。
　サンダンシアがバートに切なげな視線を投げかけてくるが、正面から受け止められない。質問者の少年は茫ぼう然ぜん自失となっている。自分の問いかけが大ごとになってしまったという責任を感じているのだろう。
　弱り切った様子の司会役がマイクを口に近づける。答えは出ないまま、質疑応答が終わってしまう。
　バートが絶望に落ちかけた、そのとき。
　カイエがすっと立ち上がり、少年に話しかける。
「あなたの質問は、共和国に勝てるかだったよね？」
「は、はい……」
「私も、勝ち負けよりも、月に行くことが大事だと思うの」
「ごめんなさい……」
　しゅんと縮こまる少年をカイエは慌てて励ます。
「あっ、謝らないで。私とバートがそう思ってるだけだから」
「はい……」
「ところで、あなたは宇宙クラブで活動していて、将来ＡＮＳＡに入りたかったんだよね？」

「そうです……！」
　暗くなっていた少年の表情がパッと晴れた。カイエが覚えていて、うれしかったのだろう。
「組織とか国家とか、難しい話ばかりで困っちゃった？」
「はい、ちょっと……」
　照れて頭を掻かく少年にカイエは穏やかに微ほほ笑えみかける。
「ところで昨日、『惑星クッキー』を食べてたよね」
「え。あ、おいしかったです」
「じゃあ、たとえば、月をクッキーだと考えてみるのはどう？」
「え？」
　突然の申し出に少年は困惑する。少年だけでなく、ほかの登壇者も訝いぶかしがる。
「あなたの名前は？」
「ビルです」
「オッケー、ビル君。座って、目を閉じて」
「わかりました……」
　言われたとおりに少年は腰掛け、目をつむる。
　そしてカイエはかしこまった声で話しはじめる。
「―ビル君、こんにちは。現在、一九六二年、五月一三日、午前一一時。こちらはライカ・クレセントの管制室です。航路を惑星クッキーの旅にセットします」
『スペース・フライヤー』のアナウンスのものまねだ。
「三八万キロ先をご覧ください。黄金色のバタークッキーが浮かんでいます。とてもおいしそうですね」
　観衆がくすくすと笑う。
　バートはカイエとＵＦＯ観測をしたときのことを思い出す。バタークッキーを天にかざし「お菓子よりも小さく見える月が、私たちを惹ひ

きつける」と語った彼女。
　あのときはミサイル危機など頭の片隅にもなく、ただ月面着陸方式について悩んでいた。
　カイエは会場全体に向けて語りかける。
「手の届かない場所にあるクッキーが食べたい。それがこの星に生きる皆さんの、昔からの夢でした。いえ、バタークッキーだけではありません。ストロベリークッキー、巨大なマーブル模様のクッキー。輪っかのついたクッキー。星の形をした色とりどりの砂糖菓子もたくさん」
　少年は甘い宇宙を想像したのだろうか、唇を舌でペロリと舐める。
　するとカイエは人差し指を頬ほおに当て、困ったような声を出す。
「ところが、食べたいけれど、食べに行く方法がわかりません。それにお菓子はたくさんあって、ひとりで食べ切れる量ではないです。そこで、同じ食いしん坊の人に『食べに行く方法をいっしょに考えよう』と提案します」
　そう言って、カイエはレフとイリナに視線を移し、片目をパチッとつむる。話を向けられたふたりは表情を和らげ、答える代わりにしっかりと頷うなずく。
　いつしか、会場の皆がカイエの紡ぐ星の童話に耳を傾けていた。
「ビル君、おめでとうございます。協力の結果、見事、バタークッキーに到達しました。成功を祝って、クッキーを分け合って食べます。さて、どんな味ですか？」
「甘い？」
「ええ、とても甘くておいしいですね。それでは今度はストロベリークッキーに行こうと相談します。バタークッキーを起点に、未知のクッキーや砂糖菓子を探す旅に出発です。そうして、みんなでお菓子を食べながら探険するうちに、新しいエネルギーを見つけたり、難病の治し方を発明したり、もしかしたら、私たちがどうやって生まれたかもわかる

かもしれません」
　サンダンシアはまばたきせずにカイエを見つめている。頬に差していた影は薄れ、瞳ひとみには昨夜見せた少女の純粋さを湛たたえている。
「それでは航路を地球にセットします。ご搭乗ありがとうございました」
　惑星クッキーの旅を終えたカイエはふだんの調子に戻り、少年に話しかける。
「ビル君、どうかな？　相手を倒して独り占めするよりもよくない？」
　少年は少し考えて頷く。
「うん、そうなるといいかも……」
「あなたがＡＮＳＡに入る未来には、きっとそうなっているわ。ねぇ、バート・ファイフィールド氏？」
　カイエはわざとらしくかしこまってバートに話を振った。
「そうだな……ＵＦＯが強奪したくなるような最高のクッキーを用意して、君を待っているよ」
「ＵＦＯ！　楽しみです！」
　少年が快活に答えると、バートはバトンを回す。
「そうですよね、クラウス博士？」
　名指しされたクラウス博士はひとつ唸うなる。
「私は甘ったるいお菓子は好きではないので、ハンバーガーでも探しに行きましょうか。かの国の食いしん坊たちにはハンバーガー野郎と呼ばれていますから」
　観衆の拍手を受けたクラウス博士はとぼけた声を出す。
「では、キッシング長官は宇宙で何を食べますか」
　キッシング長官は鼻で笑う。
「ベースボールの球だ」
　観衆から笑い声が漏れ、陰いん鬱うつだった会場に少しだけ光が差し

込む。そして、その光は国を超えて伝でん播ぱする。
「―イリナはパンケーキだったかな」
　ずっと黙っていたレフが口を開いた。
　突然名前を出されて焦るイリナ。
「え!?　は？　パン……!?」
　レフはニヤニヤとイリナを見る。
「月がパンケーキで、ロケットが人にん参じん。アーニャから聞いたんだけど」
「それはアーニャが勝手に勘違いしただけだからっ！」
「そっか、ごめんごめん。じゃあ何にする？」
「えーっと……イクラよ」
「イクラ？」
「丸いじゃない」
「ずいぶんちっちゃいな。ぷちっと潰つぶれそうだけど」
「潰さないわよ！　そういうレフは何よ」
　ぷんぷんするイリナをレフは手のひらで制し、皆に向けて言う。
「私はプリャーニクを―ええと、祖国で広く食べられている、丸い糖蜜菓子です。フライパンで焼くんですが、子どもの頃、母親によく作ってもらってました」
　その菓子をバートは知らないが、きっと素朴な味がするのだろう。
　レフはそのまま席を立ち、観衆に向けて明るく話しかける。
「宇宙から皆さんの国を見たとき、美しい自然は見えましたが、住んでいる皆さんの顔までは見えませんでした。ですが、今回の旅行をつうじて、クッキーやハンバーガーを食べて、ベースボールを見て、皆さんの息吹を肌で感じられました！　ありがとうございます！」
　レフが深々とお辞儀をすると、観衆はあたたかい拍手を送る。
　そして頭を上げたレフはまっすぐに背筋を伸ばす。透きとおった藍あ

い色いろの瞳ひとみは深い色を帯びる。その英雄たる凛りゞりしさは、かつて世界三〇億人を相手にした記念式典で見せた、気高い宇宙飛行士の姿だ。
「皆さん。我が祖国はすぐれた開発力を持っていますが、連合王国にもすばらしい技術があるようです。そこでもし、互いの足りない部分を補い、尊重し、手を取り合えばどうなるでしょうか？」
　ひと言ずつ噛かみしめるように語るレフの横顔を見て、バートは胸が熱くなる。
　レフはただ前を見て、拳こぶしを胸に押し当て、力強く訴える。
「私には想像できます。クッキーとプリャーニクを合わせた、とてもおいしいお菓子ができあがると。私はそれをぜひ食べてみたい。皆さんといっしょに食べてみたいと思います！　いつかそんな未来が訪れると期待しています！」
　彼なりに言える範囲で、共同開発に同意してくれた。スペースタワーでイリナが言っていた『雪解けのレフ』。彼の切なる想いが伝わってきて、バートは駆け寄って握手したくなるが、ぐっと堪こらえる。
　イリナも立ち上がり、レフに見入っていた少年に話しかける。
「共和国のこと嫌いかもしれないけど、それでかまわないわ。私もべつに好きじゃないから」
　爆弾発言に会場がざわつく。
「おいっ……」
　レフが小声で注意するが、イリナはしれっと肩をすくめる。
「お菓子の話よ。炭酸水や果実酒は好きだけど、プリャーニクはナツメグやシナモンが臭いから苦手」
「はいはい、そうだね……」
　そしてイリナはあらためて少年に言う。
「ひとつだけ覚えておいて。ロケットと人にん参じんは別物だからね。

ロケットは武器じゃなくて夢を運ぶもの。人参は大嫌い。あんなもの海の藻も屑くずになればいいわ」

直截的な言葉にせずとも、自分たちの名を冠したミサイル運搬船への非難だと会場にいる者たちにはわかる。客席のそこかしこで拍手や歓声が起き、口笛も響く。

してやったりとほくそ笑むイリナ。レフはやれやれと額ひたいに手を置く。

司会役は収拾がつかなくなる前に今度こそ締めようと、大声でアナウンスをする。

「これにて質疑応答を終わります！　女王陛下、閉幕のご挨あい拶さつをお願いします！」

強引に打ち切られ、皆は起立して姿勢を正す。

促されたサンダンシアはゆっくりと立ち上がる。

結局、彼女はいっさい議論に参加していない。最初に当たり障さわりのない挨拶をしただけだ。心の内では言いたいことも溜たまっているはずだが、王室の規則で縛られているのであればバートに解決できる問題ではない。

これからする挨拶も、用意されたものを述べるだけだろう。

サンダンシアはステージの中央に立つと、ひどく強こわ張ばった顔で挨拶をはじめる。

「皆さん、本日はありがとうございました……」

それだけ言うと、彼女はマイクを握りしめたまま、その場に立ち尽くした。

どうしたのだろうか。これで終わりではないだろう。バートが疑問に思うのと同じで、観衆もボソボソとささやきはじめる。

司会者が「陛下……？」と訊たずねると、サンダンシアは目をまたたかせた。そしてわずかに頭を下げると、挨あい拶さつを再開する。

「すみません、あの……皆さんご存じだと思いますが、アーナック連合王国の君主は、公おおやけの場で政治について述べることは禁じられています。それとは別に、宇宙開発についても話さないように言われています……」

声が弱々しく、微ほほ笑えみのひとつもない。

開幕の挨拶に比べてどこかおかしい。

舞台袖そでで王室秘書官に科学諮し問もん委員がひそひそ耳打ちしているのをバートは見る。もしかして、危機について重大な発表でもあるのだろうか。

サンダンシアは横目で舞台袖を確認すると、おどおどと怯おびえた挨拶を続ける。

「ところで……宇宙開発を政治に利用する人たちもいますが、私は宇宙開発は政治ではないと思います。えっと、会場の皆さん、宇宙開発は政治ではないですよね……？」

聴衆の七割ほどが拍手で同意を示す。

「ありがとうございます……」

肯定の反応があって安心したのか、サンダンシアは安あん堵どの溜ため息いきを吐ついた。そして、小さな手でマイクをぎゅっと握り直すと、決然たる瞳ひとみをあげた。

「宇宙開発競争について……連合王国の君主としては、『我が国は世界一になるべし』と言うべきでしょう。ですが私は……争いはもうたくさんです」

信じがたい発言に会場全体がざわめく。バートも耳を疑った。

狼狽うろたえた司会役が舞台袖の王室秘書官を見やる。するとサンダンシアは彼らに強い視線を投げ、つづけさせてと訴える。そんな女王に対して王室秘書官は否いなと厳しく射抜く。

しかし、サンダンシアは意に介さず、観衆に正面から向き合う。

「私は周りにいる大人に比べて知識がなくて愚かです。君主としての経験も不足しています。ですが……正しいことが何かはわかります。たとえば、先ほどバートさんとカイエさんが提唱された両国での共同開発は、皆さんも希望を抱いだいたのではないでしょうか？　それは困難かもしれません。けれど昨夜、私はおふたりと話し、挑戦する勇気の大切さを学びました。バートさん、カイエさん、ありがとうございます」

サンダンシアは胸に手を置いて軽く一礼し、感謝の意を示す。バートとカイエは慌てて姿勢を正し、深々と頭を下げる。

そしてサンダンシアは重鎮の登壇者たちに訴える。

「ですから、もし、共同で月を目指すという協定が提案されるなら、私はよろこんで承認します」

この挨拶はもはや声明だ。

制止しようと一時はステージに出かけた王室秘書官は足を止めて女王を見守っている。彼の耳元では不快な顔をした科学諮し問もん委員が何か言っているが相手にせず、頑として首を振らない。サンダンシアの行為は王室の規則を逸脱しているはずだが、ここは彼女の意思を優先させるようだ。

鎖を解いて自由を得たサンダンシアはしっかりとした口調で、溜ため込んでいた考えを明かしてゆく。

「少し前まで、宇宙は神の領域でした。それが今では月面着陸を目指しています。ランデヴーに続いて、宇宙遊泳もすると聞きます。近い将来、地球軌道に宇宙ステーションが作られるのでしょうか？　そんな未来を実現するための第一歩が月であると、私は疑いません」

いつしかバートはぐっと拳こぶしを握りしめていた。観衆も登壇者たちも全員が彼女の話に聞き入っている。

「今回、二一世紀博覧会が示した未来には、ひとつだけ誤りがあります。それは、共和国とその親しい国々が入っていないことです」

申し訳なさそうに頭を下げるレフとイリナに、サンダンシアは温かく語りかける。
「しかし、私は思います。やがて訪れる本物の二一世紀では、ひとつの宇宙ステーションで、世界各国の皆さんが甘いお菓子を分け合って食べていると」
気が楽になった様子のレフとイリナは希望を込めた微ほほ笑えみを返す。
瑞々しい頬ほおを上気させたサンダンシアは両手でマイクを握り、秘めていた想いをひたむきに紡ぐ。
「連合王国と共和国。人間と新血種族と吸血鬼。みんな違います。しかし、共通するものもたくさんあるはずです。それが何なのか、今日、今すぐにはわからないとしても、明日、また明日と、ひとつひとつ、わかり合えるように対話をつづけませんか？　ときには誤解も生むでしょうけれど、いつかは理解できるはずです。なぜなら、私たちは、ひとつの宇宙に浮かぶ、ひとつの惑星ほしで育ち、より良い未来を生きたいという同じ夢を見ているのですから」
観衆も登壇者も惜しみない拍手を送る。
サンダンシアは一礼すると、一転して深刻さを帯びた声で話しはじめる。
「……ですが、今、この星そのものが死に至るほどの危機が近づいています。人類の歴史における最大の試練です。宇宙開発が中止になるどころか、明日が来なくなるかもしれません」
女王の放った言葉は観衆から熱気や笑顔を奪い、会場には底知れぬ恐怖がじわりと波打つ。
「そして、この危機は、私にはどうすることもできません」
重すぎる宣告にバートの心臓がどくんと鳴る。背中に汗が噴き出る。カイエがスカートの生地を強く握りしめた。

観衆の視線を一身に受け止めるサンダンシアは眉まゆ根を寄せて声を潤ませる。
「世界の運命は、両国政府の決定にかかっています」
異様な緊張が会場に満ちる。吐きそうなほどの不安にバートは襲われる。バートだけではない。皆みなが皆、口を閉ざして凍りつく。
逃れようのない絶望が支配するなか、サンダンシアは深く澄んだ瞳ひとみに光を灯す。
「皆さん。私は信じます」
揺るがぬ決意を籠め、彼女は強く祈る。
「聡そう明めい英知の人々により、冷静な判断がくだされることを。危機はまもなく回避され、この星が死から逃れることを。太陽は明日も昇り、生命の活力を与えてくれることを。月は明日も昇り、穏やかな眠りを与えてくれることを」
この場にいない国民へ届けと、世界中の市民へ響けと、サンダンシアはステージの最前に進む。
「そして私たちは挑戦と冒険を続けて、いつの日か月へ到達し、その先にすばらしい二一世紀が訪れることを、私は信じます」
覚悟を定めた彼女が清すが々すがしく微ほほ笑えむと、観衆は総立ちになり、割れんばかりの拍手を送る。バートもカイエも、レフもイリナも、そしてほかの登壇者も若き女王を称たたえる。
「ご清聴、ありがとうございました」
サンダンシアの潤んだ瞳や金色の髪が照明を浴びて煌きらめく。まばゆい光のなかに凛りんと立つその姿は、美しいだけの一八歳の少女ではない。
太陽の如ごとき気高き君主だ。

カンファレンスを終えて外に出ると、霧雨は上がっていた。
晴れ渡る青空をスペースタワーが貫き、柔らかな春光に濡れたアスファルトが照り映える。さわやかな風がモノレールといっしょに未来都市を吹き抜ける。
麗うららかな春の日だが、キッシング長官に厳重注意されたバートの心はどんより曇っている。左遷される覚悟はしたが、当然Dルームで働きつづけたい。カイエも注意は受けたがバートに比べれば軽いものだ。
「減給で済めばいいけど……」
バートがしょげると、ジェニファーは愉快痛快に笑う。
「税金分は楽しませてもらったわ」
「本当に他ひ人と事ごとなんだからさ……」
口を尖とがらせるバートの肩をカイエがぽんと叩たたく。
「でも、いいこともあったね。月面着陸方式や共同開発が進みそうで。夢に向かって一歩前進だよ」
「月まではまだかかりそうだけどね。帰ったらさっそく手書きじゃない提案書を仕上げないと」
ふつうに話しているが、核戦争の危機は好転の兆きざしすらない。明日がどうなるかもわからないが、前を向いて歩いて行くと心に決めた。

ホテルに戻ると、ロビーで共和国の皆と別れの挨あい拶さつをする。
別れ際になり、ようやくバートとカイエは『宇宙への旅路』にレフとイリナのサインをもらう機会を得た。
レフがサインをしながらバートとカイエに訊たずねる。
「じつは改訂版を出す予定があるのですが、あなたたちとの出会いを書いてもいいですか？」
「もちろんです！」

ふたりが快諾すると、イリナは声を潜める。
「あまり期待しないほうがいいわよ。検閲でひっかかったら削除されちゃうから」
「検閲……？」
不穏な言葉にバートが引っかかると、レフがそっと目配せする。
「質疑応答での発言について、ナタリアさ──あ、えっと、保安員から厳重注意を受けたんです」
ナタリアというのは終始怖い顔をしていた〔運送屋〕の女性だろう。レフが注意を受けたと知り、よろこぶべきではないが、バートは少しだけ心が弾む。
「じつは僕も同じで──」
上司に叱しかられたことを伝えるとレフはアハハと笑う。
「お互い、やってしまいましたね」
するとイリナがバートをじろじろと見る。
「あのときのバートさん、『雪解けのレフ』みたいだったわ」
「え？　それは……」
当惑していると、イリナが付け加える。
「熱くなりすぎて殴らないようにね」
ニヤリと笑う彼女の脇腹をレフが軽く小突いた。
「ひゃっ……！」
イリナは飛び上がってレフを恨みがましい目で見る。
しかし殴ったとはいったい？　バートが訝いぶかしんでいると、レフは「なんでもないですから」とイリナの口を手で塞ふさぐ。
カイエがバートの耳元でささやく。
「ふたりでケンカしたのかな……？」
「仲良さそうだけどね……」
いずれにせよ、彼らを見ていると人間と吸血鬼の違いなど些さ細さい

な問題に感じる。
　自分とカイエもそうなるといいのだけれど。そう思ってカイエを見ると、朗らかに頷うなずかれた。
　すると、レフとイリナがバートとカイエに一歩近づき、本を渡しながら小声で言う。
「ここだけの話ですが……我らがチーフのロケットで、あなたたちのシステムが積まれた宇宙船を打ち上げて、月に到達できたらと思います」
　二国での共同開発。
　信じられない提案にバートもカイエも言葉が出ず、目をくりくりさせていると、イリナも密ひそやかに告げる。
「宇宙飛行士は、私とレフと、アーロンさんよ」
　共和国のふたりと夢を共有できて、胸がいっぱいになる。
　カイエは自分の頭を指して微ほほ笑えむ。
「今の提案、記憶しましたからね」
　バートは両手の拳こぶしを握りしめる。
「僕も、ぜひそうしたいです！」
　言うのは容易いが、極めて困難であり、叶うかはわからない。
　けれど想いはひとつだ。
　そして宇宙に夢を見る四人の同志は手を重ねる。
　そのとき、バートは根拠のない確信を得た。
　この願いは必ず叶う。
　近い将来、現実になると。
　すると何かを察したらしきナタリアが凍てつく視線を送って来たので、レフとイリナはすっと離れる。
　ナタリアは時計を指し、話は終わりだと示す。
　もうすぐお別れだ。
　レフは寂しげな笑みを浮かべる。

「いつの日か、あなたたちが共和国に来る機会があれば、プリャーニクを食べて、茱グ萸ミの実の浸酒ナストイカで乾杯をしましょう」
　レフがイリナをチラリと見ると、イリナが悪戯いたずらっぽく付け加える。
「ゴロツキアザミの蜂はち蜜みつ入りのね」
　そんな飲み物は連合王国にはなく、カイエが首をかしげる。
「なすといか……？」
　イリナは得意げに人差し指を唇に当てる。
「魔法のお酒よ。それを口にすると無重力体験ができるの。あなたたち地上にいる技術者でもね」
「僕らでも……？」
　きょとんとすると、レフとイリナは目を細めるだけで何も答えず、荷物を手にする。
「さて、残念ですが、そろそろ行かなくては」
　そこでバートはカイエに合図を送る。
「カイエ、見送りだ」
「ええ、座りましょう」
　ふたりしてその場にしゃがみ、すぐに「出発だ！」と立ち上がる。すると、レフとイリナが顔を見合わせて驚くので、バートは不安になって訊たずねる。
「本に書いてあったんですけど、見送りの挨あい拶さつってこれでいいんですよね？」
　レフとイリナは楽しげに笑う。
「正解です」
　しかしカイエは不思議そうに首をかしげる。
「座って立って……どういう意味なんですか？」
　問われたレフは眉み間けんにシワを寄せる。

「意味は不明です」
　その答えに、バートもカイエも口をポカンと開ける。
　イリナが呆あきれたように肩をすくめる。
「ばかばかしいでしょ？　でもうれしいわ」
　理由はなくても、気持ちさえ伝わればそれでいいのかもしれない。
　こうして旅立ちの儀を終えると、レフとイリナはバートとカイエに向き合い、ピシッと背筋を正す。
「それでは、また会いましょう！」
　さわやかな笑顔を残し、共和国の宇宙飛行士は帰国の途についた。

マリンシティでの広報業務を完了したバートとカイエは、ライカ・クレセントへと空路で向かう。

薄紫の夜が訪れ、飛行機の窓の向こうにはきれいな月が昇っている。

バートの隣席ではカイエがすやすやと寝息を立てている。そういえば、昨夜はいろいろあって全然眠っていない。

小指の傷にできたかさぶたが少しむず痒がゆい。

──何が起きても、僕は君といる。

何も起きなければいい。それが一番だ。

平穏無事な明日が訪れるように月に祈り、バートも眠ることにする。

カイエの身体からだからずり落ちたブランケットをかけ直すと、肘ひじ掛かけに置かれた彼女の左手が目に入る。

細い小指に小さなかさぶたができている。

バートはそっと自分の左手の小指を絡める。

そして、静かにささやく。

「絶対に叶えよう……」

「ん……」

眠っているはずのカイエの口元が、ほのかにほころんだ。

終奏　Ｏｕｔｒｏ

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

　カンファレンスから五日後、未曽有の危機は核戦争寸前のところで回避された。
「共和国が『囚とらわれの島』からミサイルを撤去すれば、連合王国も共和国南方にある同盟国からミサイルを撤去する。そして今後『囚われの島』へ侵攻しないことも約束する」という交換条件の密約が結ばれたのだ。
　新聞にはこう書かれた。
『二一世紀博覧会のカンファレンスにおける、女王陛下の勇気ある挨あい拶さつが世界の危機に警鐘を鳴らした。これにより、両国間の緊張は緩和され、宇宙科学の共同開発は後押しされるだろう』と。
　最大の危機が回避されたとはいえ、まだミサイルは撤去されておらず、海上封鎖も依然としてつづいており、対立がなくなったわけではない。
　しかし世界は久方ぶりの落ち着きを取り戻した。
　有人宇宙船センターでの勤務に復帰しているバートは、ラウンジでカイエとコーヒーを飲みながら話す。
「ひとまず安心だね」
「ええ、バートの件も片付いたし、よかったわ」
　厳重注意を受けたバートは最低でも減給を覚悟していたが、始末書の提出のみで済んでいた。あとからジェニファーに訊きいた話では、サンダンシアがキッシング長官に直接働きかけてくれたらしい。ＡＮＳＡの巨頭も、さすがに女王には頭が上がらない。
　しかも、そもそも減給どころか、所内でバートとカイエの評価は上

がっていて、『月軌道ランデヴー方式』を推す仲間までできた。
　じつは以前から推したいと思っていた職員もいたのだが、組織間の軋あつ轢れきがあり、黙っているしかなかったという。そして、かつて荒野に葬られた科学者からも感謝の連絡が届き、役に立つ資料をたくさん受け取った。これをもとに計算を詰めて技術報告書を完成させれば、クラウス博士はもちろん、キッシング長官も承認するだろうとＡＮＳＡの各所で言われている。
　ただし、政府の科学諮し問もん委員会を納得させられるかどうかは、これからの自分たちにかかっている。コンピューターに不信感を抱いだく者たちを説き伏せねばならない。
　さて、やるぞと意気込み、バートとカイエがＤルームに戻ると、ミアが一通の手紙をふたりに差し出す。
「これ、本物……ですよね……？」
　ふだんは感情を表に出さないミアが珍しく動揺している。
　いったい何だとバートは手紙を見て、一瞬目を疑った。
「カイエ……！」
「あっ！」
　びっくりして口に手を当てたカイエはうれしそうに頬ほおをゆるめる。
　手紙にはサイン入りの写真が同封されている。
　宮殿の庭園で、自然な笑顔を浮かべてククーシュカを抱いているサンダンシアだ。

『こんにちは。バートさん、カイエさん。お元気ですか。
　万博のあと、私は王室秘書官に厳重注意を受けました。
　ですが、彼は私を女王として、そしてひとりの人間として認めてくれたようです。

夕食会のあと、おふたりと話したとき、ひどい宇宙熱をうつされたみたいです。
そのおかげでしょうか？
深く感謝しています。
ところで、この国の女王として生きるのは、潰つぶれそうなほどの重圧があります。
ですが、困難に挑戦するあなたたちに勇気をもらいました。
私も揺るぎなき信念を持ち、決然と生きます。
謙虚に振る舞うのではなく、堂々と胸を張り、助けを求める人々の力になります。
それが連合王国の太陽たる私の役目です。

それでは、輝かしい二一世紀へ向けて、誇り高き挑戦をつづけてください。
史上最も多くの危険を伴う偉大な冒険に、同じ夢を見る世界中すべての方々に、
太陽と月の祝福があらんことを。

アップルパイが好きな同志より。

アーナック連合王国女王　サンダンシア・ソフィ・アリシア』

〈了〉

あとがき

　こんにちは。
　今回は史実ネタの元ネタ解説です。
　まずは一～三巻について。ツイッターでいただいた質問に回答します。
　Ｑ．「吸血鬼が強者の怪物ではなく弱者で衝撃が走りました。元になった設定はありますか？」
　Ａ．近年の創作でさまざまな強い要素が付く前の、中世の吸血鬼像が元です（本文中でイリナがレフに突っ込んでる箇所）。牛乳好きや高所恐怖症は創作です。味覚がないのは担当さんの案です。
　Ｑ．「イリナのモデルになった人物はいますか？」
　Ａ．モデルはいますが、人物ではないです。一九六一年初頭、ソ連が実験で打ち上げたマネキン（イワン・イワノビッチ）と、アメリカが打ち上げたチンパンジー（ハム）の融合です。ソ連のマネキン打ち上げは極秘で、アメリカに傍受されたときの予防策として料理番組を流したのは実話で、一巻ではそのエピソードに酒を絡めてアレンジしました。
　Ｑ．「本書の影響で宇宙開発に興味を持ち、映画『アポロ１３』、『ガガーリン』、『ドリーム』など観ました。参考になった映画、小説、書籍などがあれば」
　Ａ．資料は絶版古書が多いので、手に取りやすいものを挙げます。
　映画『ＨＡＭ～チンパンジー　宇宙飛行士の物語～』……前述ハムのドキュメント。
　映画『ＳＰＡＣＥ　ＲＡＣＥ　宇宙へ』……コローヴィンとクラウス博士のモデルになった科学者の視点から見た宇宙開発競争。
　書籍『アポロとソユーズ　米ソ宇宙飛行士が明かした開発レースの真実』……両国が交互に描かれていて読み応えあり。

書籍『月をマーケティングする　アポロ計画と史上最大の広報作戦』……『ドリーム』と違う視点で描かねばと考えた末、広告塔にたどり着きました。

Ｑ．「三巻ラストの行進は実際にあった出来事ですか？」

Ａ．あれは創作ですが、当時はデモ行進が多く、アポロ計画に反対する団体がロケット発射基地に行進したり、公民権運動の大行進があったり、そういう時代性が根っこにあります。もしかしたら、記録に残ってないだけで、街の片隅で誰かがやってたかもしれません。

ちなみに行進を思いついたきっかけは、ステッパー（運動器具）をやりながらＡｉｍｅｒの『ＯＮＥ』という曲のＣＭを偶然見たからです。そしてライカ・クレセントのモデルはニューオーリンズですが、オーリンズ→フランス語でオルレアン→オルレアンの乙女ジャンヌ・ダルク→旗を持った異端の聖女……とつながり、つまりカイエのモデルはジャンヌ・ダルクです。

ここからは四巻の解説になります。ネタバレが気になる方は本編後にどうぞ。

今回の舞台となった万博は一九六二年四月から一〇月まで開催されたシアトル万博がモデルで、『宇宙時代』『二一世紀』というテーマやパビリオンの内容は現実のものに基づいてます。カンファレンスも開かれましたが、中身はアレンジしてます。

なお現実では、訪米して万博に行ったのはガガーリンではなく『二番手』の宇宙飛行士・チトフでした。また、連合王国の宇宙飛行が半年早く成功したように、核戦争の危機も早めてます。ちなみにケネディが万博の挨あい拶さつを「風邪」と偽って欠席したのは事実です。そして『囚とらわれの島』に向かった貨物船がガガーリン号だったのも本当で、「はえ～……（うわぁ）」と思いました。（現実の意図は不明で

す）

そして、宇宙開発の非軍事部門においては共同開発が締結されていたのも事実で、もしケネディが暗殺されず、フルシチョフが失脚しなければ宇宙開発競争はまったく違う道を歩んでいたとか？　このあたりにつきましては、あとがき後のエピソードを。

それから、サンダンシアという女王が登場しますが、今巻は彼女がケネディになる話でもあります。（ケネディの演説を汲み取り、登場人物のセリフの端々に入れました）。じつは一巻の脱稿直前まで、連合王国ではなく合衆国だったんです。そうするとアメリカすぎるので合衆国を連合王国に置換したんですが、大統領を首相に変え忘れた箇所がひとつ……（一巻の重版で直したんですが電子書籍は直らないそうなので、ここで訂正させてください）。

あと、本編に関係ないですが、シアトル生まれで科学に興味があるビルといえば誰でしょう？　少年の設定は架空ですが、彼も少年時代に万博を楽しんだそうです。

今巻も多くの方々の協力があり、出すことができました。

かれい先生。カバー絵が尊すぎて、それだけで月へ行けました。

田た端ばた様。ライトな部分に反応していただき、今巻はライトである確信を得ました。

そして応援してくださる皆さま。こうして四巻まで到達しました。いつもありがとうございます。

ところで、偶然にも、このあとがきを書いている今、ＪＡＸＡがアポロ計画以来の有人月面着陸機を開発する構想があるというニュースが発表されました。二〇三〇年頃の着陸を目指すという話ですが、もし本書を読んだことがきっかけで開発に携わる人がでてきたらすごいですね。

本書も現実も、月への道はどうなることかわかりませんが、同じ夢を

見ましょう。

シーフードピザを食べたい同志より。

牧まき野の圭けい祐すけ

第三楽章　吸血姫と翼竜

藍の瞳　Очи　индиго

東歴一九六三年九月一九日、藍あい白じろ色いろの夜霧が秋桜コスモスをしっとりと包む頃。

共和国の宇宙開発都市『ライカ44』にあるジャズバー『ズヴェズダ』にレフとイリナはやって来た。イリナがまだ一七歳だったとき、氷の湖でスケートをしたあと「生きていたら、二〇歳の誕生日を祝う」と約束したのだ。

煙草たばこの紫し煙えんが立ち込める店の片隅にふたりは対面して腰かけ、人生という意味を持つ蒸留酒ジーズニで乾杯する。

「誕生日おめでとう！」

「ええ、ありがと」

大人ぶって澄ましたイリナは蒸留酒を口にした瞬間、顔を歪ゆがめた。

「うぁ、舌が焼ける……」

「炭酸檸檬水レモネードに代える？」

早くも頬ほおが赤くなったイリナはツンと答える。

「平気よ。あと、念願のすぱーくりんぐわいんも飲みたいんだけど。いいわよね？」

「……わかったよ。今夜はおごるし、好きに飲みな」

べろべろになりそうだが、記念日くらいはいいだろう。

電気蓄音機のスピーカーから『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』が流れる。かつて連合王国を横断旅行したとき耳にしたヒット曲が、最近ようやく共和国に入ってきた。

万博のカンファレンスから一年と四か月が過ぎた。

その後、宇宙開発において、人工衛星や惑星探査など無人機の分野では数々の成果が生まれているが、有人飛行のミッションはランデヴーも宇宙遊泳も開発の真っ只中で、「史上初」から遠ざかっている。農業政策の失敗で経済状況は悪く、予算も潤沢でない。

連合王国も同じく苦心しているようだ。

月面着陸の方式は『月軌道ランデヴー方式』が正式に採用されていた。コンピューターに不審を抱く科学諮し問もん委員会をＡＮＳＡ上層部が説き伏せたと聞き、レフとイリナは祈りがつうじたことを心からよろこんだ。きっと、彼らがカンファレンスで見せた情熱が周りの人々を動かしたに違いない。しかし、まだまだ未完成という情報が入ってくる。

そして、共同開発は相変わらず具体的には進展していない。ただし両国の関係は改善の兆きざしが見られる。

核戦争寸前までエスカレートした危機を教訓として、部分的核実験禁止条約が調印された。もとよりゲルギエフは核で攻撃することは念頭になく、ミサイルを設置したのは抑止目的で、極秘裏に運搬していたのも革命記念日に大々的に発表するつもりだったからだ。

緊張が緩和し、一筋の光が差し込むように見えたが、そう易やすやすと事は運ばない。

連合王国に歩み寄るゲルギエフに対して不満を抱いだく一派がクーデターを画策。リュドミラが気づいて厳正な対処をしなければゲルギエフは失脚していただろう。片や連合王国では首相暗殺を狙ねらう者が出現。実行前に防がれたが、犯人が自殺したので真相は闇やみの中だ。

ひとつの救いは、国際関係学の権威が共同開発についてこう述べたことだ。「宇宙空間はしがらみがなく、地球上のどこよりも平和利用しやすいため、両国が己の利益を考えたとき、協力できる可能性が十分にある」と。

　その論考どおり進めばいいのだが……などとレフが考えながら飲んでいるうちに、イリナはぐでんぐでんに酔っ払っていた。
「れーふー。すぱーくりんっ、おーいしぃ」
「ほどほどにな……」
　酔うと舌足らずな甘い声になるのは二〇歳になっても同じだ。
　彼女と出会ってもうすぐ三年になる。たった三年だが、ふたりを取り囲む状況は激変し、世界は大きく動いている。そんななか、外見は大人っぽくなっても中身は無む邪じや気きなままの彼女といるとレフは安心感を覚える。
　じっと見ていると、イリナに朱あかい瞳ひとみを向けられた。
「じろじろ、じろじろ……何よー」
「ああ、俺も同じの飲もうかなって」
　レフもスパークリングワインを飲むが、五ツ星ホテルで飲んだそれとは比べものにならないほど渋くて酸っぱい。
　しかし果たして、連合王国のふたりと交わした約束は叶うだろうか。コローヴィンの設計したロケットで、彼らの国の宇宙船を飛ばし、両国の宇宙飛行士が月面を目指す。
　軽やかなジャズに耳を傾けながらレフが夢想に耽ふけっていると──
「──店員さーん、すぴりとぅす！」
　イリナが勝手に注文した。
「ちょ、それはダメだ！」
「好きに飲めって言ったよー？」
　レフの制止は無視され、アルコール度数九六パーセントという最凶の蒸留酒が運ばれてきた。

　泥酔してぐにゃぐにゃになったイリナを背負って、レフは共同宿舎へ

向かう。夜も更けており、深い霧に包まれた並木道には人影がまったくない。
「ふらい……ゆー、とぅ・ざ・むー……ん♪」
　イリナはレフの肩に頭を乗せて半分眠りながら、月へ連れて行くと口ずさんでいる。
　それは俺の台詞せりふだと、レフは心のうちで言う。
　彼女にとって月へ行くことが人生だ。なんとしても連れて行ってやりたい。しかし、地上勤務が中心になっている現状では叶えてやれるかどうか。そして、レフはコローヴィンの体調も心配だった。彼は、以前レフが宇宙へ飛ぶ直前に倒れてしまったが、重い病に冒されているうえに無理がたたり、近頃はずっと顔色が悪い。
　もやもやした気持ちを抱かかえながら夜霧の底を歩いていると、イリナがふっと耳もとでつぶやく。
「ねー、れふ」
「ん……？」
「月がきれいだよー」
　レフは天を見上げる。
　並木道の先に大きな月が輝いている。夜霧の粒子ひとつひとつが月光を浴びて藍あい白じろ色いろに輝き、宙そらと地上の境目が曖あい昧まいになり、並木道はまるで月への滑走路のようだ。
「このまま月に行けそうだな……」
　レフがつぶやくと、背中にいるイリナが靴でレフの尻を強く叩たたく。
「よしっ！　れふー！　月まで走れー！」
「痛っ！　蹴けるな！」
「ほら！　私を月まで連れて行きなさい！」
　気高き月の住民ノスフエラトウに魂を蹴り飛ばされたレフの心に火が

点つく。
「落ちるなよ！」
　地面を蹴り、全力で駆け出す。
　息のつづく限り、彼女と宙を目指す。
　連合王国で誓った約束を果たすまで、夢見た明日が来るまで走り続ける。

　──この先に、まさか史上初の悲劇が口を開けているなど、レフは想像もしていなかった。

〈The challenge goes on...〉

電子特典

吸血鬼ヒロインコラボ記念！　イラスト

美少女吸血鬼YouTuber

赤月ゆに 命運見届け中!!!!

「おのれ人間……やはり下等種族……
と思わずに済むのかな!?人間の可能性が見たい!」
〔東京都・1XXX歳・吸血鬼〕

ガガガ文庫

©Akatsuki Uni

牧野圭祐
Keisuke Makino

ライトノベル以外にもゲームやドラマなど執筆。毎巻ここに食べ物ネタ書いてますが、今はアメリカ流ベルギーワッフルが食べたいです。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
月とライカと吸血姫　４
吸血鬼ヒロインコラボ記念！　イラスト付き特別版

２０１８年９月28日　電子書籍版発行

者　牧野圭祐

人　立川義剛

人　星野博規

集　田端聡司

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１８年９月24日　初版第１刷発行

©KEISUKE MAKINO 2018 ISBN978-4-09-451752-1

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。

GAHO
ガガガ
No.137
SEPTEMBER 2018
ガガガ文庫
9月刊
絶賛発売中
!!!
ガガガの秋は今年も豊作!!
大きく実った
人気作をご堪能あれ!
TVアニメ放送中の
大人気作、
ここに完結!!
裏面にも
情報満載!
定価:本体593円+税
著者
コメント
七星のスバル、ラストバトル
です。旭姫はログアウトで
きるのか。彼らの物語を最
後まで見守ってください!
旭姫を取り戻すため、
ついにグノーシスの本拠
"狭間"に突入するスバル。過去と未来、
ゲームとリアル。すべてが交わる終着点で、
彼らが見出だす"答え"とは――。
幼なじみたちの約束の物語、ここに堂々の完結!!
[七星のスバル7]
著:田尾典丈 イラスト:ぶーた

定価：本体667円＋税

著者コメント

完結です！ご愛読ありがとうございました！

ルカとヴィヴィは、ワールド・トリガーを起動、
大地の沈降が始まった。二か月後には
断絶した二界の境界が消え、
未曾有の虐殺が始まる！
命を捨てて共和国の民を守ろうとする
ファニアとルカの最後の闘いの行方は!?

［やがて恋するヴィヴィ・レイン7］

著：犬村小六　イラスト：岩崎美奈子

冷戦の緊張状態が続き、宇宙開発が行き詰まるなか
開催された万国博覧会。広告塔であるバートたちは、
ついに共和国の英雄二人と出会う。
宙に焦がれる二大国の若者たちは
何を想い、語るのか。
宙と青春の物語第四幕！
そして、
宙を夢見る
彼らは出会う。
定価：本体630円＋税
著者コメント
舞台は万国博覧会。ついに両陣営の英雄が対面します。科学の祭典での交流、そして女王も絡むまさかの展開をお楽しみください。
［月とライカと吸血姫4］
著：牧野圭祐　イラスト：かれい

修学旅行中、クラスの男子と仲良くなるためのミッションを高鷲から言い渡される業平。一方、愛河からは二人っきりでの京都観光に誘われる。恋に、友情に……悩める残念系異能力者の青春未満ラブコメ第5弾！

残念系異能力者、ネクストステージ突入！

定価：本体593円＋税

著者コメント

今回はぼっちには恐怖の修学旅行ですが、今の業平なら乗り越えられる……はず！ そして、コミカライズが決定いたしました！ ご期待ください！

［物理的に孤立している俺の高校生活5］

著：森田季節　イラスト：Mika Pikazo

ガガガブックス
GAGAGA BOOKS
「魔王が父親なんて認めないわ！」
魔王と女勇者母の電撃結婚により、かつての宿敵が義理の父娘に!?
のんびり勇者母、思春期勇者、子育て初心者魔王の新米家族。
果たして魔王は、無事温かい家庭を築けるのか?
異世界式アットホームコメディ開幕☆
定価：本体1,200円＋税
著者コメント
再婚した結果、年頃の義理の娘（しかも前まで戦ってた女勇者）ができてしまった魔王が、幸せな家庭を築くべく、悪戦苦闘するお話です！魔王が魔王なのに健気です！
魔王です。女勇者の母親と再婚したので、女勇者が義理の娘になりました。
著：森田季節　イラスト：すし＊

『七星のスバル7』刊行記念

ついに、堂々の完結！

アニメキャスト陣・監督・田尾先生からのスペシャルメッセージ

to 《七星のスバル》

Seven Senses of the Re'Union

アニメも大好評の『七星のスバル』がいよいよ最終巻に!!
フィナーレを迎えるにあたり、
アニメ「七星のスバル」の声優さん＆仁昌寺監督、そして田尾先生からメッセージをいただきました!!

天羽陽翔役
高梨謙吾さん

「七星のスバル」最終7巻発売、おめでとうございます! いち読者としても、非常に楽しみにしていました。0巻の内容も読ませていただいて既に知っているので、**この物語がどう終わるのか、本当に気になって仕方がない数か月**でした。やっと読めると思うとワクワクしますね! ですが、一方でこれで最後なんだなと寂しくもあります。アニメの放送も佳境に入っていますが、合わせて原作もお手にとっていただければ幸いです! 宜しくお願い致します!

雀氷咲月役
鬼頭明里さん

七星のスバル原作完結おめでとうございます! 昔から、最終話や最終巻を見たり読んだりするのが寂しくてなかなか見られないので、スバルのみんなの物語が完結してしまうのは少し寂しいです…! 七星のスバルは、SF要素だったり、恋愛要素だったりが、良いバランスで合わさっていて、読んでいていろんな感情にさせてくれる作品でした! 個人的には**咲月に感情移入しすぎて辛いシーンが沢山あって、いい意味でしんどかった**です…!(笑)。完結と言うことで、また違った気持ちで読めると思うので、ぜひ改めて1巻から読み返してみようと思います!

空閑旭姫役
大森日雅さん

いよいよ完結編! 七星のスバル第7巻の発売本当におめでとうございます!! 私自身も**オーディションの頃から、ずっと一緒に原作を読ませて頂いていた**ので、寂しいけれどいよいよだなぁ♪という気持ちです。旭姫の願いだった、スバルのみんなが戻ってきて1つになって、旭姫を演じる身としても**本当に涙が出てくるくらい嬉しさが込み上げます**。原作ファンの皆様、本当にありがとうございます! 旭姫はスバルの皆がずっと笑って幸せでいる事を祈るような子です。どうかいつまでも多くの人に愛され続けますように。

御門貴法役
石川界人さん

御門貴法を演じています、石川界人です。この度、七星のスバルの原作が完結するとのことで、先生には心からお疲れ様でしたとお伝えしたいです。物語の冒頭から様々な伏線が張り巡らされ、ゲーム世界でのファンタジーやバトルの中で生まれる、**複雑な人間関係や陰謀に目が離せない作品**でした。終わってしまうのは寂しいですが、先生が完結まで紡ぎあげて下さったことに感謝ばかりです。本当にお疲れ様でした!

仁昌寺義人 監督

シリーズ完結おめでとうございます。田尾先生（ぶーた先生）にはアニメ化にあたってスタートから現在に至るまで多くの現場で意思疎通をさせて頂きました。安心して制作できる状況を作ってくださいまして感謝いたしております。現場の役得でお聞きしていた、**先の展開のあれこれがどのような文章でファンの方々に届けられるのか楽しみにしております。**

原作者 田尾先生より

無事、最終巻を出すことができてホッとしております。監督をはじめスタッフの皆様、声優の方たちの力で、アニメはこれ以上ないほど素晴らしいものになりました。生き生きとしたキャラに力を分けてもらったおかげで、アニメに恥じない最終巻が書けた気がします。〝スバル〟の戦いを、彼らの生き様を、最後の1ページまで見届けてもらえれば幸せです!

キャストさん、監督さん、そして田尾先生、熱いメッセージをありがとうございます! たくさんの方々に愛された『七星のスバル』、果たしてどんなラストを迎えるのか…! ぜひその目で確かめてくださいね!

※田尾典丈・小学館／「七星のスバル」製作委員会

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

10月刊 10月18日ごろ発売!!

[俺、ツインテールになります。16]
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩
死の宣告を受けたトゥアールに心を強くもってもらうため、総二たちはなんでも要求を聞いてあげようとするが……。

[黒川さんに悪役は似合わない]
著:ハマカズシ イラスト:おつweee
真面目が売りの高校生・蝶野倫太郎が、生徒会長候補のために悪役に？ 波瀾万丈のマッチポンプコメディ!

[弱キャラ友崎くん Lv.6.5]
著:屋久ユウキ イラスト:フライ
日南、菊池さん、みみみ── あの日の彼女たちの想いを描く、初の短編集が登場！ 6巻と7巻の間をつなぐあの子の気持ちも……？

[NGな彼女。は推せますか？]
著:海津ゆたか イラスト:前屋 進
「俺の理想のアイドルになってくれ！」「え、NGですぅ…！」最強ドルオタが残念地味っ子をプロデュース!? アイドル育成系ラブコメ開演☆

[ピンポンラバー 2]
著:谷山走太 イラスト:みつつばー
卓越学園ランキング1位の男が海外遠征から凱旋！ その練習パートナーを選出するべく翔星たちは体育館に集められる。

[前略、殺し屋カフェで働くことになりました。]
著:竹内 佑 イラスト:イセ川ヤスタカ
そこは、殺し屋を営む女の子たちが過ごしているらしい一風変わった喫茶店。そんなところに拉致された俺は……!?

[魔法少女さんだいめっ☆2]
著:栗ノ原草介 イラスト:風の子
おんぼろ遊園地の魔法少女ランドを復活させるため、満咲とハルは散華に協力を仰ぐが……？ マジカル☆夢追いラブコメ第2巻!

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。⑬]
著:渡 航 イラスト:ぽんかん⑧
2か月連続刊行！ 大人気シリーズが13巻、14巻にてついに完結。苦く切ない青春群像劇のラストをお見逃しなく!

11月刊 11月20日ごろ発売!!

[出会ってひと突きで絶頂除霊! 4]
──著:赤城大空 イラスト:魔太郎

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。⑭]
──著:渡 航 イラスト:ぽんかん⑧

[友人キャラは大変ですか？6]
──著:伊達 康 イラスト:紅緒

ガガガブックス
[最強職≪竜騎士≫から初級職≪運び屋≫になったのに、なぜか勇者たちから頼られてます3]
──著:あまうい白一 イラスト:泉 彩

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

大人気タイトル最新刊ついに登場!!!!!

［弱キャラ友崎くん Lv.6.5］
著:屋久ユウキ
イラスト:フライ

［やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。⑬］
著:渡 航
イラスト:ぽんかん⑧

［俺、ツインテールになります。16］
著:水沢 夢
イラスト:春日 歩

※イラストはすべて既刊のものです。

ガガガ文庫の「最新刊」が電子書籍でもすぐ読める!!

ガガガ文庫「イラスト完全版」電子書籍 同月発売してます!

「Amazon Kindleストア」「紀伊國屋kinoppy」「BOOK☆WALKER」
「楽天kobo」「iBooks」などで配信中!! 今後もどんどん取扱店拡大予定です!

作品内のカラー口絵イラストやモノクロイラストを全点再現!

現在、ガガガ文庫の最新刊（毎月18日頃発売）の電子書籍が、その月の最終金曜日に配信中。気になる続刊や話題の新刊がすぐに電子書籍でもお楽しみ頂けます。

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

(林)は学生時代、飲み会中にたびたびワープ能力を発揮しました(失踪ともいう)。

質問 **遅刻しそうになるといつも、ワープ能力がほしいなあと思います。もしひとつだけ特殊能力を手に入れられるなら、どういう能力者になりたいですか?** (たかじん・北海道・19歳)

●**その発想天才か……**海津ゆたか先生☞風使い。まず、名前がカッコいい。そして、パンチラ見放題だぜ!!
喜多川 信先生☞あらゆる燃焼をコントロールする特殊能力者となり、内臓脂肪を焼き尽くしたいです。
酒井田寛太郎先生☞霊視の能力が欲しいです。いるかいないか分からない幽霊に怯えるよりは、いっそ、はっきりと認識して安心したいのです……。
ますもとたくや先生☞新幹線の通路側に座っても指先でスマホを充電できる能力者になりたいです。

●**異能力作家……**今慈ムジナ先生☞桁外れの集中力。リミットレスって映画がそんな感じの話です。でも主人公、作家を即行で辞めるんだよね……。
牧野圭祐先生☞寝てる間に執筆してくれる七人のこびとを召喚したい。
山川 進先生☞毎月のガ報アンケートで面白い回答ができる能力が欲しい。

●**敵に回したくないです……**石川博品先生☞やはり世の中から戦争や貧困をなくす能力者になりたいですね! あとはおなかを壊しやすいので腸内の便を気に食わない奴の腸内に瞬間移動させる能力があればいいなと毎日思ってます。
森田季節先生☞不老不死(首切られても再生する系の)。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

疑問質問なんでもござれ!

ガガガくん通信!!!

Twitterやハガキでボクへの質問を大募集ダヨ!

GAGAGA

Q:平成最後の夏、ガガガくんは充実してましたか?
(えるびすこ・22歳・熊本県)

A:ガガガくん、今年は暑すぎてずっとクーラーの効いた部屋でガガガ文庫読んでぐーたらしてたヨ。これはこれで楽しかったけどサ。もっとこう…『ヒイラギエイク』みたいな夏にしたかったナ。今年の夏が充実してたみんなも、そうでなかったみんなも、ガガガくんと一緒に『ヒイラギエイク』読んで平成最後の夏の、エモい名残を感じようゼ。

海津ゆたか
イラスト:やすも

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中!
このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

コミックス 魔王です。女勇者の母親と再婚したので、女勇者が義理の娘になりました。

早くもコミカライズ決定!!!

「マンガワン」にてコミカライズ連載が今冬よりスタート!
新米異世界家族の物語は漫画でも見逃せない!

原作:森田季節
キャラクター原案:すし*
漫画:郁橋むいこ

コミックス 物理的に孤立している俺の高校生活

残念系青春未満ラブコメ、コミカライズ企画進行中!

重版ゾクゾクの人気シリーズ! 厄介な異能力を抱えた高校生たちの青春模様を完全漫画化! 続報はガ報、ガガガ公式TwitterやWIREをチェック!

著:森田季節　イラスト:Mika Pikazo

TVアニメ されど罪人は竜と踊る

Blu-ray第4巻が9/28に発売!

TVアニメ「され竜」の最終話までを収録したBlu-ray第4巻が発売! 最高のフィナーレをその目で! ●価格9,500円(税抜)

©浅井ラボ・小学館／「され竜」製作委員会

TVアニメ 七星のスバル

Blu-rayvol.1が9/24に発売!

好評放送中の「七星のスバル」Blu-rayがついに発売! ファン垂涎の初回特典も要チェック!

●価格7,777円(税込み)【Amazon.co.jp初回生産限定特典】
❶キャラクターデザイン・総作画監督の山本由美子による描き下ろしジャケット❷声優による第1話のオーディオコメンタリー❸ノンテロップオープニング❹空閑旭姫(CV:大森日雅)キャラクターソング❺オリジナルサウンドトラックCD(part1)❻原作者田尾典丈による第1～3話解説コメント❼アニメ設定集(part1)

©田尾典丈・小学館／「七星のスバル」製作委員会

第13回 小学館ライトノベル大賞

ゲスト審査員は浅井ラボ先生

大賞	ガガガ賞	優秀賞	審査員特別賞
賞金200万円	賞金100万円	賞金50万円	賞金50万円
デビュー確約!!!	デビュー確約!!!	デビュー確約!!!	デビュー確約!!!

締め切り 2018年9月末日(当日消印有効) 詳しくはガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREをご覧下さい。▶http://gagagabunko.jp/

Webでの応募も可能! まだまだ間に合うぞ!

GAGAGA WIREの小学館ライトノベル大賞ページから専用の作品投稿フォームにアクセス、必要情報を入力して投稿してね。

※データ形式は、テキスト(txt)、ワード(doc、docx)のみとなります。

気になる 選考スケジュール公開!!!

無事、締切までに応募した後は、審査の発表が気になりますよね?
そこで、これからの第13回小学館ライトノベル大賞のスケジュールをご案内します!

12月 1次通過者発表

1次通過者はガガガ文庫公式HP「GAGAGA WIRE」で発表予定!
更新日は要チェック! ガ報では発表されませんのでご注意ください!

2019年1月 2次通過者発表

こちらはガ報、WIREの両方で発表します。ガ報ではこのコーナーで、WIREでは「小学館ライトノベル大賞」のページでお知らせします。

2月 最終選考開始

第13回ゲスト審査員を務める浅井ラボ先生とともに、最後の選考に入ります!

3月 最終選考結果発表

ガ報とWIREで受賞者を大発表! どんな新しい才能が選ばれるのか!?
応募作品は改稿を重ね、デビュー作として刊行!

※スケジュールは変更になる場合がございます。ご了承ください。

書店員さんとガガガくん

GAGAGA ガガガくん

今月の書店員さん

暑い暑い夏が終わって、季節は読書の秋!! まだ知らない一冊を探しに、書店さんにGO!!

GAGAGA SUPPORTER SHOP

コミックとらのあな池袋店A 安達圭一朗さん

住所:東京都豊島区東池袋1-1-2 高村ビル6F
電話番号:0570-031-400
営業時間:10:00~23:00
定休日:なし
URL:https://www.toranoana.jp/shop/ikebukuro/index.html

アニメ化作品や新刊をコーナーなどで大きく展開していますので是非当店へお越しください!!

安達さんのオススメ本

魔法少女さんだいめっ☆

努力と根性が才能を超える!「好き」という情熱が少女を突き動かす王道ストーリーが心にグッときます!

▶大量の平積み&手書きPOPで、未読作品でもつい手に取りたくなってしまう棚だネ!!

編集後記

- 新しく編集長に就任しました!「できっこないを やらなくちゃ」の心構えでとにかくやってみようと思います(☆)
- 8年ぶりに編集部に復帰しました! こんなことってあるんだな! うれしいです、頑張ります!(湯)
- 新編集長(☆)とベテラン(湯)さんによる新体制ガガガ文庫が始まるよ! ワクワクするよ!(濱)
- (湯)さんと(岩)の名字の下がかぶっていて、名前呼ばれる度に二人とも「はい」ってなります。名前かぶり四天王(田中・佐藤・鈴木・高橋)の気持ちを初めて知る2018秋。(岩)
- 新編集長(☆)さんと、ガガガ文庫の大先輩たる(湯)さんのもと、気分新たにがんばります!(小)
- (湯)さんよろしくお願いします! ガガガ創刊メンバーの一人、というパワーワードがカッコイイ!(田)
- (湯)さん、おかえりなさい! 電話で(岩)と(湯)宛を聞き分けられるようになりたい。(林)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛